讃岐高松石清尾山石塚の研究

京都帝國大學文學部
考古學研究報告 第十二册

讃岐高松石清尾山石塚の研究

梅原末治

第一章　序說

我が國に於ける上代墓制の研究は、大正のはじめ宮崎縣西都原の古墳群が學術的に發掘調査せられた前後から、各地に於ける遺跡の精密な調査を行ふ機運が動いて、それが實際上の知識を著しく豐富にし、墓制のうちに見られる通有性が明確の度を加へると共に、また地方に依る特殊相の存在と、其の性質とが前者を通じて考へられて、從來の面目を更新することになつた。北九州に於ける裝飾古墳の調査や、畿內を中心とする支那古鏡發見の古式墳墓の探査等は、近時の關東に於ける埴輪樹物を表飾した古墳の發掘調査の結果と共に、それぞれの特色ある構造の究明が、同時に本邦古墳墓の一般性質の考査に重要な寄與をなした二三の著例とする。併し斯く精確な遺跡の示す處に基いて、廣く全國の古墳を顧みると同樣に調査を新たにすべくして、なほ不充分な觀察記載のまゝに遺された顯著な遺跡の少くないことが認められる。讃岐國高松市外の石清尾山上にある石塚群の如きは、墳の構造の特異な點と、副葬品の上から先づ擧ぐ可き此の一例であつて、其の徹底的な調査は我が上代墳墓の考究に向つて一の新しい基礎を提供するかと考へられるものがある。

此の石清尾山石塚群は早く德川時代に於いて、其の一基に存する石棺に依り地方人士の注意に上つたものであるが、[1]廣く其の存在の學界に知られるに至つたのは、明治四十三年に行はれた一群中の猫塚發掘以來の事である。猫塚の發掘は極めて非學術的なものであつたが、後出土の遺物が東京帝室博物館の有に歸するに及んで、うちに含まれた特殊のものが學者の興味を惹いて、[2]大正二年に谷井濟一氏の踏査となり、[3]其の石塚なる構造が學界の一部に傳へられた。ついで笠井新也氏は「石塚の研究」なる論文を發表して、[4]本遺跡を其の對象の一とし、こゝにはじめて性質に關する論述を見て、盛土墳を通則とする我が古墳の中で、それが異例をなすものであることが明になつた。爾來考古の士の遺跡を訪ふもの多きを加へ、其の間同地出身の長町彰君の遺跡の實際に關する一層詳しい報告が公にせられ、[5]當時著しい進境を示した銅鉾銅劍を中心とする我が石金併用期文化の研究から、此の猫塚の遺物が考へられることになつて、遺跡の性質爲に頗る明確の度を加へたのである。[6]吾人は其等の論著に導かれて、大正十二年の冬香川、岡山兩縣下旅行の際、同好の士上原準一君の東道に依つて、永山卯三郎氏と共に實地に臨み、主要な遺跡をば見學したことであつたが、當時の所見では此の石塚に關する從來の調査がなほ基本的なものでなく、特色ある構造の看過せられた點が少くない事を知り、其の調査を新にすることに依つて、はじめて石塚の性質が正しく解釋され、それがまた上代墓制史の考究に好資料を齎すであらうと考へた。たゞ此の種の基礎調査は多大の勞力と經費とを要する爲にこれが實行を躊躇せしめた。然るに本學の濱田教授はまた右の遺跡に興味を持たれて、其の調査を慫慂せられ、我が考古學教室の事業として、昭和六年春にほゞ滿足すべき調査

を遂行することの出來たのは幸とする所である。

吾人の石清尾山古墳群の調査は、濱田教授の實地指導の下に、本學講師島田貞彦、同副手文學士有光教一兩君の協力を得て、其の年の四月十日から十七日に至る八日間を費し、先づ基本事項の調査を行ふた。此の間香川縣の當局が社會課屬神保鉄雄氏を派して、始終作業を助けしめられたのをはじめ、高松高等商業學校教授文學士寺田貞次氏、香川縣史蹟名勝天然紀念物調査會委員岡田唯吉氏等がまた種々の便宜を與へられて、從來知られた遺跡の分布並に主要遺跡の實測等を了し、一部分それに關聯した事項にまで觀察を及ぼすことが出來た。依つて翌昭和七年二月東京の帝室博物館に就いて猫塚出土遺物の調査を遂げ、其の結果を公にすべき準備をほゞ終へたのである。然るに寺田教授は吾々の此の調査に特に關心を持たれて、其の作業を助成する爲に、爾來同地域の踏査を重ね、新遺跡の檢出其他種々の興味ある報告を屢〻寄せられたから、同年九月上旬再び同地に臨み、前後六日間に亘り、是等の新しい古墳の實査と兼て前回の不備を補ふ機會を得、更に積石塚全般に亘る知見を擴めることになつた。これは同教授が吾人の請を容れて、遺跡所在地の地貌に關する覺書を寄せられた好意と共に、吾々の深く感謝する所である。此の間また上記の本遺跡調査者たる長町彰氏から種々の資料の提供を受け、上原準一氏が重要な遺品を示して其の發表の自由を與へられたことは、遺物の調査に當つて博物館當局、特に鑑査官後藤守一、同館員高橋直一兩氏の示された好意と共に吾人の銘記する處である。本編は是等の諸氏の厚意と當初の協力者たる島田、有光兩君の熱心、濱田教授の懇切なる指導の賜に外ならぬのである。

【註】(1)明和五年（1768. A. D.）二月の序ある增田休意の『三代物語』のうちに石船として其の石棺を錄してゐるのが其の一例である。なほ若林勝邦氏「石棺ノ內部ニ存セル彫刻ノ發見」（『東京人類學會雜誌』六六號）もある。

(2)『考古學雜誌』第二卷第三號所載「近時發見の珍品」其三、參照。

(3)高橋博士「銅鉾銅劍考」（二）（『考古學雜誌』第六卷第二號所收）所引、但し谷井氏は遂に報告を發表せられなかつた。

(4)笠井新也氏「石塚の研究」（『人類學雜誌』第三十二卷第一號所載）參照。

(5)長町彰氏は早く『考古學雜誌』第一卷第七號に「讃岐石淸尾山古墳」なる短編を載せて猫塚の發掘を報じたが、後調査を重ねて書かれたものを「讃岐國石淸尾山の群集墳殊に其積石塚に就て」（同誌第十卷第四第五兩册）とする。

(6)爾來發表せられた報告としては岡田唯吉氏の「石淸尾山大古墳群」（『香川縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第三册所載）があり、長町彰氏また「讃岐考古集錄」（『考古學雜誌』第十八卷第二號）に其の後の所見を追補せられたものがある。

(7)後日の覺としてこゝに吾々の調査の經過を註記して置く。

四月十日　此の朝梅原、有光兩人高松着、直ちに縣廳に出頭調査の打合せ後、石淸尾山に登り、石塚の分布概觀。

四月十一日　正午頃濱田敎授、島田氏德島經由高松來着、午後地貌比較研究の爲屋島踏査。

四月十二日　岡田唯吉氏の東道にて一行雨を冒して石淸尾山に登り、終日古墳群の分布狀態調査。

四月十三日　此の日より主要古墳の實測並に其の構造調査をはじむ。島田・有光・梅原の三名協力事に當る。神保氏參加、外に人夫一名。姫塚の實測を終へて、石船塚に及ぶ。

四月十四日　猫塚の調査實測に終日を費す。

四月十五日　石船塚の實測圖を完成して後、鏡塚、北大塚等の調査に從ふ。

四月十六日　島田有光兩氏稻荷山上の積石塚調査。梅原は比較研究の資料蒐集の爲に、上原準一君の東道により香川郡南部の古墳を踏査した。

四月十七日　此の朝島田氏歸途に就く。梅原は有光氏と共に前日同樣比較研究の資料蒐集の爲に坂出に至り、更に岡田氏の東道で善通寺町遠藤山古墳の石棺を調査した。かくて調査の後始末をして此の夜高松を引き上げた。

(8)此の再度の出張に於ける仕事の一は前回に作つた實測圖の修正であつたが、同時に猫塚の內部構造如何を確めることに特に意を用ひて、前後二日を費した。

第一節　石淸尾山の地形と地質[1]

〔圖版第一—第四〕

こゝに石淸尾山と呼ぶものは、讃岐國高松市の南に聳え、同市から香川郡弦打村並に鷺田村

に跨がつた一群の、傾斜の急峻なる山丘であつて、狹義の石清尾山なる山塊を中にして、東方栗林公園裏に聳ゆる紫雲山(稻荷山)と、別に南に連なる淨願寺山とのやゝ南北に細長い三個の山丘から成つてゐる。是等は右の主な個々の稱呼の外に、部分に依つて名稱を異にするものがあるが、(二)石清尾山が中核を形成し、兼てそれが東麓に鎭座する石清尾八幡社の神域の形をなした點から、總稱として此の名が廣く行はれるに至つたものと見える。

此の石清尾山は東方にある屋島をはじめ、前面海中の女木島(メギ)、男木島(ヲギ)、豐島(テシマ)並に西方の國府臺などと共に、地質學上山塊と稱するものに屬して、時には石清尾淨願寺山塊とも稱せられることがある。高さは通じて二〇〇米內外であつて、屋島の二七九米、女木島の二一六米に相近く、國府臺の四〇七米に比べると稍低いが、其の山頂が同樣に平滑であり、遠望すると等高の一臺地の樣に見え、而も通じて緣邊から急傾斜をなして、平地に下降するところは、讃岐中部の地形に特殊の景觀をなすものである。尤も本山塊の實際を見ると、それは屋島等と違つて既に一言した如く(一)栗林公園の背景をなしてゐる紫雲山(稻荷山、室山)の標高二〇〇米の部分、(二)其の西に並んで、うちに摺鉢形の凹所を有した最高峰二三二米の山塊、(三)それの南西に連なる最高二三九米の淨願寺山なる三つの部分から成つて、それ等が東西兩側は孰れも急な崖狀をなし、高さ一〇〇米弱の低い鞍部を以て連絡したものである(圖版第二)。此の鞍部の一つは紫雲山と石清尾山の一部とを結び、他は後者の一部たる所謂御殿山と淨願寺山とを連結してゐる。前者は俗に鳥打越(トリウチ)と云ひ、高松市姥ケ池から鷺田村土居の宮に通ずる峠をなし、後者は弦打村字御殿から鷺田村字北山浦に通ずる「切通し」に當る。これは豐島(テシマ)石層(角礫凝灰岩)を切り開いて細

道を通じたに基く名稱である。右の山塊の形狀は圖版第四に載せた南方からの遠望寫眞に依つて明確にせられる。

次に是等の山塊の成生は、屋島や飯野山などと同樣に、花崗岩類の基盤上を熔岩を以て覆ふたものであるとせられてゐる。現在其の基盤は石清尾山北方の東側を始め、御殿山の麓の上記の「切通し」、粟林公園の山の東端などの各所に露出してゐるが、他の大部分はそれを覆ふた熔岩で一の特色をなすものがある。此の熔岩は同樣な地形の屋島、女木島、男木島、國府臺などの熔岩と同質であつて、灰色乃至灰黑色の質の堅硬緻密な岩質をなし、含輝石、斜方輝石、安山岩とも稱せられ、俗にカンカン石卽ち讃岐石と呼ぶ類である。此の後者の稱呼から、近く佐藤源郎氏は新たに讃岐岩質安山岩と命名したが、[3] 高松邊では古銅輝石を含む點からして、古銅安山岩と言はれて、それが廣く行はれてゐる。此の山塊は形成後多年の浸蝕作用を受けて次第に削られ、現今の形になつたものであるが、其の中核をなす石清尾山上の凹部、卽ち俗に摺鉢谷と稱する處の如きは、其の形態が摺鉢の底の如くで一見噴火口跡の如く見え、また周邊の熔岩が此山一般に觀る岩質に比して多孔質であることから、或は爆烈火孔の名殘ではなからうかとの推測を加へしめる。併し一昨年實地を踏み、特に右の點に留意する所あつた佐藤源郎氏が

「摺鉢谷の中に立つて地形を回顧する時に、爆烈火孔なるやを疑はしめるが、併しこれは矢張り後に浸蝕作用によつて偶然形成されたものに過ぎないと思ふ。[4]」

と言ふて居る。從つてやはり一種の浸蝕谷と觀るべきであらう。

かく石清尾山の全體が熔岩質から出來てゐることは、形の上のみならず、山上の土壤に特殊

の樣態を示し、其處に於けるすべてのものに影響することを察せしめる。既に記した樣に東の稻荷山の背をはじめ、摺鉢谷を繞る石清尾山の南東の峰などは全山熔岩であるが、此の熔岩も多年の星霜と共に、一部分を除いて次第に風化してゐる。風化の形態は岩石の種類に由つて一樣でない。花崗岩にあつては風化すると立方形に割れるが、安山岩にありては其の節理をなしたものゝ他は、極く不規則な大小塊狀に割れるものであつて、此の場合恰も人工的に切割つた石塊樣の形狀を呈する。現在上記諸山の背に見る累々たる大小無數の石塊は、右の熔岩の風化の現象を如實に示すものに外ならぬ。而して石清尾山西の峯の頂上卽ち明治神宮遙拜所の部分、摺鉢谷の東の峰(石船山)の一部、稻荷山頂など、なほ風化しない部分の自然岩となつて露出した附近には、其の狀が特に著しくて、殆んど土壤を見受けないのである。

さり乍ら同じ山塊のうちでも、部分に依つては土壤の多い所もないではない。其の一として丘陵麓には多少とも緩斜面地が發達し、現在畑地又は果樹園として利用せられてゐるものを擧げることが出來る。弦打村御殿より以南小山に至る部分の如きは其の例である。また石清尾山の北邊の傾斜面並に淨願寺山の如きも土壤に富んで居り、特に前者には其の上邊の千疊敷と稱する部分から、其の西斜面の木里(キサト)神社、擬砲臺の邊の如きは開墾されて果樹園などになつてゐる。これ等と共に石清尾山中央の凹所卽ち摺鉢谷は一の小盆地を形成して、殊に西側の斜面は熔岩が多孔質で風化し易い性質であるためでもあらうか、小石塊を含んだ土壤地域をなして、明治初年以來開墾せられ、摺鉢山農業改良組合などの組織を見、數軒の住宅さへ出來てゐる點が注意せられる。併しこれ等とても石塊の多い土地であるから、開墾當初の民

屋は散在した石塊を集めて築いた形迹を存し、また石塊を積み重ねて農園の周壁をなし、猶不要の石塊を所々に堆積して新しい石塚を作るなど、頗る特異な景觀をなしてゐる。こゝに至つて吾々が本編で取扱ふ所の遺跡の古くかゝる地域に營まれたものである點が、其の石塚である所以に就いて當然注意せらるゝことになる。

【註】(1)此の節は寺田教授が厚意を以て示された覺書に據る。

(2)いま參考の爲に寺田教授の取調べられた其の部分名の主なものを註記しよう。石清尾八幡社の南の山、卽ち石清尾山の一部を石船山と云ひ、栗林公園の裏山の紫雲山のうち北部を稻荷山、南部を室山と呼ぶ。また石船山の西に當る石清尾山の一部を龜命山(キメイヤマ)と稱し、其の北斜面の海に突出した部分を西方寺山(サイハウジ)と言ふてゐる。而して後の二者は之を西側から觀る時は北部を一帶に鄕東山、南部卽ち御殿(ゴテン)村の部分を御殿山と通稱する。なほ龜命山と石船山との間が一の狹谷をして、俗に摺鉢谷と云ふ所から、附近の山に摺鉢山なる別名もある。

(3)佐藤源郎氏「讃岐地方地學雜觀」(『地學雜誌』第四十四年五二二號五二三號所載)參照。

(4)前註佐藤氏論文第五二二號四四〇—四四一頁參照。

第二節　遺跡の概觀　〔圖版第一—第二〕

前節に地形の概要を錄した石清尾山塊は圖版第一で明な樣に、現在は高松市を中にして屋島と東西相對して、恰も讃岐中部の平野の門口を扼するが如き、形勝の域をなしてゐるが、往古にあつては、屋島と同じく今の女木島、男木島の樣に瀨戸內の一島嶼をなしてゐたことは、いまなほ其の北部が海濱に近接した點や、屋島の地形の變遷から容易に想像せられる。それが歷史時代にあつて屋島の辿つたと同樣の經路に依つて、何時頃に中部の平野につゞいたかは今日俄かに論じ難い問題とするが、恐らく史前の時代には山の北邊の裾は波で洗はれてゐたこ

とであつたらう。而して其の時代にあつては、うちに山懷とも云ふ可き緩傾斜の谷を有しなほ現在其の部分に泉があつて、小さな瀧の懸つてゐる此の地が、民衆の恰好な居住地であつたことは推測に難くない。早く荻田元廣氏編の『香川縣石器時代地名表』に此の摺鉢谷に於ける石器の發見を錄し、爾來年と共に同樣の遺品の蒐集例を加へつゝあることは、まさに右の推測を實證するものである。いま摺鉢谷南西邊の小字峰山に果樹園を經營してゐる藤本圓次郎氏所藏の二十餘點の石器を觀るに、打製の石鏃の外に石鎗、鑿形に近い磨石斧、有孔の石斧[1]等があつて興味を惹く。また、高松市から溪流に添うて谷を登りつめた所以南の開墾した緩傾斜地には石器の原料石に加へて、多數の古調を帶びた彌生式土器片の散亂があり、吾人はそれから一個の打製石庖丁を得たので、其の遺跡として見る可きものであることを想察した。なほこれに引續く石金併用期に於いても、本山塊が相似た狀態の下にあつたことは、明治十五六年の交、石清尾山北邊の弦打村大字鄕東字下ノ山から廣鋒銅鉾二口の發見せられた事實に依つて推測し得るのである。[2] さり乍ら本地區に於ける上代の遺跡として最も顯著なものは、時代の更に下つた原史時代に屬する墳墓であつて、此の類に至つて全山殆んど遺跡を以て覆はれたとも形容すべき形勢をなして、こゝに在來の住居の地が永久の住家に地を讓つたことを如實に示し、兼てまたそれが讃岐平野の發達を考へしめる。[3]

さて是等の遺跡のうちで、其の規模の大と特殊の景觀から注意を惹くものを本編の研究對象に取つた石塚とするが、既に長町氏の擧げた如く、普通の盛土古墳もまた此の地域に多數に存在して、總數に於いては前者に勝るものがある。いま吾々の實査の結果を一瞥するに、石塚

は石清尾山の中核をなす摺鉢谷を繞る山の脊に著しいものがあり、古く知られた石船塚、遺物の發見に依つて著名な猫塚をはじめ、姫塚、鏡塚等が其の宏壯な例として數へられる。稻荷山の峯の上また點々遺跡があり、なほ此の兩者に附隨した地帶にも若干の小石塚が認められる。次に盛土墳は摺鉢谷西側の緩斜面から、所謂西方寺山(石清尾山北邊)地帶南方淨願寺山の上等と違つた分布地域を示して、一部分山裾の地帶に亘つて居り、是等は概して規模大ならず群集の狀をなし、淨願寺山の如きは寺田教授に從ふと、墳丘すべて六十餘に上つてゐる。

右の遺跡の分布狀態に於いて自ら認められる點は、前者の所在が主として東南部の高峻な山の緣邊を占めてゐるのに對して、土墳は中央の凹地の一部から北部の海に面する部分並に南西の山上に濃厚であると云ふ明確な相違の存することである。今まこれを既述の地形と對比して見ると、盛土墳が石清尾山塊中土壤の存する部分と分布の上で一致を示し、石塚は熔岩の露出地、乃至その風化して石塊の多い地域に限られてゐる事實が認められて、それに新たなる注意と興味とを感ずる。而して此の關係は單に大體論にとゞまらず、一々の局部に亘つてゐて殆んど例外がない。即ち摺鉢谷の東邊の山の脊には一の土墳がなく、また石清尾山の北邊の傾斜面は土墳に限られた事をはじめ、相近い地域にあつても、例へば御殿村から「切通し」への右側の緩斜面地は土壤が發達してゐるから、所在の塚は孰れも盛土であるが、「切通し」の上手には鞍部が岩石質である爲に石塚が存在し、また其の南方の緩傾斜面は土壤地帶として再び土墳を見ると云ふ工合であり、同じ淨願寺山にても土壤の豐かな部分は土墳を主とするが、其の南端部の岩石質の處には石塚の形迹が殘つてゐて、[4]兩者の關係たるや原則的である。さ

れば二種の遺跡の各の性質は別に考察を要するとしても、其の構造が所在地の條件に負ふ所あることが自ら考へられて、それが二者のうち著しい石塚の性質を視る上に先づ示唆を與へるものとする。次に吾々は猫塚からはじめて一々の實際を錄して、然る後に此の問題を更に考へるであらう。

【註】(1)此の有孔石斧は長さ二寸一分の比較的小さいものである。其の中央の孔は兩面から穿つてゐて、扁平體の端の蛤刃は使用の爲にいま著しく缺損してある。なほ序に附記するが發見の石鏃は三角形、桃實狀の簡單な類から飽代あるもの、逆刺式等種々の形式が並び存してゐる。

(2)高橋博士「銅鉾銅劍考」(一)(前出)參照。實物はいま二口共東京の帝室博物館に所藏してゐる。出土地は木里神社の東方約一丁のいま畑となつてある部分と傳へ、もの山田甚藏の所有地開墾の際出土したものと云ふが、其の局部並に出土の狀態等は共に明でない。

(3)高塚の營造時代に於いて此の山魂の南半に冲積平野の發達してゐたことは、其の宏壯なる墳墓の位置が南方の平野より望み得る部分に多い點から推し得ることではあるが、なほ淨願寺山の北端の西方、鄕東川を距てた平地に王塚なる古墳の存在してゐる點で、當代その部分が陸地であつたことが分つて、これを確めしめるものがある。此の塚は現在では僅に田圃の間に形骸の一部を遺すに過ぎないものと化したが、もとは湟を繞らした前方後圓墳であつて、それから出た埴輪圓筒片が處々に保存せられ、古式墳墓に屬した事が知られる。なほ淨願寺山の南麓鷺田村字南山浦に奈良朝時代の古瓦を出す寺址の存することも、また上記の問題を考へる上に參考すべきものである。

(4)此の點寺田教授の調査に基く。

第二章　猫塚古墳と發見の遺物

第一節　古墳の位置と其の現狀

〔圖版第二・第五―第一七〕

石清尾山古墳群中、發見の遺物から多くの學者の注意を惹いてゐる猫塚は、龜命山(御殿山)上の一部に存するものであつて、其の地點は摺鉢谷を繞る石清尾山の西南隅の最高部を占め、東北には緩かな臺地がつゞいてゐるが、他の三方は地盤が急峻な傾斜を示して、南及び西の二方は直下に平野を俯觀し得る一の勝區に當つてゐる。

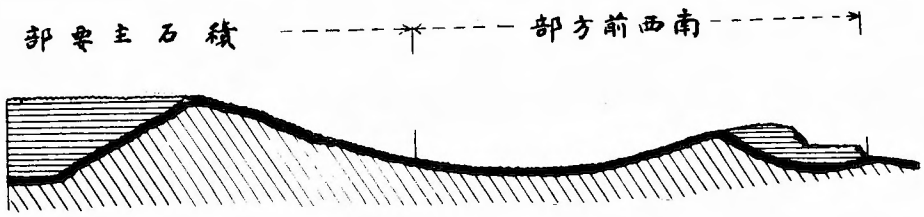
現在右の地域に二個の古墳がある。其の南東にある一は積石四散、墳形を破損して、本來の狀態を確め得ない程度のものに過ぎないが、他の北邊にある一は卽ち本猫塚であつて、それは淨願寺山に向つて下降する脈の上端に存し、規模の大きい點で群中第一位を占めて、まさに發見遺物の豐富と相應ずるものである。南方から現在松樹の繁つた同地域に(圖版第五の一)近づくと、高さ十七八尺に上る中央部の積石が先づ眼界に入るが、ついで其の兩側に延びた長い積石の連續も認められ、(圖版第六)全外容が細長く、それが山の脈に沿うて東北から西南に主軸を置いたものであることが分る。

さて此の石塚のうち最も顯著な中央部の東側及び南の側は、ほゞ本來のまゝで圓い形を認め得るが、其の中心から北西の部分にあつては、明治四十三年の大發掘の際徹底的に積石を採

掘して北西の山の斜面に遺棄した爲に、深さ地盤に達する中央の凹所から、壁狀に殘存した積石の間を通じて、其の方面に新たな積石を見ると云ふ有樣で、全く墳形を改めてゐる（圖版第七の實測圖參照）。從つて現在では本來の正確な外容を知り難いわけであるが、たゞ上記の殘存部並に積石の裾の工合等から推すと、基底部の徑は百三四十尺の間にあつたと解せられ、其の積石は側面で二十五六度の急な傾斜を示して、高さ十七八尺あり、上部は平坦で徑九十尺內外を測るものであつた事が知られる。右の數字は石塚としての本墳の規模の大を如實に示すものである。

中央の圓丘に對して左右に延びた積石は、共に高さに於いて格段の相違のある低いものではあるが、それが中央の大きな積石を中にして同一線上に相連なる所は、確かに一の特色ある外形を示して居り、なほ兩者の先端の石積みが共に直線的である點に、土築の前方後圓墳に於ける前方部の形を想起せしめるものがある。二者のうち北東に延びた一は現在上部が種々の蔓草等で覆はれてゐて積石の狀顯著でないが、中央積石の裾からの長さ約八十尺あつて、幅二十六尺內外のクビレ部は、高さ前者の基段と覺しい石積みにも及ばない位の極めて低いものから北東に至るに從つて漸次幅と共に高さを增し、前端のほゞ一直線をなしてゐる部分では幅四十六尺あり、最も高い部分は高さ六尺を示して、其の形は土築の前方部と全く同一である。たゞ此の部には別に正面から四五尺離れて徑十數尺、高さ二三尺の積石の存することが異例であつて、其の積石の性質なり、前方部との關係如何はなほ明でない。

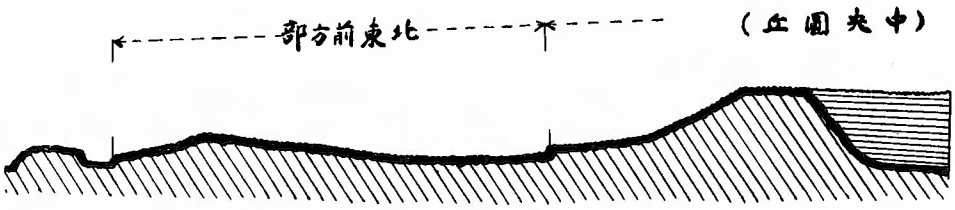
次に西南の地盤の下降する方向に延びた他の一は、長さ約百尺あつて、構造は前者に勝るものがある。尤も形狀には大差がなくて、中央の積石に接する部分で三十尺に近い幅が漸次擴



(Fig. 1)　第一圖

がつて、先端に於いて五十尺となり、高さまたそれに比例して、前方の最高部は八尺餘に上り、其の積石は中央の丘に次ぐ顯著な存在を示す。その爲でもあらうか、同部また採掘せられて、いま積石は半ば崩壞の狀を呈し、やゝ深い窪所を生じてゐる。此の部分の積石の狀態に於いて認められる一つの著しい點は、其の築成に當つて、石垣狀の段とした形迹をなほ一部に遺存することである。實測圖（圖版第七）に示した細長いクビレ部の兩側の石塊の間に上下二段になつた直線的な石並びの存在と、前端の南隅に於ける相似た石積とは右の名殘であつて、特に後者では、地盤の上に現存高さ三尺內外の石築があり、それに五尺餘の段を置いて、更に高さ二尺餘の石築の迹が明瞭に存する。これに依つて積石のもと二段に築成せられ、而も側面を石垣狀に積んだことが推される。然らば現在ではかゝる形迹を認め難いが、中央積石側面が上述の如く急な傾斜をなしてゐることも、同じ造構の崩壞を來した結果と解すべきではなからうか。而して此の推測は後に述べる諸石塚の實際からまた確かさを加へるものである。

本猫塚の示す如上の外形は、これを其の長く延びた積石の各一方から觀ると、前丘の割合に低い土築の前方後圓墳と異なる所ないが、全體としての形は大きな主丘を中にして、其の前後の一直線上に同樣な二



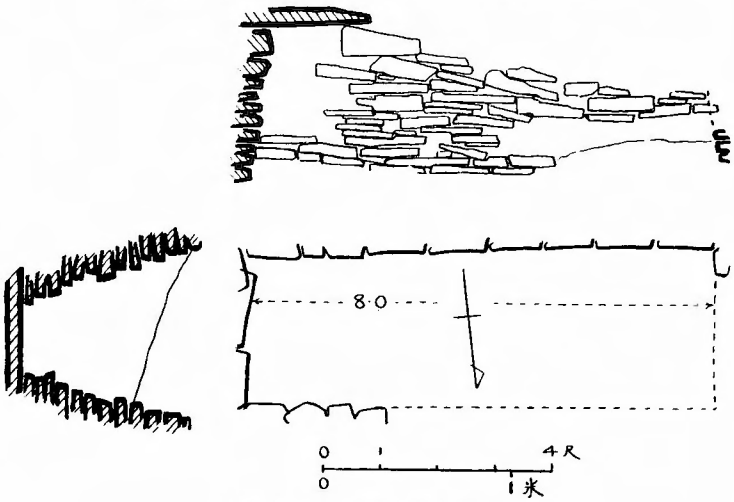
猫塚古墳縱斷面圖

つの前方部を有する特殊な形態を取る點で、墳形として一の新例を示すものと云ふ可く、それがまた累々たる石塊を以て築いてゐる所から、極めて特異な景觀をなすものである。此の珍らしい形は夙に笠井新也氏も注意して「双頭方圓式」なる名稱を與へて他と區別してゐるが、吾々はこゝで一層其の形にふさはしく思ふ「双方中圓墳」なる名稱を提出し、以下此の類を呼ぶことにする。其の性質に就いては後章改めて說くであらう。

外形に次いで墳の現狀の上に認められる重要な點は、其の過半採掘し終つた中圓の一隅に石室の半ば破壞され乍ら、なほ遺存することである。現在見られる最も顯著な一は、採掘穴の東南隅に近い傾斜面に於ける積石の間に介在したものであるが、なほ北東の部分にも、內部が堆石に埋もれた同樣な石室の側壁の殘存があり、別に兩者の中間部に其の用材と覺しきものゝ散亂をも見受ける。是等のうち第一の石室は積石の表面下約六尺に天井部があつて、平面上の位置は本來の丘の中央からは東南に二十餘尺隔つてゐる（圖版第七）。破損は甚だしいが、竪穴式の系統に屬することに疑なく、其の細長い箱形の軸はほゞ東西の方向を取つて、塚の主軸とは合致してゐない。現在よりやゝ保存狀態のよかつた大正十二年冬の所見に依ると、此の室は長さ八尺、幅三尺の平

面形を示して、基部の積石の上に河石を敷く等の設備を施した面を底部として、周圍に板石を煉瓦狀に積み重ねて壁を築成し、其の各壁は上部程內側に持ち出してあつて、幅の縮少した天井部にやゝ大形の平石を横架以て高さ三尺數寸の空間をなした式である。圖版第九の一に載せたものは大正二年谷井氏の撮影に係る此の石室の狀態とする。これを第二圖の形狀圖と對比することに依つて、石の造構の實際を推し得るであらう。卽ち其の架構は竪穴式石室の最も通有な形式で殆んど特異な點はない。いま遺存の室の壁面には所々に朱の附着があり、また底部にやゝ多量の土砂が堆積してゐる。

第二圖　(Fig. 2)

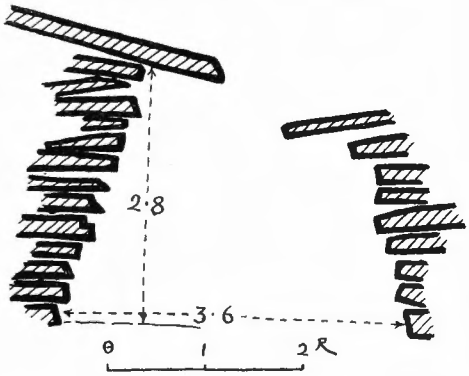


猫塚中央部第一石室圖

北東隅に殘存する他の一は前者ほど明確なものでないが、採掘穴の內側の斜面に露はれた其の横斷面からすると、また軸が東西の方向を取つてゐて、天井石の一部と覺しいものが積石の表面下六尺五寸の深位にあり、前者と同樣の狀態を示す上に、露はれてゐる壁の架構は第三圖の如くで、全然同式である。其の梯形に近い室の斷面の大さは、基底部の幅三尺六寸あり、高は三尺に近い。尤も此の室は西半が全く破壞せられて居り殘存の東

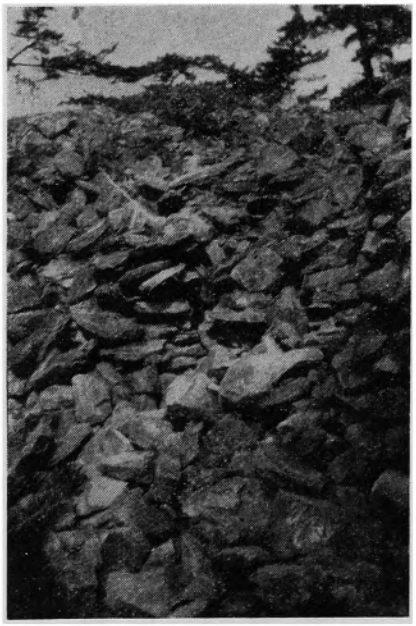
半は落下の石塊が内部を埋めてゐるから、長さは固よりのこと、殘存部が本來のどれ位であるかすら明でなく、たゞ今日では上記の壁面のなほ三尺以上奥に續いたことを石間の空隙から知り得るに過ぎない。二者の壁を構成してゐると同じ板石片が積石の間に介在する部位は、其の中間で、而も後者から十尺内外を隔てた傾斜面である。いまは何等確かな構造部分とてはないが、早く本遺跡を調査した長町氏に依ると、それがまた相似た石室の崩壞した名殘であることが知られる。第四圖は當時氏の撮影した寫眞である。以て其の一班を推し得るのが欣ばしい。

(Fig. 3) 第三圖



猫塚中央部第二石室斷面

(Fig. 4) 第四圖



猫塚中央部第三石室

此の種の石室に就いては、大正十四年の五月に石清尾山の石塚を調査した岡田唯吉氏の報告に、同樣のものがなほ三個中央丘に殘存することを擧げ、通じて六個の石室があり、うち四個

は積石の南側に東西に相並び、他の二個はそれと四十三尺を距てた北方に、同じく東西に並列して遺存する圖を載せて居り、更に西南方に延びた前方部にも石室の存在を想像してゐる。[2]

此の双方部の石室に就いては、笠井新也氏の記述には「前後の方丘部にも各數個の小石室があつたらしい形迹がある」[3]と見えて注意を惹く。さりながら是等は共に現在何等それを確むべき痕迹がない。先づ前者に就いて觀るに、岡田氏に先立つ一年六ヶ月前に私の實査した際の狀況は現狀と大差なくて、當時認め得た室は僅かに上記の二個に過ぎなかつたから、其の後にかゝる狀態があり得る筈がなく、大正の初年に度々調査した長町氏の記述にも殘存してゐる石室を三個と記して、[4]それが恰も上に見たものに相當するところからすれば其の事實は甚だ疑はしい。更に前方部の石室の形迹に就いても、西南の積石の高い部分は既に指摘した樣に盜掘せられて凹所をなし、それが恰も石室のあつた迹らしく見えるが、而も同所には石室の破壞した痕に當然見られる板石などなく、地方人士の間にも同部の石室に就いて何等傳ふる所がない。北東丘に至つては其の現狀吾々の實測圖（圖版第七）の示す如く、通じて堆石の四散の外殆んど採掘せられた部分なく、從つて石室などの存在した形迹を認め得ないのである。

現狀の記述の末尾に於いてなほ記す可きものに、積石の間に埴輪圓筒片の介在する事實がある。昭和六年春の調査に當つて、吾々は中央積石の北邊の上部で圓筒の特徴の明な一片を獲、また採掘の積石を遺棄した部分でも其の破片と覺しきものを見出した。此の二片のみでは圓筒の圍繞などを直ちに考へ難いが併し後述の石船塚に圓筒片の多い事實と併せ觀ると、また石塚の性質を推す上に一の重要な資料を提供するものである樣に思ふ。

【註】(1)笠井氏論文(前出)參照。氏は文中に「讃岐の石清尾山墓中には、この種のものが少くとも五六箇は存在してゐる。數年前所謂鐵劍形の小銅劍を十二本まで出して學者の注意を引いた、讃岐國香川郡弦打村字御殿の猫塚の如きも、亦實にこの石清尾山墓にある双頭方圓式の一石塚であるのである」と言ふてゐる。

(2)岡田唯吉氏報告(前出)第一墳猫塚平面圖參照。

(3)笠井新也氏論文(前出)第七項　主要遺蹟の猫塚の條參照。

(4)長町彰氏報告(前出)第五項、石塚の內景の條參照。

第二節　發掘の顚末と內部の構造

猫塚の現狀から記述を其の著名な出土品に及ぼすに當つて、先づ擧ぐ可きは、右の遺物出現の因由をなした其の發掘顚末と、內部の構造とである。

本墳の發掘が明治四十三年の五月に行はれた事は、[1]當時の關係文書に明記する處であり、發掘の顚末また廣く知られてゐて、それに殆んど疑問はない。いま從來の傳聞を綜[2]括して其の由來と經過の概要を述べよう。此の發掘は一に弦打村御殿出身の森松藏なる者の發意の下に、古く猫塚に黃金を埋めたとの傳へがある所から、それを獲得する爲に行はれた。但し實行に少なからざる費用を要する所から、善通寺町の松本仙治なる者を語らひ、其の出資の下に協同事に當り、また猫塚が國有林にあつて妄りに採掘を許されないから鑛山試掘の名目で屆出でて當局の許可を受け、かくて多數の人夫を要する大規模な發掘を公然と遂行したのである。御殿の村民の傳ふ所に依ると、右の發掘は日々十數名の人夫を使役して、前後二十餘日に亘つたと云ふが、既述の塚の現狀からすると、其の然るべきことが充分認められる。而して此の間

に多數の遺物を發見したことはこゝに改めて記すまでもない。

其の際に顯現した內部の狀態如何は、本墳の構造を徵證するものとして學術上の見地から最も重要な事項であるが、發掘が以上の樣な動機で行はれた爲に、當初からかゝる點に注意を闕いた上に、其の後右の狀態を確める爲に、特別の努力を拂ふた人士もなく、關係者の過半が道山に歸した現在では、種々の手段を盡してもなほ確め難い多くの疑點を殘して、明瞭を闕くものゝあることは遺憾とせざるを得ない。但し幸に前節に錄した樣に中央部の積石のうちに竪穴式石室が遺存して、一の據所を與へるものがあるから、それに吾々の集め得た聽書を參照して、以下に內部構造の原形を考へて見ることにする。

さて發掘の際認められた本墳主要部の內部の狀態として、それがうちに單一な造構を藏したものでなかつた事は、關係者の一致する所であるのみならず、現存の石室またこれを明示して疑を挿むの餘地がない。さりながら、積石の間に幾何の石室があつて、それが如何なる相互關係を持つてゐたかに就いては頗る不明瞭である。これを從來の記述に徵するに、故高橋博士の文には谷井濟一氏の實查の所見に基くとして、「一墳丘中七八個以上の石室あり」と見え、[3] 笠井新也氏は「實見者の談に依ると、圓丘內には五六個の頗る長い石室があつたといふ事である」[4]と記してゐる。また長町氏はそれについて、最初の報文に石室の數を五個としてゐるが、後の詳しい記述では、石室の幾個あつたかに觸れる所なく、殘存してゐる三個の石室が皆同一の方向を取つて相並び、而も其等の位置の比較的邊緣にある處から、別に中心部にもと稍〻大にして且つ最初の塋穴たる石室の存在を想定してゐる。[5] 後出の岡田唯吉氏の報文は、[6] それ等と

は違つて、本來の石室の數を八個として、既記の如く其の殘存した石室六個の位置を明示してゐて、各の間に出入がある。中で岡田氏の言ふところは谷井氏の傳ふる所に近く、數字の明確なものである。但し現存石室六個と云ふことが實際と合致しないことは前節に指摘した。

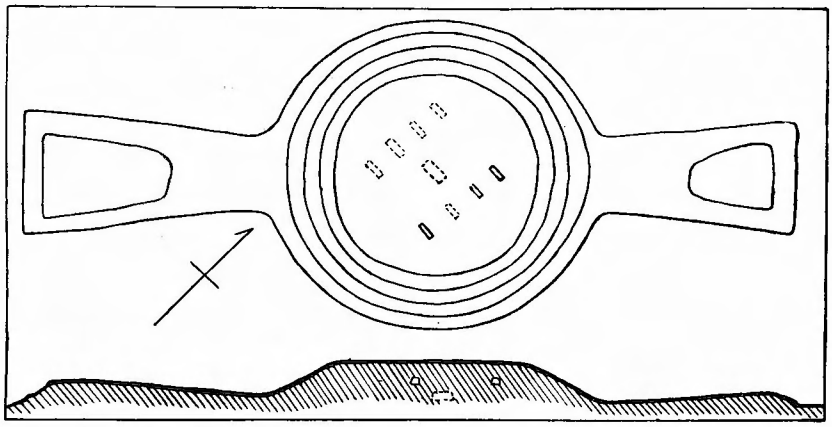
轉じて發掘に關與した人士から吾々の聽いた處の主なものを擧げると、先づ人夫として終始積石の運搬に從事した御殿部落の別枝留七氏の言ふ處では、主丘を縱五間、横三間許りの濶さで掘り下げて行くうち、深さ三間位で中央の部分から石室が露はれ、其のうちから遺物類が出たのであると。尤も同部の發掘遺物の檢出などは、發掘計畫者並にそれに親しい者の手で行はれて居たから、單に人夫として參加したに過ぎない氏は、其の詳しい狀態を觀なかつたと云ふてゐる。併し記憶に存する處では、室は東西に細長い竪穴式で、扁平な板石を以て架構してあつて、幅三尺、高さ五尺位あり、遺物は其の底部に朱に染み乍ら遺存、其の類として土器、銅鏃、小銅劍等を擧げ、特に土器の壺は室のほゞ中央に存し、底に小孔を開いたものであつたと云ふ。それと共にいまなほ遺存する樣な小石室が右の中央部の採掘に當り、上邊の處々から露はれてゐるのを見受けたが、此の内からは遺物の出たことを聞かなかつたとしてゐる。次に二三日の間發掘を手傳ふたと云ふ同村森久吉氏の談話では、主な遺物を發見したのは中央の東西に長い石室で、それは長さ一間半内外、幅二尺位であつたと云ひ、右の石室の一端が更に鍵手に曲つて、鏡は同部に存在したとある。發掘中に實地を觀たと云ふ同地飯田の岩田神社々掌武内園太郎氏、御殿の高橋六太郎氏等の記憶も亦、積石中央の深い所に石室があり、遺物がそのうちから出土したと云ふ點で一致する。たゞ其の石室に就いて武内氏は位置が南北に長かつ

たとしてゐる。

摺鉢谷の藤本圓次郎氏は發掘の當時東京に出てゐた爲に、其の實際は目擊しなかつたが、翌年歸鄕、採掘の事を耳にして早速遺跡に臨んだと言ひ、當時の記憶として吾々に告ぐる處では、採掘穴のやゝ西に偏在して大きな石室の遺址があり、其の狀、板石積みの周壁の下底に河石を敷き、附近一面に朱に染んでゐた。而してそれよりも南方の一段高い積石の間に、現在なほ一個を存する樣な小石室が三四並列したものがあつたと云ふ。同地大山正氏に從ふと、此の種の小石室は積石の南北に相對して少くも各の側に二個はあつたとして、それが上記岡田氏の石室の位置圖と連關するものである。

以上列記した記載並に聽書は互に一致を缺く點があつて、遺跡の破壞せられた今日では、其の孰れが實を傳へたものであるかを到底確め難い。さり乍ら其等を通じて自ら認められる處のものは、主丘中央の基底部に一の大きな竪穴式石室があつて、うちに副葬品の主な類が藏せられてゐたことゝ、別に右の主室の上邊周圍の積石中に、若干の小石室があつたとすることである。此の後者は既に述べた如く、現在なほ東部に半ば破壞され乍ら、其の石室二個を遺存し、兩者の中間にもなほ一ヶ所存在した形迹をとゞめてゐる實狀に相合致するものがあり、更に是等が主丘の東に偏在して一直線上に相並び、現存の二個がそれぞれ積石の推定中心から二十餘尺を隔てた所にある事實は、もと中央に一個の大きな石室の存在を想定するにふさはしい。此の點は既に古く長町氏の推測した處である。されば如上の共通點を以て本古墳の內部構造を傳へたものと解して大なる誤りはないであらう。

かく大體の構造を推し得たとして、附隨の小石室の數と其の狀態とが、中で造構上の特異點をなす所から改めて顧みられることになる。これに就いての記述並に聽書は區々であるが、現存の東邊の例が南北の方向に長軸を置いて並列する點から見ると、大山氏其他の人士の言ふ西側に同樣な石室があつたとして不思議はない。更に東側の石室の相互關係に於いて、東南隅と東北隅との間の距離が約四十尺であつて、室の破壞した石材の遺存する部分は、兩室中間の一方に偏在するから、嚴正な均勢的配置を取つたとすると、其の間になほ一個の室の存在を豫想することが出來る。然らば小室が兩側に對照的にあつたとすると、岡田氏の報告にある八個なる數が認められるのである。此の場合早く實地を踏査した谷井濟一氏が石室の少くも七八個以上あつたとしてゐることが、(7) 思ひ併されて其の實らしさを加へる。かくてこゝに第五圖の樣な一の構造形が出て來る。尤もこれも今日考へ得る一の合理的な推測と云ふ範圍を出でない。何となれば主石室が藤本氏の言ふ如く西に偏在したものとすると、此の側に東邊と均勢的な小石室の存在が認め難くなるから、石室の數はそれだけ少いことになる。



第五圖　猫塚構造想定圖　(Fig. 5)

處が此の場合の數は恰も長町氏の最初の文に見える石室五個とあるものに合致して、それがまた一の理由ある推測となるからである。其の實際如何、特に今日何等見る所ない西半部の石室の本來の有無の如きは、副葬品の藏置狀態と共に遂に永久の疑問たるを免れない。

【註】(1)屆出の書類に基く帝室博物館の記錄には明治四十三年の五月とある。此の古墳に關する最初の記事である長町彰君の「讃岐國石淸尾山古墳」(前出)にも明治四十三年五月二十二日頃發掘のことを錄して、傳ふる所に差異はない。

(2)此の傳聞は後に擧げる內部の狀態と共に、主として昭和七年九月上旬、御殿の部落に於いて聞き得た所のものである。これに就いて寺田敎授並に同村別枝專太郎氏の配慮を受けた事を感謝する。

(3)故高橋博士『銅鉾銅劍の研究』(前出)

(4)笠井新也氏論文(前出)

(5)長町彰氏「讃岐國石淸尾山古墳」(前出)並に「讃岐國石淸尾山の群集墳殊に其積石塚に就て」(前出)參照。

(6)岡田唯吉氏報告(前出)

(7)上引高橋博士の論文に從ふ。此の谷井濟一氏の調査の際御殿の故森仁市が實地を案內した事は、谷井氏撮影の寫眞(圖版第八)に據つて明である。處が仁市氏は發掘に終始關與して、而も事情に精通してゐたとは御殿部落の人々が言ふ所であり、且つ長町氏が最初遺物を見たのも同氏宅に於いてゞあつた樣に思はれるから、同氏から聽いたに相違ない谷井氏の云ふ石室の數は據る可きものと思ふ。更に同氏の踏査が大正二年の事で、發掘後なほ多くの年時を經てゐなかつた點から、一層其の然るを覺えるのである。

第三節　發見の遺物

〔圖版第一〇—第一七〕

猫塚發掘の際に其の內部から見出した遺物は、屆出に依つて埋藏物として取扱はれ、明治四十五年一月に東京帝室博物館の收藏に歸したのであるが、うちに特殊な遺物が含まれた點から學界の注意を惹いたことは既に述べた如くである。(1) 當時の博物館の受入臺帳に依ると、出土の遺物と云ふのは、

一、鏡　五面（三神三獸鏡、四獸鏡、獸鏡各一面、內行花紋鏡二面）
一、石釧　一個　一、小銅劍身　十七口　一、銅柄　三個
一、銅鏃　八個　一、鐵鏃（殘缺共）三　個　一、鐵斧　一個
一、鑿　二個　一、劍身殘缺　四口　一、刀身　一口
一、素燒坩　一個

であつて、玉類はないが、種々の類を含み、數量も亦少くない。併し是等が副葬品の全部でない事は、福家惣衞氏が同時發見の銅鏃一個を收藏してゐることや、森仁市氏[2]の許にも同じ銅鏃があつた點から明であつて、此[3]の種の發掘に於いて遺物散佚の免れ難いことは改めて說くまでもない。長町君に從ふと、氏[4]が明治四十三年に猫塚採掘の事實を知つて、御殿村に出掛けた際に實見した出土品は、如上の遺品に加ふるに、鏡では多數の破片があつて、うちに乳の多い形式の破片と、所謂花紋鏡片とが目立つて居り、また土器ではほゞ形の遺存した壺の外に、半壞の遺品も一個あつたと言ひ、更に其の後三四年を經過して、發掘者たる善通寺の松本氏の許になほ小銅劍二口を保藏してゐる事實を確めたとある。然らば散佚した副葬品は少くなかつた事になる。[5] 今日其のすべてを究め得ないことは學術上の見地から遺憾である。

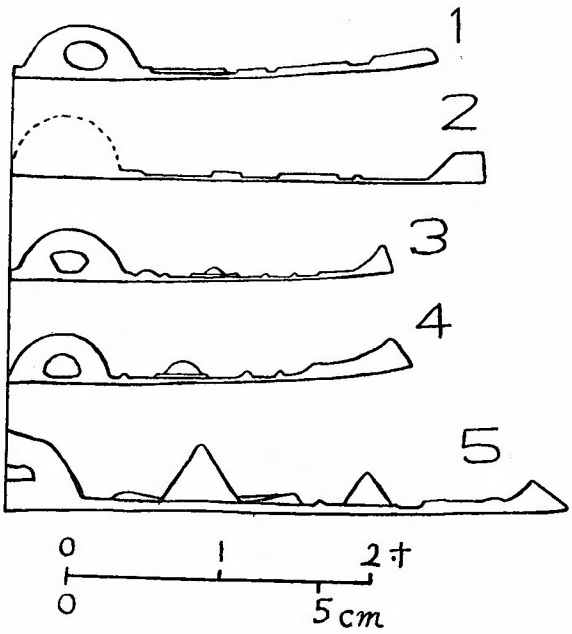
さて現存の副葬品としては、殆んど博物館に收藏せられた類に限られるわけであるが、これとては出土後年時の經過等の爲に鐵器類の如きは殆んど調査に耐えないものと化して、受入當時の臺帳の記載を唯一の資料とせなければならぬ狀態にある。是等に就いては既に高橋博士の『銅鉾銅劍の研究』に略述せられてゐるが、而も未だ充分な說明はない。本節卽ち鏡から

はじめて詳しく其の特徴を擧げることにする。

一　鏡

現存の五面は形式の上から長宜子孫內行花紋鏡、內行花紋精白鏡、四獸鏡、獸帶鏡、三神三獸々帶鏡各一面宛に分たれる。長宜子孫內行花紋鏡は面徑四寸六分の薄手の作りで、面に一分二厘內外の反りがある（第六圖の1）。鏡背文は圖版第一〇の一に示す如く、圓座鈕から蝙蝠形に近い大きな葉形が四出して、其の間に幾分圖案化した隷體の長宜子孫なる銘を容れ、次に素文突帶を經て八弧文帶となり、弧間に文字と圓圈とを交互に配して、其の銘が「生如山石」となつてゐる式である。これは所謂內行花紋鏡としては簡單な部類に屬するもので、同樣の遺品は朝鮮平壤附近の漢の郡縣の遺跡からも出土し、[6]漢代の形式であることを示す。本例はいまなほよく白銅の金質を遺存して、面の黑漆の光澤は美しく、背部では鉛黑と白光との色澤が相交り、其の間に一部分鐵錆を附けてゐる。而して同部の圖紋のやゝ著しく磨滅してゐることは、鈕に通じた孔部にそれの一層甚だしい事實と共に、本來の鑄上りの鋭くなかつた以外に、使用に由

第六圖　(Fig. 6)



猫塚發見古鏡斷面圖

つてかくなつたと解すべきであつて、此の點は注意を惹く。内行花紋精白鏡はもと破碎して出土、九片の殘缺であつたものを博物館で修補して、いまでは圖版第一〇の二の如き完形に復してゐる。徑五寸五分に近く、其のやゝ高い緣は厚さ二分餘ある（第六圖の2）。美しい漆黑に近い銅の地肌をして鑄上りもよく、背文は九曜座鈕（いま缺失）の周圍に一帶を繞らし、主要な弧文から銘帶となるところ、此の種の鏡の標式的なものであり、其の一々に就いて詳しい解說を加へる要はない。銘文また現存の片に「清白而事君志治之合明」云々の初の部分や「願永思而毋紀」の末尾の句を見受けて、筑前須玖の遺跡から出た前漢鏡と同一であることを示してゐる。(7)

次に獸帶鏡と四獸鏡とは、共に三角緣をして、其の內側に幾何學的な帶圈を附した點で體制の相似た遺品である。獸帶鏡（圖版第一の一）は徑四寸二分の小形で、面に一分の反りがあり（第六圖の3）、鈕を繞る顯著な有節重弧文帶に次ぐ內區には、六乳の間に疾驅した獸形四と、飛禽、奇怪な人物各一を容れ、それ等が薄肉刻で、簡單化した圖形の間に活動の姿態を表はしてゐる。銘帶の銘は左行左文で「吾作明竟大吉宜子孫」の九字が字間のあき多く粗に配布してある。此の鏡でなほ記す可き點は、其の鈕孔の上邊が使用の爲であらうか著しく磨滅して見えることゝ、もと二片に破碎して存したその一方が黑漆色を呈するに對し、他は鐵錆を帶びた粘土樣の附着物が多く一部分銹化して互に色澤を異にしたことである。後者は埋藏の位置に依つて色澤の相違を生ずる好例をなすものである。四獸鏡（第六圖の4）は徑四寸五分餘、龜裂はあるがなほ完形を存して、鉛黑の地肌に一部分綠鏽を點じて光澤が多い（圖版第一の二）。內區の圓座乳の間に配した四獸は龍虎各二と覺しく、形整美で且つ半肉刻に大きく表はした點に前者との相異がある。而し

て銘帶の文は次の如くである。

吾作明竟自有己。明而日月世少有。延年益壽兮。

此の種のより精美な遺品は時に平壤附近の遺跡から發見することもあるが、[8]同時に我が內地の古墳に於いても往々存する。其等が手法其他から漢末より六朝に亘る永い時代の間の鑄造と見る可きことはほゞ學者の一致する所である。[9]大和國北葛城郡佐味田寶塚發見の二神二獸鏡、[10]攝津國武庫郡岡本ヘボソ塚出土の同鏡等は、[11]龍虎の各一に代へるに神像を以てしたものではあるが、手法に於いて全然上記の四獸鏡と規を一にし居り、また山城國葛野郡川岡村百ヶ池古墳の獸帶鏡は、[12]前者に等しい。而して是等の出土墳が孰れも所謂古式古墳に屬することは、同じ遺品の出た本猫塚の性質を論ずる際に顧みるべきものとする。

三神三獸々帶鏡は徑七寸二分五厘あつて（第六圖の5）、五面のうちで一番大きく、龜裂はありながら形を存してゐる。鏡背文は圖版第一二の一に見る樣に內區は素乳六個の間に神獸を交互に布置し、更にそれを繞つて天蝎、雙魚等の獸帶を存する點を特徵とする。此の種の鏡は本邦古墳の出土品に最も類例が多くて、[13]其の作りの上から我が鏡作部の手になつた仿製品とせられてゐる。本例は中で鑄上りが頗る粗拙であり、圖形崩れ、質また靑銅と覺しく全面綠灰色を呈する處は、特に其の趣の多いものである。

二　石釧

一個。緣邊に少許の破損がある。多くの石釧と同じく碧玉（jasper）製で、其の灰色を帶びた碧綠の地肌は磨研に依つて美しき色澤をなし、環體の內面には製作の際轆轤樣のもので其の部

を削つた樣な形迹を印してゐる。徑は二寸五分內外あつて腕輪たるに應はしく、其の環體は上面と外側面とに刳りを加へたに過ぎない單純な細い式である（圖版第一二の二）。

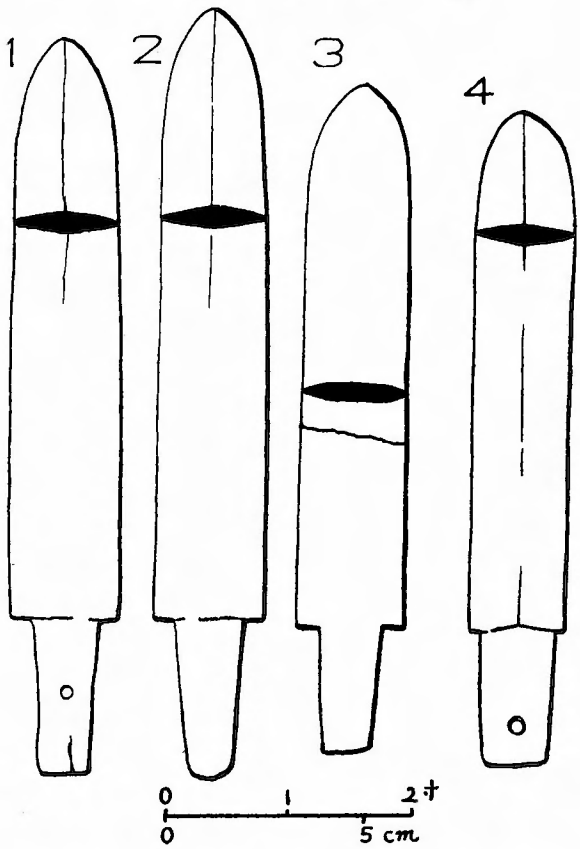
三　小銅劍

博物館收藏品は十七口であるが、既述の如くもと善通寺の發掘者の手に二口遺存したとあるから、本來の數は長町氏の云ふ二十口內外とするのが當つてゐるであらう。現存品十七口は圖版第十三並に同十四に載せた寫眞に見る如く、孰れも長さ五寸二三分の間にあつて、薄い扁菱形の斷面を示す身に、やゝ幅の狹くなつた短い莖を着けた單純な小形品である。尤も其の各個は同一の笵で鑄たものではなくて、互の間に長さ乃至幅厚さに若干の差異があり、また其の四口には莖に鑄成の後、銳利な器で穿つたと思はれる徑一分內外の所謂目釘孔を見受ける。いま中で一口は鋒先を缺き、一口は二片に折れ、また二口は少しく曲つて形を損じてゐるが、他は原形のまゝで、一樣に靑綠鏽で覆はれて、一部に粘土や朱の附着がある。形に連關して注意を惹く一つの點は、其の或物の莖に麻と覺しい纖維質を纏いた形迹の明瞭な遺品のあることである。圖版第一四に載せた一口の如きは其の顯著な一例である。目釘孔の存在並にこれ等からすると本銅劍にはもと柄を着裝したものであらう。

此の劍は故高橋博士が鐵劍形銅劍なる名稱を與へられたものである。長町君に依ると、同じ遺品一個が古く綾歌郡山田村東分の吉岡祠附近の古墳から、銅製筒形品銅鏃などと共に出土したことが多和文庫藏の古記錄で確められると云ふが、[14]而も他に殆んど類例のない特異な遺品である。器の銅製である點から博士は其の「銅鉾銅劍考」[15]に收めて、暗に西日本に廣く分布

する銅劍の一種とせられて以來、其の類として取扱はれるの風潮を馴致した事ではあるが、示す處自餘の形式とはやゝ懸け離れてゐるので、それ等とは寧ろ別な遺物と見る可きであらう。此の點河内國南河内郡國分村の松岳山から出た一口の銅刀身[16]と相似た性質のものの樣に思はれる。既に博士も後年の『銅鉾銅劍の研究』では特殊な例として、形式分類の表から除いてゐられるのである。こゝで石枕の造り附けのある古式な棺を主體とする丹後與謝郡桑飼村蛭子山古墳から、第七圖に載せた右の劍と大さ並に形の全然同一な鐵劍出土の事實が顧みられて、[17]それが本銅劍の特殊な性質を解く鍵となる樣に考へられる。後章改めて說くであらう。

第七圖　(Fig. 7)



(4)劍銅の墳古塚猫と(3.2.1)劍鐵見發墳古山子蛭後丹

四　筒形銅器

博物館の臺帳に銅柄とあるもので、長町氏は出土數を四個としてゐる。現存品三個は圖版第一五に載せた其の實大寫眞で明な樣に、一方の塞いだ細長い筒形の銅の鑄物であつて、其の側

面に二段四個宛の透し孔を開き、また中空な上邊に目釘樣の孔が通じた共通點を持つものである。併しこれも亦劍の場合に於けると同樣、各個の間に小異がある。卽ち第一例（圖の左端）は長さ五寸餘で、透しを挾んで、上中下と三段に幅を違へた突帶が繞り、其の各々の側面に輕い反りを示して居り、底面は水平に近い。第二例（圖の右端）は右と同式であるが、長さ五寸一分五厘で心持ち大きく、帶の各部の比例が違ひ、底面も若干の丸味を持つ。而して此の器は小破はあるが、三者中碧綠の銅色が最も美しく、また鑄上りも巧みである。第三の遺品（圖の中央）は長さ四寸一分で小さく、上邊に突帶を繞らす外は單なる筒狀のまゝで、作りが簡單である。其の下段の透しに鐵錆の夥しい附着が注意せられる。

此の種の筒形銅器は本邦各地の古墳から往々發見せられるものである。[18] 早く鳥居博士が阿波國德島市外勢見山の發見例を紹介して古劍の柄かとせられて以來、學者の記述に上つたこと二三にとゞまらない。[19] 嚮に森本六爾氏は『川柳村將軍塚の研究』に從來の資料の集大成を試み、その示現する文化現象なるものを說いて、性質に對する明瞭の度を加へることになつたのは氏の努力を多とすべきである。後章改めて其の點に觸れるであらう。

五　銅鏃

圖版第一三に載せた博物館所藏の八個は孰れも柳葉形で、福家氏の一個またそれ等と違つた所がない。個々の間には幾分の違ひはあるが、通じて長さ二寸一二分の間にあり、關の近くで張りを示す其の柳葉狀の鏃身は、鎬のある扁菱形の斷面を呈して、兩側に鋭い刃を着け、また莖は細くて鑢目から來たと見える多角な斷面をしてゐる。質はすべて佳良な白銅と覺しく、い

ま表面に鉛黑の美しい光澤を存して、その點上記の銅劍と趣を異にする。なほ一個の鏃に鐵片の附着があつて、もと鐵器との共存を物語るものがある。銅鏃の此の形式が我が國で數多く見出されることは、既に吾々の試みた本邦銅鏃集成圖[20]の明示する處であつて、またその殆んどすべてが古式古墳の副葬品であることは、同じ遺品を藏した本墳の性質を考へる上に資料を提供するものである。

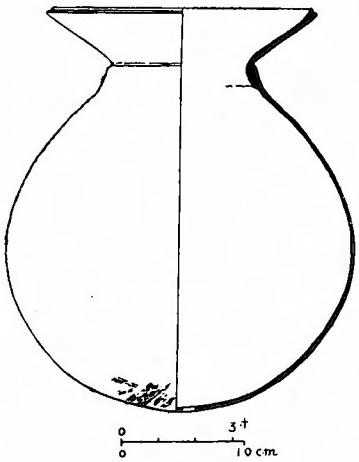
六　鐵鏃

上引博物館の受入臺帳には三個とあるが、實物を觀ると其の一個には破碎した他の片が密着してゐるから、數は四個である。質が酸化して破損を生じ、いま形の明確なものは一個に過ぎない。併し孰れも同式であつたと考へられる點を遺してゐて、それは後藤守一氏の分類に從ふと、[21]有莖尖根（トガリネ）系の腸抉（ワタクリ）式に屬し、細長手の鎬のある鏃身の下部に逆刺（カヘリ）があり、また篦被（ノカツキ）をも有したものである。而して形の見られる一個（圖版第一四の三）には、莖の上邊に葛纏きにした物質が錆着いたまゝ遺存してゐる。香取秀眞氏の說では此の鏃は鑄物であらうと云ふ。[22]果して然らば鍛製の多い我が鐵鏃の間にあつて、[23]一の特色を示すことになる。なほ右の鐵鏃片には銅鏽や土器片が密着しゐて、もと室內でそれ等との共存を示すものがある。

七　素燒壺

現存の一個は圖版第一七の一に載せた。なほ一個あつたと云ふ半壞のものも、長町氏に據るとまた同式らしい。[24]此の壺は茶褐色をした薄手の作りで、其の滑かな外面の上半には所々に刷毛目の痕があり、また底部に席文を捺してゐる。通高一尺〇九分の大きな器で、其の形は丸

第八圖 (Fig. 8)



猫塚發見素燒壺

底の球形に近い體の上部が少しく括れて、それに外開きの漏斗狀の口緣を附したものである。其の成形は口緣と體とを別々に作つて、括れ部で接合したものであることが同部の實際から認められ、また口緣部には轆轤目と覺しき條痕が見える。なほ此の壺には底のやゝ一方に片寄つて徑四分の圓孔があつて(第八圖)一の特色をしてゐるが、其の如何なる用途に供する爲に穿つたものであるかは詳でない。形其他の示すところまさに彌生式土器の精巧な例のうちに加ふべきものである。

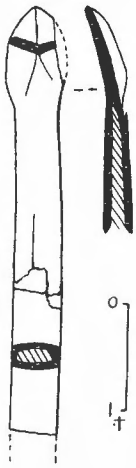
八　自餘の遺物

臺帳に據ると博物館に受入れた遺物は右の外なほ四種あつて、それは斧頭以下孰れも鐵製品である。是等は質料の關係からでもあらうか酸化破損したと見えて、今日調査する事が出來ない。從つてこゝでは高橋博士の寫眞(25)並に臺帳の記載に據つて一斑を記するにとゞめる。

斧頭一個は長さ三寸八分の鐵製で(圖版第一七の四)袋穗と刃部との幅に著しい差異のない長手品である。刀身一口は二つに折れてゐるが、接合すると長さ二尺二寸二分ある。劍身は四口共に殘缺であつて、それぞれの長さ九寸弱、六寸、四寸五分、三寸三分の短いものである。最後に鑿とせられてゐる二個のうち、長き五寸二分弱の一は圖版第一七の二に示す本(モト)が袋穗となつてゐる長手な其の標式的の造りであるが、他の一個は樣態を異にして、扁平な體の一端が「へ」の字形

をして先端尖り、それがやゝ反つて刃を着けた處（第九圖）奈良の正倉院に數例を存する鉈に似たものである。されば鑿ではなくて同じ鉈と見るべきであらう。同樣の遺品は伯耆國東伯郡社村國分寺の古墳[26]、丹後國與謝郡桑飼村[17]作り山古墳等からも發見されてゐる。

(Fig. 9)



第九圖　猫塚發見鉈形狀圖

以上通觀した猫塚出土の種々の遺物が室內に如何なる狀態にあつたかの學術上緊要な事項は、前節述べた事情からして今日それを究めることは全く不可能である。併し事實の記載の條に指摘した個々の遺物の上に殘る種々の痕迹からすると、鐵器類の或物と銅鏃筒形銅器の或物並に土器等が互に近接した位置に埋沒してゐた事は確實であつて、此の點は既記別枝留七氏等の言ふ副葬品の出土狀態と一致する。たゞ其の遺物の大部分が主室から見出されたとしても、現存品に小室の遺物が絕無なりや否やは永久に究め難い疑問である。

長町彰氏は其の石塚の報告に於いて[27]、本墳出土の遺物を二分し、斧、鑿、鐵鏃、鐵劍、刀身、石釧等を鏡、小銅劍、銅鏃、筒形銅器、土器の一群から區別して、鐵器の類をすべて重葬の際の副葬品としてゐる。これは蓋し銅器は鐵器に先立つ文化段階の所產であり、また本墳が主丘に數室を有する特殊の造構である點から、室の營造に前後があつたものとして、この樣に解したのであらう。併し既に記した如く、其の銅鏃や筒形銅器の或物には鐵錆の夥しき附着があり、鐵鏃の一には土器片が密着して、是等三者の共存を明示してゐる。從つて氏の區別は當らない。のみならず本墳の副葬品に見る銅器と鐵器とが、右の樣に明確に年代の前後を分ち難いことは現在の

我が考古學上の知見から多言を要しないのである。如上の遺物のうちには固より達つた室から出たものが含まれてゐるかも知れぬが、而も一括して論じて然るべき性質の遺品であり、それが猫塚本來の副葬品とす可きは吾々の信ずる處である。後章に詳說を期する。

【註】(1)『考古學雜誌』に「近時發見の珍品」(前出)として、其の銅劍と銅柄とが紹介せられ、ついで高橋博士の「銅鉾銅劍考」が出て、一層其の遺物の興味が高まつたのであつた。

(2)長町彰氏に從ふと、此の銅鏃はもと氏が發掘に關與した人夫の持つてゐたのを讓受けたものであつたが、福家氏の所望に依つて贈與したものであると云ふ。

(3)昭和七年九月、御殿に於ける同氏の遺族から聞いた所に依る。但し既に紛失したと見えて搜してもらつたが實物は見當らなかつた。

(4)此の項昭和七年九月十日附長町彰氏の敎示に據る。なほ同氏の「讃岐考古集錄」(『考古學雜誌』第十八卷第二號所載)には乳の多い破片の鏡を大神獸鏡(所謂日月天王鏡類)と記してある。

(5)長町氏は其の報文(前出)に於いて其等の點を考慮したものであらうか、主な遺品の數量を次の如く記してゐる。

一、鏡六面(長宜子孫內行花文鏡、內行花文精白鏡、四獸鏡、六獸鏡、三神三獸鏡及內行花文鏡の殘缺)

一、小銅劍　二十口內外　　一、銅　柄　四　個

一、銅　鏃　八乃至十個　　一、素燒坩　二　個

但し前註に引いた「讃岐考古集錄」では、猫塚の發見遺物に就て「新に小銅劍二個、銅鏃の數に一個增加を示してゐる」とあるから、右の實數は最初の所見に依るものかも知れぬ。また鏡に關しては、同文に「帝室博物館所藏のもの以外に一個の大神獸鏡(所謂日月天王鏡類)があつた。其他鏡の破片は數十片を算したが共に散逸した」とやゝ違つた記事が見える。

(6)梅原「北朝鮮發見の古鏡」(『鑑鏡の研究』所收)參照。大形で鑄上りは頗る鋭いが、其の三十七圖の13の如きは圖文のよく合致した例である。支那の出土例に就いては『金索』以下の圖錄に散見また實物も多くて一々擧ぐ可くもない。

(7)梅原「須玖岡本發見の古鏡に就いて」(本研究報告第十一册)參照。

(8)もと多田春臣氏の藏した翟氏作獸帶鏡(今京都守屋孝藏氏藏)は其の最も整美な一例である。梅原「北朝鮮發見の古鏡」(前出)參照。

(9)後藤守一氏『漢式鏡』參照。

(10)梅原『佐味田及新山古墳研究』第一編參照。

(11)梅原「兵庫縣下に於ける古式古墳の調査」上(『兵庫縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第二輯所收)第六項參照。

(12)梅原「川岡村岡の古墳」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第二册所載)參照。

(13)後藤氏『漢式鏡』の獸文帶三神三獸鏡の條參照。氏は呼ぶに右の名稱を以てしてゐるが、いまは從來の稱呼に從ふた。私の囑目した其の遺品は三十面以上に達する。

(14)前引「讃岐考古集錄」並に昭和七年九月十日附長町氏の敎示に據る。其の銅鏃に就いては『考古界』第一篇第拾壹號所載

の若林勝邦氏の「考古雜綴」(第六回)の第三十六項に記事があつて、安政三年三月下旬、同社の後なる古墳から出たとある。文中には筒形銅器の事も見えてゐる。

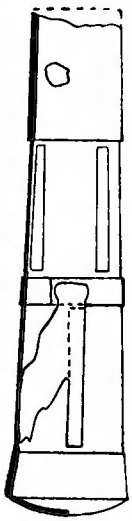
(15)『考古學雜誌』所載「銅鉾銅劍考」(前出)第一の分類の條參照

(16)『京都帝國大學文學部陳列館考古圖錄』圖版第十三の1所載梅原「河内國分松岳山船氏墳墓の調査報告」(『歷史地理』第二十八卷第六號)、同「再び河内松岳山船史の墳墓に就いて」(同誌第二十九卷第四號)參照。

(17)梅原「桑飼村蛭子山、作り山兩古墳の調査」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十二第十四兩冊)參照。

(18)鳥居博士「阿波國二古墳墓の記」(『東京人類學會報告』第十七號)參照。

(19)森本氏は其の文中に十一ヶ所十三個例を擧げ、なほ附錄に詳しい表を載せてゐる。氏の記してゐる以外で私の觀た出土地の確實な筒形銅器には、いま伊勢の徵古館に藏する遠江國濱名郡赤佐村根堅古墳の發見品がある。これは横穴式石室から有名な金銅透彫鈴附冠金具と伴出した點で興味を惹くものである。同古墳に就いては『靜岡縣史』第一卷を見よ。但し同書には此の筒形銅器を單に銅器殘缺として取扱ふて何等記事がない。文學士佐藤虎雄君が其の實測圖を寄せられたから、こゝに載せて置く(第十圖)。



第十圖　遠江赤佐村出土筒形銅器(二分の一)

(Fig. 10)

(20)「日本發見銅劍銅鉾銅鏃聚成」(『本研究報告第七冊』附載)

(21)後藤守一氏「原史時代武器と武裝」(『考古學講座』所收)鐵鏃の條參照。

(22)此の說後藤守一氏に據る。

(23)後藤氏『日本考古學』に「樂浪遺物には、銅鏃と全く形を等うする鑄物製の鐵鏃が發見されてゐるが、南鮮及び内地發見の殆んどすべては鍛製であり、形も銅鏃と連絡あるものはすくない」とある。

(24)長町彰氏の報文(前出)に「甘は發見數二個、一個は取出す時に破壞したと云ふが、二個共同形であつたらしい」とある。

(25)高橋博士『銅鉾銅劍の研究』圖版第十七參照。本書の圖版第一七の(二)(四)は同書から複寫したものである。

(26)梅原『因伯二國に於ける古墳の調査』(『鳥取縣史蹟勝地調査報告』第二冊)第五、東伯郡の古墳(上)參照。

(27)長町彰氏の報文(前出)參照。

第三章　石船塚を中心とした諸石塚

上記猫塚古墳に對して、本石塚群の主要部を形成するものは、摺鉢谷の東邊を限る主峯上に營まれた諸墳である。それ等は既に一言した樣に、西端に姫塚があり、石船塚を中間にして、北に鏡塚、北大塚等大規模な墳壟の相並んだものから成る。現在此の地域は松樹が茂つて其の墳形の大半を覆ふてゐるが、なほそれを通じて個々の概容を認め得可く（圖版第一八の一）、特に東方稻荷山から眺めると、本來の宏壯な營造を窺ふことが出來る（同上の二）。いま次に姫塚からはじめて、其の一々の實際を擧げよう。

第一節　姫塚古墳〔圖版第二・第五・第一八—第二〇〕

其の所在は摺鉢谷を繞る馬蹄形の石清尾山主峯の一隅にあつて、既述の猫塚古墳と約五丁を隔てゝ東西に相對する位置に當つてゐる。其の標高二〇四米突を測つて、淨願寺山と稻荷山との中間を占めた山丘の中心の標點をなし、地勢高峻其の形勝の域たる點で前者に勝るものがある（圖版第二）。塚は右の地點の最も高い部分を利用して後圓部を營み、山の脈に沿ふて西方に前方部を附した前方後圓墳の形式を取つたものである。積石は現在兩丘とも比較的緩かな傾斜地につゞく北側に大きな採掘穴があつて、それを破壞して居り、また急な傾斜で下降してゐる南側では石材の落下を來した處もあるが、通じて割合によく外形を遺存し、殊に段築にした本來の面影を隨所にとゞめて、整美な形を認める事の出來るのは欣ばしい。圖版第一九

第十一圖　姫塚復原縱斷面圖　(Fig. 11)

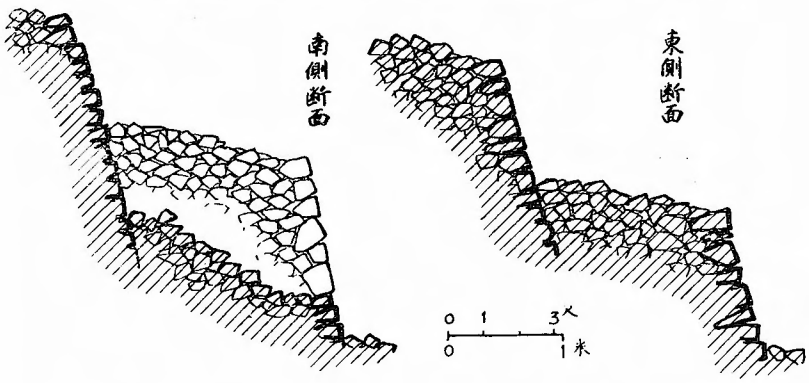
に載せたのは其の形狀の實測圖である。いまこれから求め得た正確な大さの數字を擧げると、前後の主軸の長さ百四十二尺（うち前方部七十二尺）前方端の幅四十五尺、後圓部の徑約七十尺、同部の高さ十二尺內外となる。

さて此の塚の外形として、其の後圓部に比して前方のやゝ細長いことを擧げ得るが、それがまた圖で明な樣に、兩丘の築成に當つて、前方部の地盤が著しく低い爲に、其の上段は後圓の基段の延長上にあつて、そこに別に二段の同部を築成する結果となり、後圓部を一層顯著なものとしてゐる（圖版第二〇の一）。これと共に右の前方部の平面形が、先端の部分だけ二段とも、もと左右に張り出してゐたと解すべき特異な形迹のあることも記す可きである。次に積石の狀態は猫塚と異なる處ないが、段築の遺存した部分からすると、もと所定の高さに石壁狀の段を築いて、內を石で埋めて形を整へた狀態のより明確なものであつて、其の段の石築には特に大形石を撰んだ上、平滑な面を揃へて表面となし、崩壞を防ぐ爲に上部を漸次內積みとした用意が認められる。而して後圓にあつては本來高さ六尺內外（これに對する壁面の內傾斜は約一尺）の第一段の上に幅約六尺を縮めて同樣な第二段を積み重ねたものと解せられ、前方部またそれと大差なかつたものゝ樣である。然らば本石塚の本來の側面形は第十一圖の樣になつて、現在よりも一層特異な外觀を呈したことになる。

以上積石の原形と共に、其の段築の實際の上で注意を惹くものは、後圓の東

南側の示す狀態である。同個所は實測圖でも明な樣に二段築成の本來の形を比較的よく遺存した部分であるが、其の下段の崩壞した西半にあつては、上段の石築が深く下方に及んで、現在高さ十尺に近い石壁面を露呈して壯觀をなして居り（圖版第二〇の二）、同じ狀態の東方にも及んだことは殘存の積石の間隙から窺はれる（第十二圖）。此の事は內側の石積みがもと基底面から築き上げられて、然る後に其の外側に下段を造り添へたことを暗示するものと思ふ。果して然らばそれから塚の築成の過程が推し得るわけである。但しかく內側から漸次固めて造ることは、用材が石である場合、崩壞を防ぐ方法として當然なことでもある。

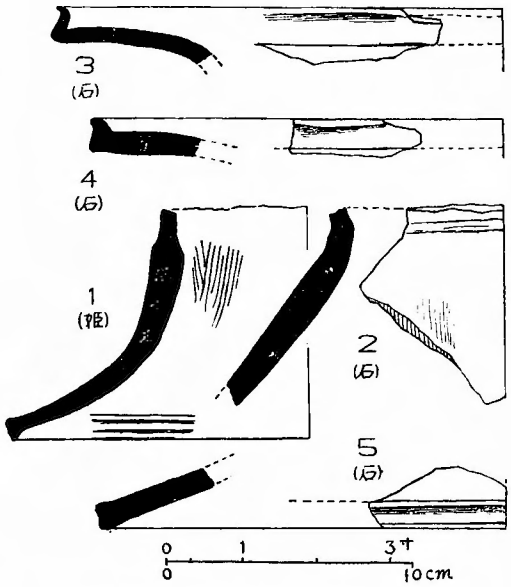
第十二圖　姫塚後圓部石築狀態見取圖　(Fig. 12)



次に外形と併せ記す可き事は本積石塚から埴輪圓筒片を出すと云ふ傳へである。余は大正十二年冬の踏査の際地方人士から此の事を敎へられて、塚の外形が段築の前方後圓であることゝ併せ觀て、それに感興を覺えたのであつた。依つて爾後の調査に於いて特に圓筒片の檢出に注意を拂ふたが、かへつて次節に述べる石船塚で破片を得て、本墳ではなほ實物に接するに至らず、其の存否を確めることは出來ない。たゞし此の探査から別に石積みの所々に赤燒土器片の遺存すると云ふ一の新事實を見出すことになつた。是等の素燒土器片

は後圓の積石間にも時に介在してゐるが、特に多いのは前方部であつて、其の後圓に接する北側のクビレ部、前方正面の中央、同南側の先端等に多量の片を見受け、而もそれ等が孰れも石築の壁面に密接した位置にあり、單に偶然の現象と考へ難い狀況を呈したものであつた。尤も破片は孰れも原形を見得る程の纏つた類ではないが、併し前方部から出た一片は底徑八寸の大形な壺などの臺と思はれる類（第十三圖の1）で、其の約三分の一を存し、相似た破片は外にも一個あり、他は大部分壺の片と考へられて、此の類は前者よりは作りが薄い。而して通じて面に細かな刷毛目があり、時に丹を塗抹した破片のある點は所謂彌生式土器に近い趣を持つ。但し燒きは堅くて、作りは史前の遺跡から出る遺品よりは巧みなものである。是等の土器片がどうして斯樣な所に存するかはいま俄かに決し難い。併し同樣な狀態が後に述べる石船塚、稻荷山姫塚などでも認められる點からすると、其の存在の位置には何等かの意味があつて、單なる副葬品の散亂したものではないらしい。此の點から是等が或は塚の營造後に置かれた奉献的な遺物の一部ではないかとの推測を加へしめるものがある。附記して他日の左券とする。

第十三圖　(Fig. 13)



姫塚及石船塚發見土器片形狀圖

本古墳は既に初に指摘した樣に、前後兩丘共北半に採掘に依る積石の崩壞がある外に、現在後圓上部のほゞ中央に深さ三四尺の大きな發掘穴がある。此の墳上には古銅安山岩の積石の間に砂岩質の角の取れた礫石(1)(徑二三寸)が若干介在して居り、また板狀安山岩の散在をも見受けるが、それ等は右の穴の部分に於いて特に顯著なものがある。既記猫塚其他の例から推すと、板狀の石材はもと室の壁を構成したものと覺しく、また礫石は其の底に敷いた用材の名殘と思はれる。然らば此の部に主體の構造があつて、それが既に原形を失ふたものと見るべきことになる。傳へる所では此の穴は大正十二、三年の頃(2)、高松工藝學校教諭某氏が生徒五六人をして私かに掘開せしめたものであると云ふ。いま長町彰氏其他人士から聞くに、當時中心に掘り當てゝ石室を發見し、內部から鏡一面、刀片、土製坩一個等を獲て(3)、某氏の有に歸したとの事である。後に詳記する樣に、上原準一氏は近く右の教諭某氏の舊藏に係る古鏡一面を手に入れられて、それが土器、刀劍等と共に石塚の一から出たと信ず可き理由のあることは、古墳の實狀に比して右の所傳の實らしさを加へる興味ある事實とする。たゞ某氏は既に故人となつたから、いまは其の實否を確め難く、內部の構造また單に其の竪穴式石室であつたことを推測する外は詳細に究め得ない。

此の姫塚は次節に錄する石船塚と共に早く德川時代から地方人士の間に知られた墳壟であつて、『三代物語』(4)に其の名を錄し、また『讃州府志』(5)には名稱の來由に就いて一の附會說を載せてゐる程である。但し其の何人の墳壟であるやに關する徵證を缺くことは、多くの古墳の場合と異なる處がない。

序に擧げるが、此の姫塚前方部の西方約四五十間に圓形の石塚の崩壞したと見ゆる堆石がある。殘存部の高さ三尺内外で、何等構造部分の見るべきものがない。

【註】(1)寺田教授の說では此の種の礫石は阿讃の間の脈をなす岩質と同じで、それから流れ出てゐる香東川に多い川石であると云ふ。

(2)此の發掘の年時に就いては、余が最初調査した大正十二年冬に既に後圓部の中央が可なり凹んでゐて、其の狀態が現狀と大差なかつた樣に記憶するから、少くもそれ以前であつたとすべきである。

(3)昭和六年四月實査の際の聽書、長町彰氏「讃岐考古集錄」(前出)並に同七年九月十日附長町君の敎示等に據る。

(4)『三代物語』の石船の次に此の姫塚を擧げて、「以上在龜山」としてゐる。

(5)『讃州府志』卷七、香川郡之部に

「姫塚ハ累々トシテ石ヲ盛上ケタルモノナリ。一說昔此ノ地近鄕ノ某富豪ニ一女アリ、特種部落民ノ若者ト契ヲ結ビ年經テ其女沒セシカバ、其若者方ヨリ彼女ノ墳墓トシテ築キシ者ナリト云フ」

とあり、寺田教授の談では同じ說話は土地でも傳へてゐると云ふ。

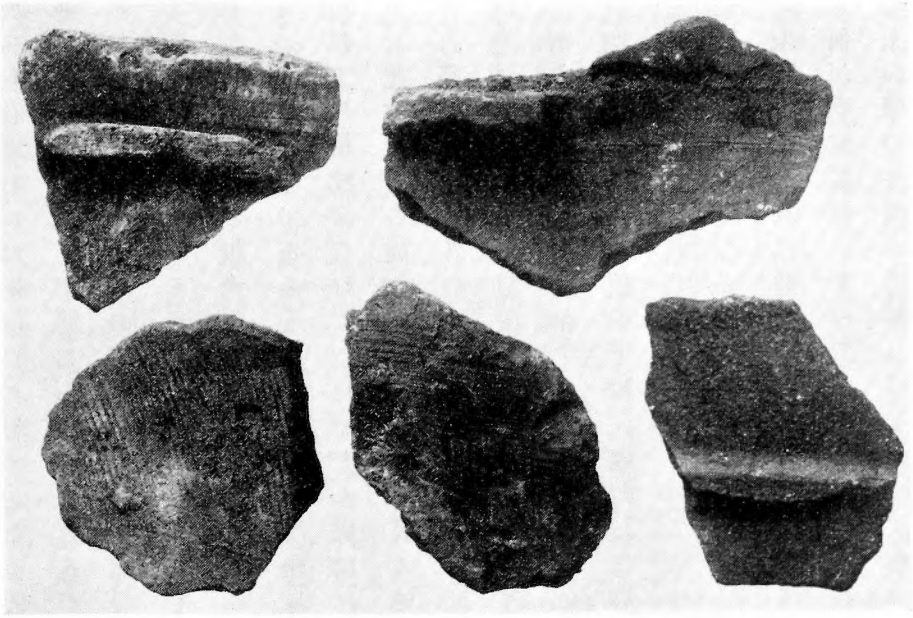
第二節　石船塚と其の石棺〔圖版第二・第一八・第二一―第二五〕

姫塚古墳の北方約四町にある。其の位置は摺鉢谷の東方中央部山巔の南半を占め、これから東に延びた尾の流れは稻荷山の尾と連なつて、同山の姫塚と東西に相對立してゐる(圖版第二)。塚は緩かな傾斜を示す熔岩の露出した南方に後圓を營み、地盤の高い北方に前方部を造り添へたものであるから、姫塚同樣後圓の規模の大きい墳であるにも拘はらず、前後の兩丘は程よい高さの均衡を保つてゐる。形狀は圖版第二一の實測圖に見る如く、前後の主軸の長さ百九十尺、後圓の徑百尺を超へ、[1]其の後圓の大さが、此の地盤の上に築き得る最大限度であることは、積石の表面の傾斜がほゞ其まゝ地盤の傾斜につゞいてゐる點から容易に認められる。後圓

は上邊に一部分土砂の介在した部分を見るが、大體は一二尺の古銅安山岩の累々たる堆積であつて、現在それには姫塚に於けるが如き段築の形迹が顯著でない。併しながら仔細に觀ると、側面の處々に彼と相似た石積みの痕迹があつて、東側には上下に三段の石垣狀の名殘をとゞめた部分すら存し、其の下段の幅は五六尺で、長方形の石材を撰び小口積みとして側面を揃へた狀態が認められる。で本後圓部も亦もと段築であつたと見るべく、たゞ上述の樣にそれが地盤上許される最大限度に築いたことや、早く石棺の採掘などの爲に崩壞して現狀をなしたものとすべきであらう。かく考へて現狀の示す處を顧みると、高さ十七八尺の後圓は或は三段以上に築成せられてゐたかとも思はれて、其の平な上部の徑は約六十尺となる。

次に北方にある前方部は、後圓から長く延びて（圖版第二の二）、先端でいまなほ二段築成の形迹をとゞめた高さ六尺內外のものである。端に近い其の高い部分の積石が採掘攪亂せられて石塊が四邊に散亂し、爲に現在では此の部分の外容が擴がりを有してゐる樣に見える。併しいまなほ前方部を通じて殘存する東側の段築からすると、上段は明に一直線であつて、それが後圓の東側に遺存した石積の下段に連續した形迹があり、また前方の東南端に於ける基段の殘存部も右の上段に並行してゐる所を以て見れば、後圓から同じ幅で延びた細長い式であることが確められる。而して實測の結果に依ると其の大さは、長さ約八十尺に對して、幅が右の石積みの上段で十七八尺、前方基底部で三十三尺を示す。平面形と共に此の前方部の段築は、石積の側面が垂直に近いものではなくて、二段共に上部の內傾きのやゝ大きな式である。

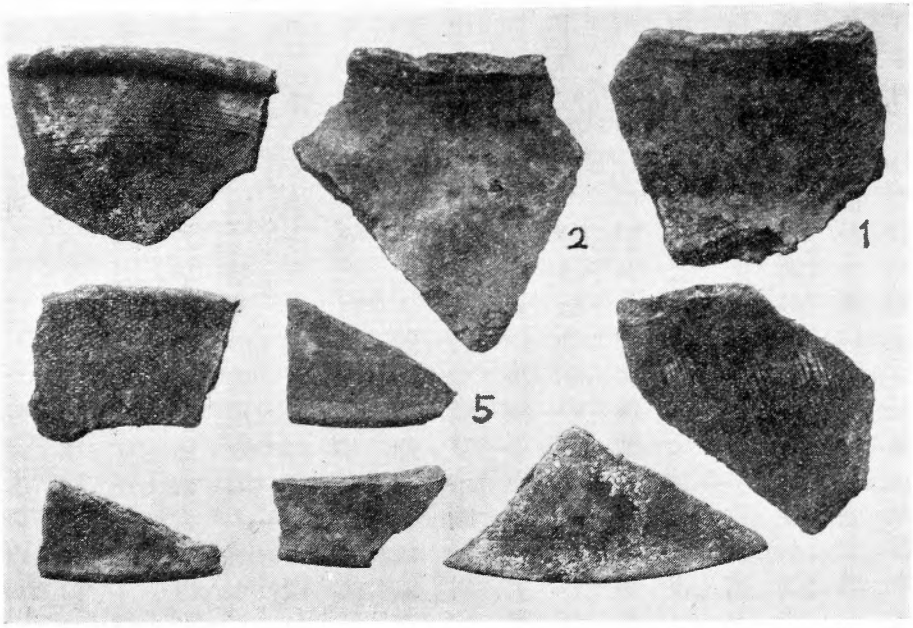
以上の塚の外形と連關して擧ぐべきものに、其の積石の間に於ける埴輪圓筒片の散在と、所



第十四圖　石船塚發見埴輪圓筒片 ½ (Fig. 14)

々から姫塚で見たと同樣な彌生式系の土器片を發見する事實とがある。前者卽ち埴輪圓筒は、まだ樹立の原形を遺存した例を見受けないが、吾々の短時間に採集した破片は二十數個に上つて、其の數量の必ずしも少くないことを考へしめるものがあり、以前に於ける長町彰氏の蒐集品がまたそれを裏書きする。(2) 此の破片の最も多く見出される部分は、後圓頂部の北半から前方部への鞍部に亘る積石間である。別に前方部の端や後圓の西麓に近い積石間にも存して、廣い地域に亘ること土築の前方後圓墳に於ける埴輪圓筒片散亂の場合と相似てゐる。是等の圓筒片は第十四圖に若干例を載せた樣に、其の原形を認めるには甚だ遠い小片で、各片別個の圓筒の部分をなしてゐたものと察せられるが、通じて箍の樣な帶狀突起を繞らし、面に刷毛目を印した通有の圓筒である。燒きは比較的堅く、其の作りに厚手と薄手との二種あつて、一は

厚さ五分を超へ、他は三分内外に過ぎない。



第十五圖　石船塚發見土器片　½　(Fig. 15)

而して破片から筒の大さを推すに、前者の一は徑九寸に達するものがあり、後者では徑七寸内外を測る一個を存して、この方には帶狀の箍の下に方形の孔を開いた痕がある。なほ破片のうちには表面に丹を塗抹したものや、朝顔の花形に開いた筒上部の片などが混在し、また二個の厚さ乃至形の上から圓筒片とは認め難いものもあつた。但しこれは破片が小さくて固より原形の何であるかは推し得ない。

他の彌生式系の土器片また姫塚に於けると同樣に、其の存在が顯著であつて、積石の間に點々として遺存し、吾々の採集したもの數十片に上り、特に前方部の後圓に接する所謂クビレ部積石の外側附近から多量に拾得され、其の存在位置の姫塚の場合と合致することに興味を覺えた。破片は孰れも厚さ二分外内の表面に刷毛目を印した比較的硬質の

器片で、うちに丹を塗抹したものを含み（第十五圖の125）、本來の形は壺の類の外に器臺乃至高杯と思はれるものを存して、うちに脚の喇叭狀に開いた形（第十三圖の2）や「く」の字形の口緣をした坏とも見るべき遺品が目立つてゐる。

右の二者のうち、埴輪圓筒は通常古墳の封土の周圍に樹てられたものであることは改めて說くまでもない。如上の破片の示す處、もと數が多かつたと考へられるから、同じ用途に供へられたものであらう。處が既に記した樣に本古墳は石塚であつて、現在後圓の前半部に若干の土砂の介在を觀、また黃櫨など生じてはゐるが、累々たる石塊から成つて、かゝる圓筒列の必然的な存在理由を認め難い。此の事は他方積石が珍らしい前方後圓なる形式を取る點と相俟つて其の性質の考察に重要な示唆を與へるものとして、後章改めて說くであらう。

さて此の石船塚は、其の後圓の上部に、名稱の依つて生じた石棺を露出してゐて、それから外形と共に內部主體の構造をも徵することが出來る。棺の現在の位置が本來の儘であるかどうかは明でないが、其の身は後圓上の平坦な部分の中央に近く、頭部を西にして、ほゞ正しい東西の方向を取り、現表面下約三尺五寸に其の上面を置いてゐて、蓋は恰も開いて置いた樣に、北側のやゝ高い部分にある（圖版第二四）。右の棺の位置は平面上では後圓の中央に近く、主軸と直角に交る正しいものであり、立面形も多くの前方後圓墳に見る主體の位置に相合ふから、これを以て本來の位置から動いたものと强て考へる必要はない。[3] 此の棺は早くから所謂割竹形石棺の好例として、また身に造り附けの石枕のある點から、考古學者の間に知られてゐるが、其の形狀として世に紹介せられたものは甚だ不充分なものであり、なほ實際を誤り傳へてゐる。[4]

是れ蓋し積石の間に介在して調査の容易でなかつた爲であらう。圖版第二五に吾々の實測圖を掲げて、以下特徴を記し從來の闕陷を補ふことにする。

棺は角閃安山岩（Hornblende Andesite）を以て造作した所謂掘拔き式で、蓋身の二つの部分から成る。其の形は大體一方が他端よりも幅の廣い圓筒を二つに割つた趣を持つ點で、從來割竹形と呼ばれてゐる典型的なものである。尤も細部に就くと、幅は一方が大きくて他端で狹まつてゐるが、其の遞減の中程に於いて緩かな膨らみを持ち、また側面に帶を繞らしてゐるのをはじめ、上下の部分が甲盛をなし、その中央に山形飾りを造り出した點等に複雜な形を具へて、單純な式ではない。先づ長さ八尺七寸に對し、頭部での幅二尺五寸、他端一尺八寸を示す身は其の緩かな膨みのある左右の兩側に於いて、ともに上面から若干の間外方へ張り出して、その下に一條の突帶があり、然る後に甲盛りの下側面となつて、底の峰狀の突起につゞいてゐる（圖版第二五）。これに較べると、前後の兩端は多くの古式棺に見ると同樣な圓形の造出が殆んど唯一の重要な部分をなして、前者の樣な加工はない。尤も此の身では造り出しの一方は缺失して現在頭部のものを遺存してゐるに過ぎない。次に上面に穿たれた遺骸を容れた部分は、外形に相應じて長さ七尺二寸許を最も深い處で約一尺位掘り凹めたもので、各部に若干の丸味を持たせ、周圍は底部ほど窄まる。而して幅の廣い頭部約二尺五寸の間は底が一段高くて、同部に石枕の造り出しがある。石枕の形は圖版に添へた細部の圖並に寫眞で認められる樣に、人體の肩から上の形が造り出されてゐて、面の中央後頭部の所をやゝ深く彫り凹ませ、其の三方に馬蹄形に近い帶狀の突起を作つて、頭部の移動を防ぐ用意を示した點は、如何にも遺骸の

頭を直接その上に置いて棺内に伸展葬するに恰好な形のものである。

蓋は身の上に一文字に相重なる式で、平面形をやゝ大きくした外、接合に就いて何等特殊な裝置はない。これまた兩側に帶狀の突起があり、上端にV字形の峯狀飾りを作り出してゐることや、前後に圓形突起を附した點(但し今兩者とも缺失)で、身とほゞ合致した外形である。但し其の內面に穿たれた刳りは、身とは違つて、外形に相應した、中央の部分の最も大きい式で、所謂屋根裏の如き狀をしてゐる。此の蓋の示す高さは頭部一尺八寸六分に對し、脚部一尺四寸で、その上に幅と相似た縮少が見られる。されば如上各部の大さの一致と相俟つて、いま埋沒して確め難い、身の高さの實際もまた同式であるであらう。

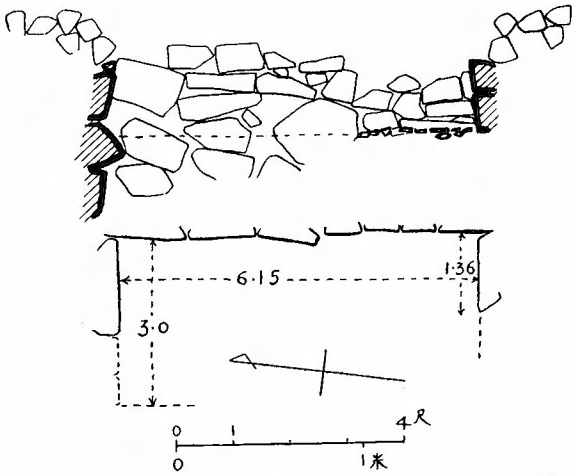
以上述べた棺の形式を從來知られた本邦各地の數多い石棺に對比すると、確かに一の特色を有したものである。同式の遺例としては河內南河內郡玉手村安福寺に手洗鉢として[5]、一半を遺存するものがある位に過ぎない。さり乍ら此の身にある石枕と同形式の造り出しのある棺は、本邦各地に往々見受けられる處で、特に讃岐では形式の上で、此の棺と連系の考へられる舟形石棺に同じ枕の造り出しあるものが各地に存し、うちに土築の前方後圓墳の主體をなす例を觀る。是等は孰れも本石棺と同じ角閃安山岩で作られてゐて、其の石材が綾歌郡山內村鷲山(ワシノヤマ)所產である事實は、[6]棺の考察から惹いて、それが主體をなしてゐる本石塚の性質の考査に重要なる據所をなすものと思ふ。其の詳說は後章に讓る。

最後に此の石棺のうちに如何なる副葬品が藏置せられてゐたかと云ふ研究上緊要な事項は、發見の年時と共にいま全く明でないことを遺憾とする。『三代物語』の中に、

石船（名天ノ岩舟）吾見レ之似ニ葬ノ人石廓ニ可レ疑

とある點から、石棺露出の古いことを知るが、(7)既に同書に何等遺物等に關する所傳を載せてゐない。從つて今日からそれを推すことは不可能である。

上來述べた石棺の外に本古墳にはなほ記すべき別な構造部分がある。それは前方部に於ける竪穴式石室である。所在は同部の中央から少しく後圓の方に片寄つた上段の積石間で、方向は主軸に並行してゐる。これまた早くから暴露してゐたものゝ樣で、大正十二年冬調査の際既に西壁の大半を失ふてゐて、半潰の狀態にあつた。次に當時の所見に昭和六年度の調査の結果を併せて構造の一斑を擧げよう。



第十六圖　石船塚前方部石室形狀圖 (Fig. 16)

室はいま積石の表面から數寸の下方に側壁の一部を遺存するもので（圖版第三の二）、其の大さは長六尺一寸五分、幅三尺内外の矩形をなし、大形な石塊を用ひ、平滑な面を揃へて其の四壁を造つてゐる。現在では上部で若干の縮約を示す側壁が約一尺位あるのみであつて、下部は砂利と、剝離した小石材とを敷いた床の一部となり、大半は掘り返されて下の積石が露はれてゐる（第十六圖）。天井石などもとより遺存せず、上部の破壞の多い事を考へしめる。吾々は調査の際此の室の一隅から彌生式土器片一個を獲た。それは燒きの頗る堅い外開きの壺の口緣部で、全面

に丹を塗抹したものであつた(第十五圖の5)。但しこれが本來の副葬品の一部であるや否やは、積石の間から既記の樣に同じ破片が出てゐるので定め難い。

【註】(1)此の大さは吾々の平板測量圖の示す所に據つた。昭和五年の香川縣の測圖では前後の主軸の長さ三十六間(二百十六尺)、後圓の東西の徑二十四間(百四十四尺)あることになつてゐる。參考の爲に載せて置く。

(2)長町彰氏が明治四十二三年頃から大正六七年頃までの間に蒐集した破片は支那鞄に二三個分に達したと云ふ(昭和七年九月十日附同氏教示)。氏はすべてそれ等を土器片と見てゐるが、特徴として破片が厚手で、また紐附きであると云ひ、且つ圖示した例からすると、其の大半が本文に載せたと同じ埴輪圓筒片であることが知られる。

(3)笠井氏の論文(前出)には棺の位置に連關して、

「石棺の四邊には石室の構成に用ふべきカン〳〵石の板片が散亂してゐるのを以て考へると、そこにはやはり煉瓦式の縦式石室があつて、石棺はその中に安置されてゐたものと思はれる。」

とあつて注意を惹くが、吾々にはそれを肯定する樣な點が見出せなかつた。

(4)故高橋博士「石棺石槨及び壙を論ず」(『考古學雜誌』第五卷第十號)第一圖並に近刊の後藤守一君の『墳墓の變遷』第二〇圖舟形石棺(5)等參照。特に此の後者の圖は事實と違つたものである。

(5)井上喜久治氏「河内玉手山安福寺ノ手水鉢」(『東京人類學會雜誌』第六卷第六十三號)梅原「近時調査せる河内の古墳」(上)(『考古學雜誌』第五卷第三號)等參照。

(6)此の點を注意せられたのは岡田唯吉氏である。同氏の報告(前出)參照。

(7)中山城山の『全讃史』(增補本)の第十一卷にも「石船」に關した相似た記事がある。參考の爲に左に引用して置く。

「石船、碾子谷の奥にあり、石にて作りたる船なり、土人云上古天神の乘給ひし天磐舟なりといへり(中略)上古の石槨ならんと云。さもあるべし」云々。

第三節　鏡塚古墳

〔圖版第二・第二六・第二七〕

石船塚の北に近接して、ほゞ同高の山の背に營まれたものである。此の塚は前二者よりは積石の崩壞の度が著しく、其のやゝ大形な用材が四周に散亂して、高さを減じて居り、爲に外容

の整齊に缺くる處がある。併し主脈に添ふて東西に長く遺存する累々たる積石は一の壯觀をなして、長さ二百四十尺を超へ、また其の形が大きな圓形の部分を中央にして、前後にやゝ細長い丘を作り出した所謂双方中圓墳に屬し、猫塚と同樣な外形を取つてゐる點で、群中注意すべき遺跡とする。

實測の結果に據るに、其の中央の圓形部の石積みは徑八十尺內外、高さ約十二尺の臺狀をしたもので、其の前後に作り加へた細長い二つの前方樣の部分は、共に長さ約七十尺、前端での幅各三十尺內外を示す（圖版第二六）。是等の各部は、はじめに記した樣に積石の崩壞に依つて本來の形を明確に認め難いが、上から墜落した石塊の間に點々と當初の造構の名殘たる段積みの形迹を遺存して、中圓部の東側の一部には二段の石積みが上下に認められ、それから第一段の幅の十二尺內外であつたことを推し得ると共に、其の上段と、他の西側上部に殘存する石積みとから、圓丘上部の徑の六十尺に近いことが知られる。而して其の所謂双方部また、共に先端に於いて直線的な石築の形迹と、同部の二段積みであつた名殘とを遺存して、其の一方の形のみを取る時は、既記の二塚で見た前方部と異なる所がない。

此の大きな積石は現在、中圓部をはじめ、前後の兩丘とも掘り荒されて、中圓部に穿たれた四五の盜掘穴のうち、南に偏在した一個の如きは深さ七八尺に達して、慘狀を呈してゐる。積石の間殆んど土砂を混ずる事なく、また用材がやゝ大きいので、此の部分の示すところは、如何にも石塚の名にふさはしいものである。但しその孰れにも何等見る可き構造部分がなく、また土器片なども一も見受けなかつた。(1)

【註】(1)笠井新也氏は、其の「石塚の研究」(前出)に於いて、本墳の内部構造として「前後の方丘部に各一箇、圓丘部の四方に四箇、凡て六箇の石室を持つてゐた」と記してゐる。是れ蓋し現存の盜掘穴を一々石室の名殘と解したものであらう。併し孰れにも石室の存在を徵すべき確證を認め難い。

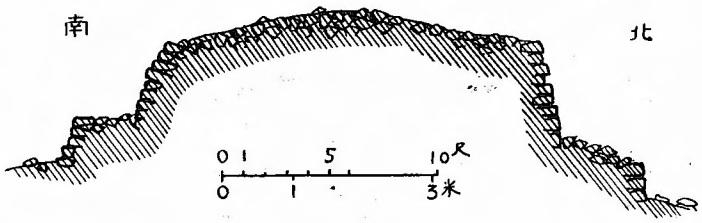
第四節　北大塚古墳と關係一方墳

〔圖版第二・第二八—第三一〕

鏡塚から西北に約一町半を隔てゝ、西に向つて漸次下降する主脈の端に近く一の大形な前方後圓墳がある(圖版第二)。これは從來特別な名稱を聞かないので、いま其の位置から假りに北大塚と呼ぶことにする。塚は上來の諸例と同じく、山の背の方向に主軸を合せたもので、前方を東南に向けてゐる。其の後圓は上部に試掘穴等があつて石塊累々として段築の遺存する部分は多くないが、前方部にあつては、其の上面に若干の土砂を存して、その爲でもあらうか、段の築成がよく舊形をとゞめ、同部の本來の珍らしい形を見ることが出來る(圖版第二八)。卽ち後圓の徑六十四五尺に對して長さ六十七尺を計る前方部は、姫塚とほゞ同じ比例の細長いものである。後圓から延びた幅十五六尺高さ五六尺のやゝ高い一段積みの此の前方主體は、前端に近づくに從つて、高さ並に左右への擴がりを示し、其の約十五尺の部分だけ基底部の三方に幅四五尺、高さ二尺內外の凹字形の段を作り添へた特異な形が可なり明瞭に遺つてゐる。此の部分の段築の狀態は姫塚のそれと大體似てはゐるが、右の低い基段を伴ふた先端から、全部を通じて、

側面の石築部にはつとめて大形の石塊を用ひ、其の各の平滑な割れ目の面を小口として、石垣と同樣に積み重ね、間隙に小石を加へたものである。此の壁は高さ四尺に對して、約一尺位の割合で上部が內側に傾きを持つてゐる。兩側の石垣積みの內部は割石を詰めたものであることは云ふまでもないが、本墳の場合では更に上部に若干の土砂を加へて平にしたことが現狀から考へられて、此の點姬塚とはやゝ趣を異にする。さて前方の端の部分に左右への張りを設けた形迹は既に姬塚で見受けた事であるが、同墳では崩壞の度がやゝ大で、爲に不分明な點があつた。されば本例はそれ自體一の特色を示すのみならず、彼の原形を推すにも役立つものであり、二者を通じて積石の前方後圓墳の一特性が考へられるわけである。

第十七圖　北大塚前方端橫斷面　(Fig. 17)



次に大形な後圓の積石はもと二段築成であつた形迹を僅ながら其の南側の斜面に遺存してゐる。それに依ると幅五六尺の低い第一段の上に、垂直に近い側面の石積みを示す第二段が來て、其の上部が廣濶な面をしてゐたことが分る。此の上邊は、四周に點々遺存した石積みから推すと、徑約五十尺となる。然らば本後圓の現狀は姬塚の樣に目立つたものではないが、本來同じ造構であつたと認められて、其の原形が、一見後世の臺場の樣な感を與へる類であつたことが考へられるのである。

此の後圓の中央部にまた深さ三尺內外の大きな盜掘穴があつて、近く破壞の手の加はつた

事を示してゐる。併し同部には何等内部の構造を徴す可き部分を見受けない。關係の遺物としては昭和六年春調査の際、前方部中程の積石と土砂の間から彌生式系の壺片若干を獲たことゝ、昨七年秋、後圓南側第一段の基部で同じ土器片を發見した位に過ぎない。

右の北大塚の前方端に接して一の積石の隆起がある。最近其の上部を掘り返して、大きな二個の穴を穿ち等した爲に頗る舊態を失ふてゐるが、仔細に觀ると、其の東北の部分にはもとの積石の二段に築いた形迹をとゞめて、而もそれが一直線狀をなし、上段の如きは墜落した石塊を除くと割合によく原形を遺存し（第十八圖）、一方に隅角さえ認められて、それから積石本來の形の四角であつたことが分る。大さは右の舊形のやゝ存した一面に於ける基底長さ三十五尺内外で、幅五尺の低い第一段の上にやゝ高い第二段を築いたものである。現在は其の高さ三尺内外ある（圖版第二八）。尤も此の積石の二段築成は前と左右の三方のみで、北大塚の前方部に接する一面は上段から直ちに同部に接して、其の間の距離は僅かに九尺に過ぎない。其の位置が正しく北大塚の前面にある點から見ると、兩者の關係が考へられて、或は北大塚に附隨した一の營造物かとも思はれるふしがある。但し現狀の示す處ではやはり一の

第十八圖 (Fig. 18)

方墳前面直線狀の石築

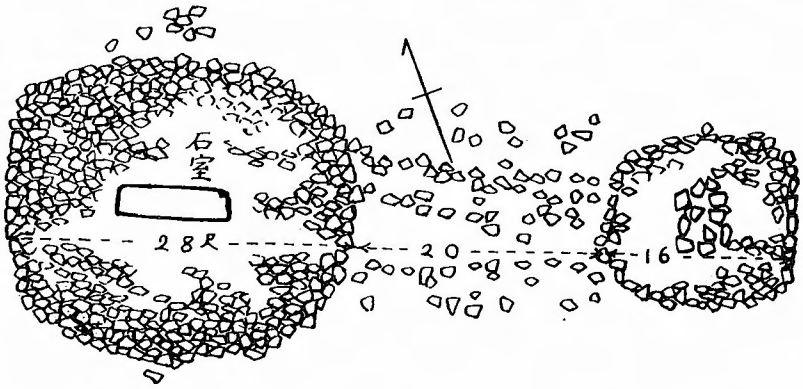
獨立した方墳とするのが穩當な見方であらう。併し内部の樣子は全く分明しない。

第五節　自餘の二古墳　〔圖版第二・第三〇〕

以上列記した外なほ同じ山の背の上に認められるやゝ著しい遺跡に、西北端にある一基と、姫塚と石船塚との中間高地の古墳とがある。こゝに一括して其等の概要を擧げることにする。

前者は北大塚後圓基部か西方約五十五六尺を隔てた處に積石の中心を遺存するものであつて（圖版第二）、現在徑二十七八尺、高さ四五尺の大さを示し形がほゞ圓く、なほ周圍に石材の散亂を見受ける。岡田唯吉氏は其の南北兩側の石塊を以て本來所築のものと解して、これを本墳の枝塚となし、更に北大塚と結びつけて一の珍らしい形を推定してゐるが、[1]それは俄かに信じ難い。此の塚の位置は摺鉢谷を繞る馬蹄形の山丘の一方の端に當つて、西方は特に急峻な傾斜を示してゐるから、本來の積石が崩壞し易く、且つ後に述べる樣に塚が盜掘に遇ひ破壞を著しくした實狀よりし

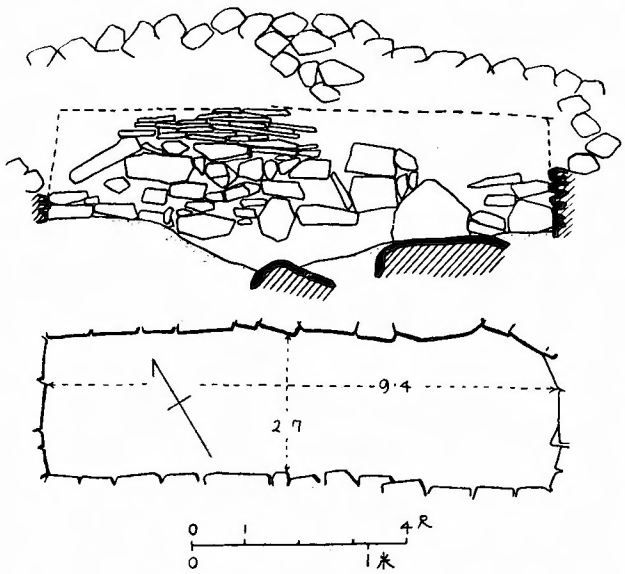
第十九圖　北西端の一石塚形狀略圖 (Fig. 19)



て、石の石塊はそれ等に依る單なる用材の散亂と解す可きであらう。併し如上の圓い積石部と北大塚の後圓とを結ぶ線上、約四十二三尺の間にはあまり目立たないが、積石の續いた形迹がある。特に北大塚の基部から七尺を隔てた所にはじまる約十六尺の間は、それが高さ二尺内外の隆起を示して、東邊の部分に直線的な石並びすら認められる。從つてこれを本墳と併せ觀ると、東向の小規模な前方後圓形が考へられて來る（第十九圖）。兩者の中間に極めて低いものながら幅十尺内外の積石並びが存し、また附近に石塊の多い事は、本來の墳形をかく解するに合致する樣に見える。果して然らば此の古墳は前後の主軸の長さ六十四五尺の前方後圓墳であつたことになる。たゞ今日では積石の散亂甚だしいから、なほその斷定を躊躇せしめる點がないではない。

此の塚また採掘せられて、中央に摺鉢狀の凹みを生じ、大正十二年冬の調査の際、其の一部に石室の遺存してゐることを知つたが、[2]昭和六年春の實査に先立つ旬日更に同部が掘り返されて、積石の崩壞を大にし、石室が大半破壞せられる事になつた。從つて今日では室の造構の正確な記述をなし得ないけれども、現狀からすると、大體の形は第二十圖の如きものであつたと考へ

第二十圖　西北端石塚の石室　(Fig. 20)

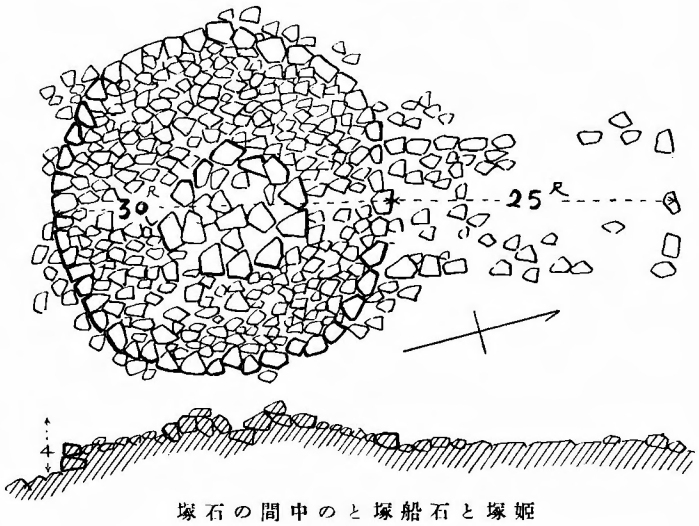


られる。平面は長さ九尺四寸、幅二尺七寸の大體東西に長い矩形をして、それは積石のほゞ中央に位し、下部に露出してゐる岩盤の間を埋めて平にした上に營んだものである。側壁の下半は積石と同じ古銅安山岩の石塊を用いてゐるが、上邊は片岩を煉瓦狀に積成して、其の手法猫塚の石室に等しい。現在遺存する壁は二尺の所が最も高い。其の上二尺で積石の上面に達する點からすると、本來割合に低いものであつたと見える。

右の石室内に如何なる副葬品があつたかは知るに由ない。たゞ吾々は調査の際、室の北西隅で盜掘者の遺棄した赤燒の壺の破片を採集してそれに一の資料を得た。これは上半の狀態は分らないが、中等位の大さの丸底の壺片で、土質に砂利を含み、比較的粗な面をしてゐて、内側には手ヅクネとも見るべき痕の上に刷毛目があり、猫塚等の出土品に比して古調を帶びたものであつた。

他の一基の墳は、其の所在地の高燥な點で石船塚に比すべきものであるけれども、本來の規模の比較的小さかつたに加へて、早く破壞の災に遇ひ、現在頗る見榮のしない狀態にある。さり乍ら、散亂した石塊の間に徑三十尺の基段積みの上に、更に第二段を重ねた積石の下底部を遺存し、ま

第二十一圖 (Fig. 21)



姫塚と石船塚との中間の石塚

たもと北方に前方部があつたらしい形迹をもとゞめてゐる（第二十圖）。其の主要部の段築は露出した地盤上に營まれたものゝ樣で、壁の部分に特に大形の石塊を撰んで外面を揃へ、内により小形の石塊を埋めたこと姫塚等での所見と相似たものである。

【註】(1)岡田唯吉氏の報文（前出）附圖第八墳參照。

(2)吾々に先立つて長町氏は此の墳を調査して、石室の遺存を留意、其の大さ縱徑六尺二寸、横徑二尺五寸、深さ二尺餘であることを記し、二三年來の盜掘の結果露はれたものとしてゐる（前出同氏報文參照）。

第四章　稲荷山の諸石塚

第一節　稲荷山姫塚

〔圖版第二・第三一・第三二〕

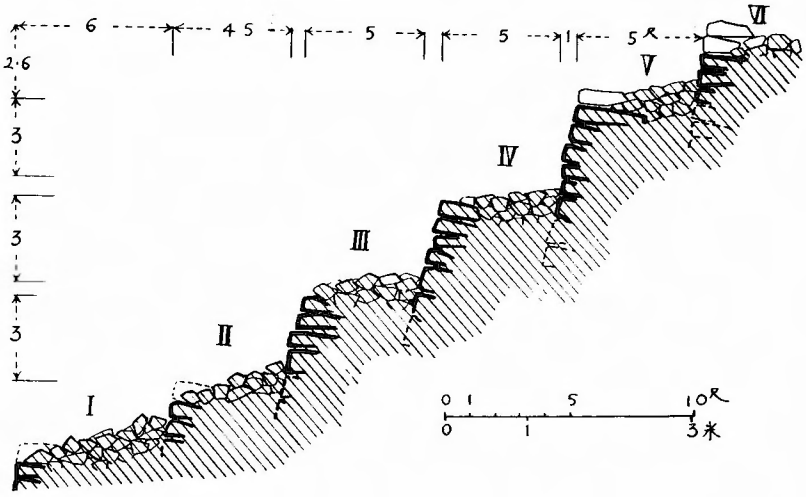
前章述べた摺鉢谷東方の主峯に並行して、石清尾山群の東界を劃してゐる稲荷山に於ける遺跡は、其のほゞ中央にある一個を以て最も著しいものとする。これは俗に稲荷山姫塚と呼ばれて、[1]上記石船塚のある所からつゞく所謂鞍部が此の山丘に連なる最高部にあり、南方には更に室山を控えてゐるが、西方は廣濶で前面に既記の諸墳を望み、東西に對立の狀をなして、また形勝の域を占めたものである。

塚の外形は前方後圓の式に屬して、前後の長さ百八十尺を超ゆる大形であり、加ふるに其の前方部は地盤が急傾斜を以て下向してゐる西方にあるので、同部の石築は稀に觀る大規模なものとして注意を惹く。いま島田有光兩君の作製に係る實測圖（圖版第三二）に基いて外形を擧げるに、其の後圓は積石の崩壞がやゝ著しくて、爲に塚と地盤との限界が明でなく、現在では南から北東につゞく山の脈の形が積石の上に表はれて、後圓としてはやゝ歪んだ形をしてゐる。併し各部の狀勢から推すと本來はやはり正圓であつて、其の形迹は南半部に殘存する二段築成の積石の間に認められ、原徑が八十尺内外であつたことまで分明する。右の段築は、大要既述の諸墳に相似て、五六尺幅の第一段の上に第二段を重ねたものであるが、こゝでは所築の用

材が主として、長さ二尺内外一邊六七寸の方柱狀の大きな石を撰びその小口を揃へ重ねて段部の堅牢を期した點に一の特色を示してゐる。

次に前方部は右の後圓から延びた長さが、前丘の上端までゝ七十尺を超ゆると云ふ大形のものである。但し地勢の關係もあらうが其の高さは後圓に比して割合に低い。さりながら此の前方を形成する爲に正面に大掛りな石築の段を築いてゐて、而もそれが比較的よく原形を存することから、西方よりの狀態の頗る雄大な趣を呈することは特筆に値する。此の部の段築は實測圖で明な樣に地盤に適應せしめる必要上、狹い段を數多く正面部だけに重ねたもので、現在認められるそれは六段を數へる。各段は幅五尺内外で、大形の石材を撰んで、其の小口を揃へて、やゝ斜に石垣樣の壁を作り、うちに石塊を加へた點は他の多くの場合と異なる所がない。またそれぞれの段の壁が地盤から築き上げられた點で姫塚の場合と同じ造構を示すことも、崩壞した部分の實際が明示してゐる。いま其の狀を一目瞭然たらしめる爲に第二十二圖に右の段築の細部圖を載せた。

第二十二圖　稲荷山姫塚前方石築狀態（斷面圖）(Fig. 22)



此の稲荷山の姫塚また他の石塚の例に漏れないで、現在後圓上部の南寄りに二個の大きな穴があるのをはじめ、前方部にも大小三個の採掘穴を見受ける。其の前者は共に徑七八尺、深さ二尺餘を測り、後者の一はそれが別な空隙に通じて、同部に石室のあつたかとも推測せしめる點がある。笠井新也氏は早くこれを以て石室の名殘と斷じて、中央での室の幅二尺、長さ六尺許りと、其の大さまでも擧げてゐる。(2) 併し現在ではかく認めるに徵證が乏しく、右の數字は恰も盜掘穴のそれに相當るものである。なほ此の塚でも南側から前方に續くクビレ部の邊で、段築の積石に添ふて若干の彌生式系の土器片が見出される。是等の土器片は姫塚以下で見たものと全然同一であり、而もそれが相似た石築の壁に添ふた位置で板岩狀の石塊と混出することは注意すべきである。

【註】(1)笠井新也氏の論文には紫雲山姫塚とあるが、こゝでは地方人士の稱呼に從ふ。

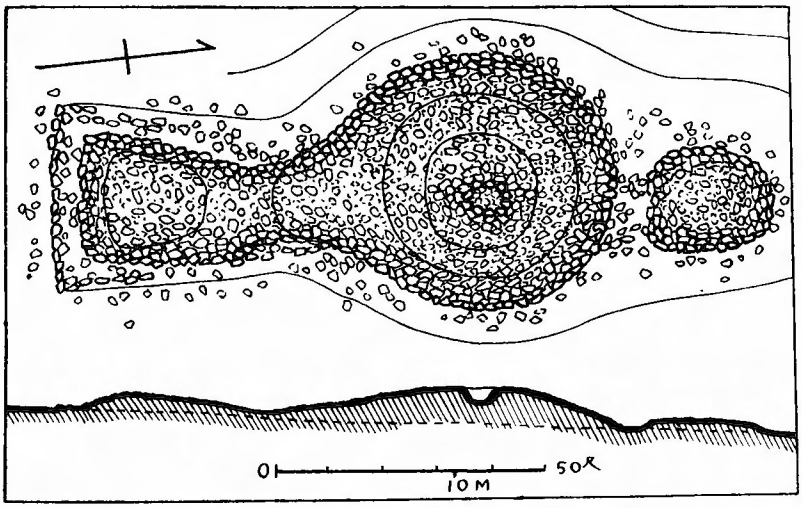
(2)同氏の論文(前出)の主要遺蹟の第一項參照。

第二節　姫塚の南北にある石塚

稲荷山に於ける自餘の積石塚は前節の姫塚を中にして、北方の山の背に點々遺存し、また南方にもやゝ大きな一個を見受けて、其の存在狀態は第三章に擧げた諸墳と相似てゐる。さりながら是等は概ね積石の崩壞が甚だしく、特に北の峯にあつては、北端の一基を除いて、約二丁の間殆んど一面に石塊が散亂し、本來の形はもとよりの事、それ等が幾個の墳をなしたかすら

究め難い。從つてこゝでは一括して其の主要なものを記述するにとゞめる。

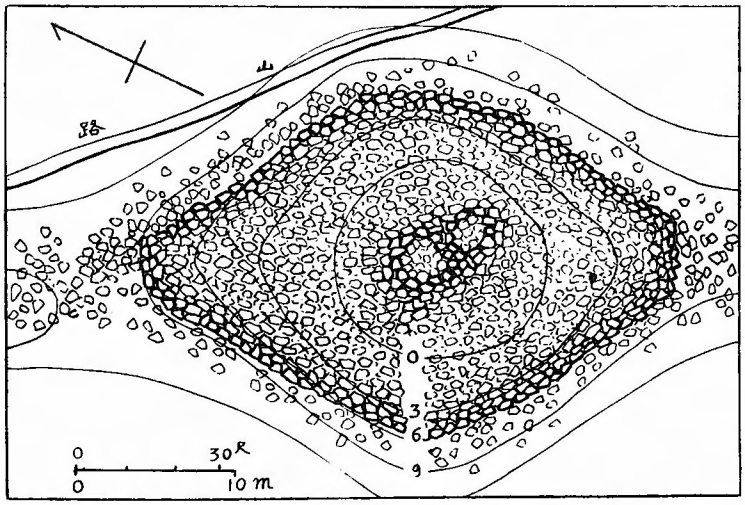
先づ南方の塚は上記稲荷山姫塚の後圓部から四五十間の所にあるもので、山の背に添ふて南北に長く積石を遺存してゐる。既に石塊が四散して、其の明確な形を失ふた現狀にあるが、而も高さ約八尺、徑四五十尺を測る圓形部を中にして、南北に積石が連續してゐること第二十三圖に見るが如く、其の通じての長さ百二十數尺に達して、本來の規模の小さくない事を察せしめるものがある。右の外容は猫塚、鏡塚で見た双方中圓墳に似てゐる點で興味を惹く。併し此の塚にあつては、崩壞の結果、段築の形迹などなく、中央部と前後の兩者との關係に就いて明瞭を缺く點がある。即ち室山に向つて漸次地盤の上つてゐる南方のそれは、積石の隆起が四十尺内外つゞいて、高さ四尺餘を示し、また同部の前面の石塊は一直線をしてゐる樣で、その長さ三十五六尺あるから、これを中央部と結びつけて、其の前方と解することに左程無理はない。處が北方の積石は、徑二十四尺、高さ二三尺の極めて雜然としたもので、それから一の正しい形を求め難い上に、よく見ると中央部との間に約七尺の



第二十三圖　稲荷山南塚形狀略圖　(Fig. 23)

殆んど積石のない部分があつて、俄かにこれを以て他の前方部とはなし得ない。現狀は寧ろ南面の前方後圓墳の背後に接して小圓丘を營んだものゝ樣に見える。此の塚また中央の圓丘に採掘穴がある。所在が栗林公園の裏山に當つてゐるので早く破壞せられたものであらう。(1)

次に北の峯の古塚中、積石の顯著に遺存した北端の勝地にある一は、上來の例に比べて大きい石塊を用ひて築成せられてゐる。それには段築の形迹が明でなく、現在は徑百尺に近く、高さは中央で七八尺ある。一見した所では圓い樣であるが、實際は山の脈に沿ふてやゝ南北にながい楕圓形をなし、地盤の傾斜を示す北部に石積みのつゞく外、南の方にも角張つた積石の形迹が認められること第二十四圖の略圖の如くである。但し中央部が掘り返されて、石塊の異動が甚だしいから右の形が果して本來のものかどうかは俄かに決し難い。



第二十四圖　稻荷山北端の石塚略狀形圖　(Fig. 24)

此の北の塚と姫塚とをつなぐ石塊の散在地帶に於いて、今日明瞭に遺跡と斷じ得るものは前者の南方約二百歩にある一個である。これは今積石散亂して殆んど墳形をなしてゐないが、石塊の間に殘る老樹の切株の下に石室の存在した

徴證を示すものがある。卽ち同部には扁平な板岩を積み重ねた壁狀の一部を露出すると共に、それに添へて若干の空隙があり、竪穴式石室の一部なる可きを察せしめる。相似た扁平な板石の散在した所は、本墳と北の塚との中間にもなほ一個所ある。其處では石材の分量が少くて、同じ石室の破壞した名殘と斷するには規模餘りに小さく、また一種の箱式棺を想像するには石片が相合致しない。從つてこれは別に稲荷山姫塚により近く位置した石塊のやゝ隆起した一の塚らしいものと共に其の決定はなほ後考に俟たう。

【註】(1)此の南の塚と稲荷山姫塚との間に一個所石塊遺存のやゝ顯著な部分がある。長町氏の既記の論文にはこれを一個の石塚と數へてゐる樣であるが、現狀では其の石塊群に接して岩盤の間に水溜りを見受け、かく斷ずるに明證がない。ここでは單に註記にとゞめる。

第三節　稲荷山西方鞍部の遺跡

稲荷山の諸墳の記述に連關して擧ぐ可きものに、同山姫塚と既述の石船塚とを結ぶ所謂鞍部の遺跡がある。尤も此の部分は、主峯の急な傾斜の接續したものである上に、其の中央に高松市から鷺田村への所謂鳥打越の小徑が通じて、早くから石材を採取した形迹があり、從つて大形の遺跡とてはなく、また現在完形を保つ類に乏しい。(1) さり乍ら嘗て長町彰氏が上記小徑の東側の一墳から種々の素燒土器類を獲た事實があり、余等また小徑を北に去る約三十間の地點で一個の相似た土器片の埋沒を見出して、それ等が上來述べ來つた諸遺跡出土の土器片に比して明確な形なり、性質を示すところから、また石塚の研究に一の資料を提供するもので

ある。

右の長町氏が多數の土器を得たと云ふ地點は、現在では最早積石の見るべきものはないが、鞍部のやゝ平滑な部分に石塊の取り去られた跡とも覺しき所があつて、附近に埴輪圓筒片と素燒土器の細片等を見受け、嘗て遺跡のあつた事を示してゐる。長町氏に依ると、もとは其處に徑二十五六尺の崩壞の著しい圓い石塚があつて、土器は明治の末年それの採石の際に可なり下の方から出たものであると云ふ。[2] 吾々が壺片を獲た西方の遺址もまた相似た狀態のもので、此の外兩者の中間になほ一個所積石があつたかと思はる所がある。併し現在附近で墳形を認め得るものは、小徑の東數十間の高處の傾斜地にある一基を殆んど唯一の例とする。これは流れに沿ふてやゝ長い積石の隆起を存し、大さ六七間、高さ五六尺の間にあり、段築の形迹などは見當らぬが、一見石塚たることの明なものである。

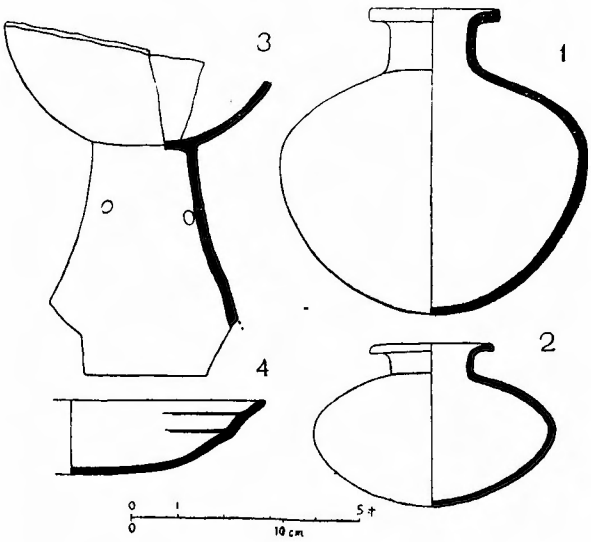
さて長町氏の土器類は、いまは既に見ることは出來ないが、[3] 氏の記述に從ふと、

(1) 甕　半潰　一個　　(2) 坩　完全　一個
(3) 坩　破片　二三個分　　(4) 高坏　脚部　二個
(5) 盤　破片　數片

等であつて、(1)(2)の壺は、其の短い筒狀の頸部が、口邊で外に開いて回捲した緣をなすところに共通點があり、(2)は胴の張りが著しくて蕪形に近い形をしたものである。而して二者は質の軟弱な黃土色のもので、表面に纖細な刷毛目が認められ、內面には拇指頭又は手拳を以て押したと思はれる壓痕があつたと云ふ（第二十五圖の1 2）。(4)と(5)との破片は前者に較べると堅緻な赤燒で、

其の高坏（同上の3）は太い脚に縦行の篦目を印すると共に、また燒成に先立つて外部から木枝の如き物を穿通した直徑二分の小孔が二個竝列して存し、坏部に淺い平行線文を表はして、彌生式土器の色調の多いものであることが記されてゐる。吾々の獲た壺片は器の下半のみであるから、形の復原は出來ないが、厚さ三分内外の大形品で、小さな平底から張りの大きい胴部となる特徴を持つたところは、上述(1)(2)に近い類であつたことを考へしめる。其の面は平滑で、赤燒のうちでは燒成の度が高くて堅い。是等に依つて上來記した石塚に附隨する土器の形がよりよく分明するわけで、孰れも猫塚出土の一例と相似た點がまた注意に上るのである。

第二十五圖 (Fig. 25)



鞍部出土土器形狀圖

【註】(1)長町彰氏「讃岐國石清尾山の群集墳、特に其積石塚に就て」（前出）參照。
(2)これは同上の論文に散見した處を要約したものである。
(3)此の土器類を見たく思ふて長町氏に照會した處、氏から、其の高松を去る際に福家惣衛氏に托して置いたが、後に福家氏の熊本への轉任の事等があつて、現在では所在不明との回答に接した。從つて、今日では氏の上記論文に據る外はない。

第五章　自餘の遺跡と出土の遺物

以上の三章で、石清尾山に營まれた石塚の主要なものゝ實狀を記し終つたのであるが、其の廣い地域にはなほ同樣の遺跡の點在があり、また他の部分に土墳の介在すること既に擧げた如くである。此の章卽ち摺鉢谷の南腹にある小石塚からはじめて其等の概要を錄し、なほ終りに盛土墳の一斑並に其の間に見た出土の遺物を附記するであらう。

第一節　自餘の石塚

〔圖版第二・第三三―第三六〕

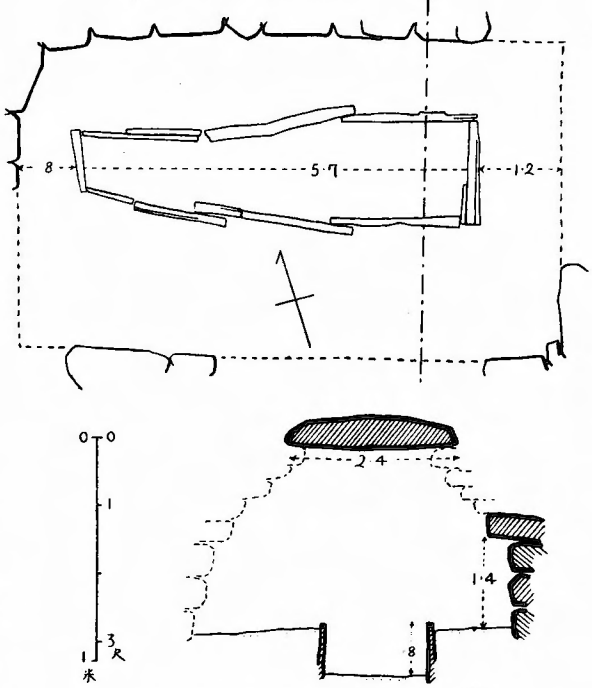
一　摺鉢谷南邊の小石塚

既に記述した石船塚から北大塚に至る大形石塚の存在する主峯の北側の傾斜面、卽ち摺鉢谷の一部をなす地帶にある此の遺跡は、其の地形の然らしめる處として規模の小さい圓形のものに限られてゐるが、もと山腹の緩傾斜面を利用して隨所に營まれた形迹があつて、今なほ積石を指摘し得るもの十三個を數へる。(1) 是等の石塚は圖版第三三の一の寫眞に見える樣な石塊から成る圓いもので、徑六七間、高さ三四尺の間にある。其の高さの徑に比して低いのは蓋し上邊の積石の崩壞した爲であらう。內部の構造に就いては、本來のまゝに保存せられてゐ

るものはもとより窺ひ得ないが、西南方の山懷にある一個は、十年程前に盜掘に遇つて内部を暴露し（圖版第三、三の二）、また山裾に近い一墳が大正十五年十二月初、山路の工事の際箱式棺に掘り當て、現在なほ形骸の一部を遺存し、それ等に依つて一端を推すことが出來る。

前者は採掘の爲に積石の外觀を損じてゐるが、其の北側に一直線の段築の形迹を遺存し、積石の中央と覺しき部分に一の石室があつて、うちに一種の箱式棺を藏したものである。現狀からすると、室は東西の長い矩形平面の竪穴式の系統に屬し、竪八尺、横四尺六寸あり、積石の材よりも大きな塊狀石、扁平石等を用ひて四壁を構成してゐる。殘存した北側の壁の示す處では、下方、より尺餘の處から片岩を持ち出した形迹があり、また遺存する一個の安山岩質の天井石の大さ（竪二尺四寸、横一尺八寸）からすると、室の上部の架構は四壁を漸次挺出した式であつたと解せられる（第二十六圖）。次に箱式棺は右の室の稍北に偏在した位置にあつて、これは數枚の片岩を組合せて造作し、長さ五尺七寸と云ふ遺骸を伸展葬するにふさはしい大さである。其の幅が東邊にて廣く、西端で縮小する處は石船塚の石棺の平面形と似てゐる。

第二十六圖　(Fig. 26)

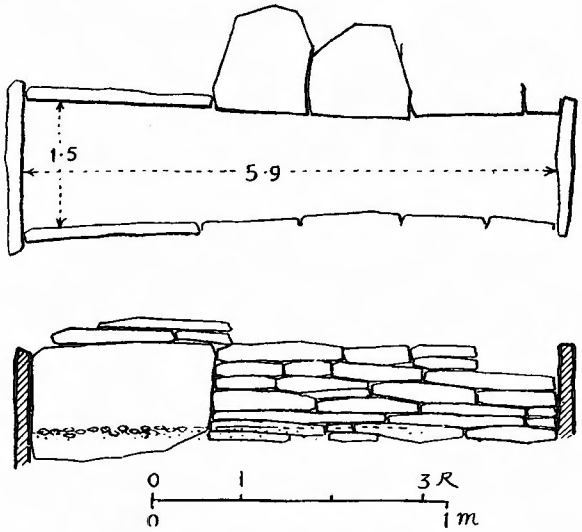


摺鉢谷一石塚石室實測圖

この棺には別に底石の設けなどなく、土中に側壁を並列した簡單な構造である。而して棺の底面が室の側壁下にある點からすると、本古墳では先づ棺を作り、然る後に室を造營した事が推知せられる。

後者卽ち山裾の一古墳は群中の最も低い地點に營まれた遺跡で、それは北大塚の西方の麓で、摺鉢谷の入口に近い東側にある。溪流屈曲して其の西半を繞り、自らなる圓形の墳丘をなす。現在は路が中央部を横斷して形を損じてゐるが、石堆の表面下一尺內外に箱式棺とも云ふべき構造部分の半ば遺存するものがある。其の發見後數日にして調査した岡田唯吉氏の報告[2]に據ると、右の構造は東西に主軸を置いた細長い箱形であつて、長さ五尺九寸、幅一端にて一尺五寸、他端にて一尺二寸、高さ一尺內外の棺に通有な大さを示し、其の兩端部は大きな平石を組合せてあつて、所謂箱式棺の樣であるが、兩側は扁平な石材の小口積とした別種の構造で、恰も竪穴式石室を見るの趣をなしてゐたとあり、當時撮影の寫眞がそれを明示する(圖版第三四)。なほ氏は室の底部には砂礫(鄕東川にある砂岩、頁岩の五六分大のもの)を敷いて、其の上に東枕に遺骸を伸展葬した事を記し、天井石は既に破壞されて殘存しなかつたが、

第二十七圖 (Fig. 27)



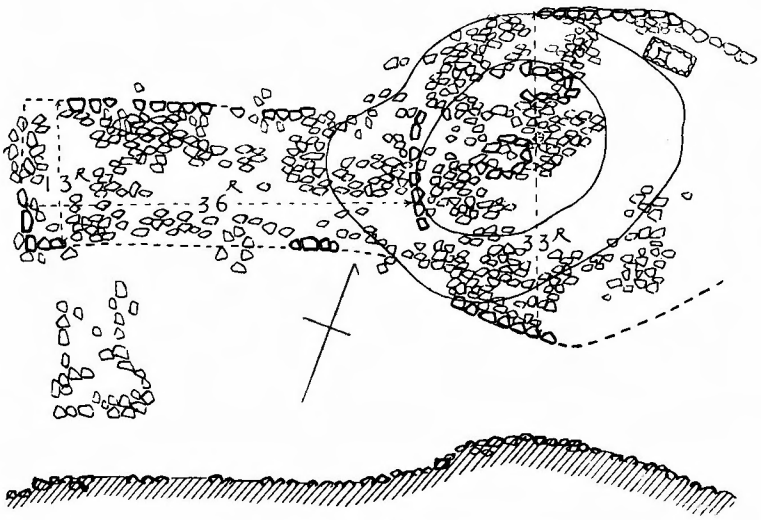
山裾石塚石室形狀圖

長さ二三尺幅一尺數寸の平石數個を以て覆ふたものと考へられること、また副葬品に就いて何等傳ふる所ないとしてゐる。[3] 以て本來の狀態を知るべきである。

二　石清尾山北部の石塚

此の地域の遺跡としては、瀬戸内を一眸に聚むる標高二三四米突の山巔から、東に延びた山の背にある三四を主なものとする。併し是等は孰れも規模大ならず、且つ著しい特徴のない類である。中でやゝ見る可き一は、積石が南東から北西へ長い楕圓狀で、其の大さ三十二三尺あり、現高四五尺を測る積石はもと段築であつたと覺しく、上部平坦で緣邊に於いて急傾斜を示してゐる。此の塚の北方十數歩にある一個は圓形の積石が割合によく殘り、其の徑二十三四尺、高さ六尺内外ある。もと周圍に石垣狀の段を築いて、内部に石塊を盛つた原形が察せられる。昭和六年四月吾々の調査に先立つ數日に盜掘に遇つたと云ひ、中央部に徑五尺の生々しい採掘穴が存してゐた。但し其の處には内部の構造は見られなかつた。

第二十八圖　(Fig. 28)



摺鉢谷西北方一石塚形狀略圖

以上の小石塚に比べると、北大塚と東西に相對して、馬蹄形に近い摺鉢谷を繞る山の背の東

端を占めた一個の塚は、其の形、並に規模に於いて注意すべき存在である。尤も此の塚とても積石の崩壞の度が可なり甚しく、爲に東南の峯の諸墳の樣な壯觀は認め難い。併し西南西向の前方後圓の形を遺存してゐて、前後の長さ約七十尺、後圓部の徑約三十三尺あり、幅十三尺內外の低い前方部は長く延びて、それの兩側に段築の痕を隨所に遺存し、また一部に赤燒土器片を存するところ、上來の諸墳と共通してゐる。たゞ此の塚では後圓部の堆石の間に土砂の介在があり、また殘存の高さ三尺に近い周緣の石積みは圓形でなく、多角形をなした形迹をとゞめる點等を異例として數ふ可きである（第二十八圖）。現在高さ六尺內外の後圓中央部に採掘穴があつて、附近に床敷きかと思はれる河石の散亂する點から推すと、內部の主體は既に破壞されてしまつたものであらう。

岡田唯吉氏は本墳前方部の南側に積石とも見ゆる隆起の存在を注意して、[4]それを前方と結びつけ、此の塚の外形に就て一の珍らしい形を想定してゐる。併しかく斷ずるには右の隆起は頗る不確かなものであり、何等かの理由で後に積み重ねられた樣に思はれて、かゝる重要な事實の認定に不充分である。

三　土居の宮後丘上の石塚[5]

第三章第一節に述べた姫塚のある峯から南東南に流下した尾の中腹に近く、一群の石塚がある。其の地は俗に土居の宮と稱する鷺田村鄕社鶴尾神社の背後の丘上に當つて、標高は百米突內外を示す。うち一個は積石が顯著で、遠くからもよく所在を認められるが、寺田敎授に從ふと、なほ其の南方に一個、北方に既に崩壞したそれと覺しい石堆が三個許りあると云ふ。右

の顯著な一は、安山岩質の小石塊、並に同質の薄い平板石片から成るもので、其の石材が著しく四散して、爲に積石の原形を損じてゐるが、もと徑三十二三尺の圓形をして、段築であつたことを推測せしめる點がある。現在此の中央部は採掘せられて、表面下約二尺に石室が天井部を破壞され乍ら、暴露してゐる。それは一見した處では東西に相並んだ二個とすべき外觀を呈して興味を惹く（圖版第三五の一）。併し仔細に調査すると、兩者の中間部は實は石塊の落ち込んだもので、兩側壁の狀態から其の本來一個の細長い室であつたことが確められる。此の室は東西の方向に主軸を置いてゐて、通じての長さ十五尺に近く、幅は西端が廣くて三尺五寸、東邊やゝ狹まつて約三尺を測る。四壁は竪穴式石室に通有な平板石を小口積としたものであり、よく原形を遺存した東半部の示すところ、底部から高さ三尺許りの間はほゞ垂直に積まれてあるが、それから上は漸次左右から持ち出し、更に隅には斜に石材を置いて、その部に丸味を加へると云ふやゝ特殊な築成が認められ、また空隙に小河石を詰めるなど造構に意を用ひたものである（圖版第三六の上）。而して現高四尺六寸、内外の室の底部には敷石は見當らないが、若干の土砂があり、それ等が紅色に染み、同じ色彩は壁面の一部にも及んで、埋葬の際に朱を用ひた名殘をとゞめてゐる。なほ内部には赤燒土器の小片を見受けるが、同じ破片は積石の間にもあつて、其の性質は姫塚、石船塚等に於けると同樣であつたらうと思はれる。[6]

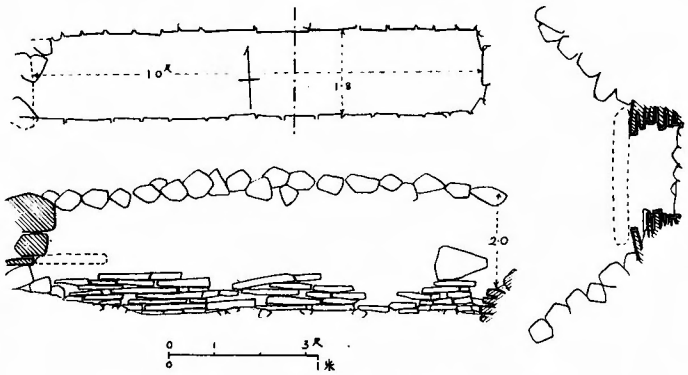
次に右の墳からやゝ下つた處にある一は、積石を採掘して殆んど舊形を失ふてゐるが、中央と覺しき部分は恰も石室とも見ゆる形に掘り凹められて、長さ一間許、幅二尺内外あり、それがまた東西に長く、内部造構の跡かとも考へしめるものがある。上手にある石堆のうちの一個

は徑四十尺内外もある可く、それの傍に一の巨石の露出が目立つてゐる。

四　切通し附近の石塚

石清尾山の石塚として最後に擧ぐ可きものを、前者の西方約十町にある此の遺跡とする。所在地は石清尾山の一部(御殿山)と淨願寺山とを結ぶ鞍部に近い「切通し」の南方の山の尾であつて、弦打村御殿から鷺田村字北山浦に通ずる小徑の西側に當り、其の處に建つた小石祠の上手にある二個を顯著なものとする。これまた共に山の脊に沿ふて石塊を積み重ねた圓塚であつて、兩者相去る約三十歩、其の上手の一は積石の周圍約二十間で、中央のやゝ凹んだ所に若松簇生して既に形を損してゐる。他の一は高さ四五尺、周圍二十五六間許りの圓形をして、一部は山の尾の流れに從ひ、東に延びてゐるが、良好な積石の保存狀態を示して、摺鉢谷南腹の遺跡に相似た所がある。

第二十九圖　(Fig. 29)



「切通し」上の石塚石室形狀圖

此の塚昭和六年四月寺田教授の實査に先立つて盜掘に遇ひ、中央に大きな穴が穿たれ、其の部分に石室を暴露し、半ばを破壞するに至つた。室は山の尾の流れに沿ふた東西に軸を置く細長い竪穴式であつて、長さ約十尺、幅約一尺八寸あり、積石の上面から二尺四五寸の下方に其の側壁を遺存し、約一尺二三寸で底部と覺しき部分となる。壁の架構は猫塚の室

其他で見たと同じ扁平な小板石を横積みに煉瓦狀としたもので、其の若干挺出した上部に板石を渡して天井を覆ふた樣である。併しいまは天井石は一も存しない（圖版第三、五の二）。現狀から推すと室のもとの高さは二尺を超へない低いものであつたと解せられて、此の點やゝ前者と違つてゐる。

採掘の際室內に副葬品が遺存した事は想像せられるが、其の如何なるものであつたかは今日全く知ることが出來ない。塚の採掘者が高松工藝學校の某氏であると推測せられる點から、氏の沒後上原氏の有に歸した後述の一鏡が或は其の副葬品の一部ではないかとの說もあるが、これは固より單なる想像である。

【註】(1)此の總數は最近寺田敎授の精査せられた所に基く。昭和六年四月吾々が岡田氏の案內で實見したものは其のうちの五六個である。

(2)此の報告は岡田氏が縣の史蹟名勝天然記念物調査會に提出せられたものである。未發表の文を寫眞並に圖と共に利用することの出來たのは寺田敎授の厚意に據る。

(3)此の點に就いては長町氏の「讃岐考古集錄」（前出）に簡單な記載がある。

(4)岡田唯吉氏報告（前出）第九墳參照。それには後部は方圓を確定し難しと云ひ乍ら、奇異な墳形を圖示してゐる。

(5)本石塚は前後三度に亘る吾々の調査から漏れたものであつた。ここにその狀態を錄することの出來たのは全く寺田敎授の調査の賜である。特に註記して負ふ所を明にする。

(6)寺田氏は石室が西方の幅廣く東端で若干狹まつてゐる點から、其の被葬者の西枕に伸展葬されたであらうことを推し、また副葬品に就て、上原準一君が其の藏鏡の出土地を本墳にあらずやとする點を擧げ、それに關聯して鷺田村になほ鏡片を秘藏する人士があるとの注意すべき聞書を報ぜられてゐる。ここに註記して置く。

第二節　石淸尾山の盛土墳

〔圖版第二・第三七・第三八〕

廣義の石清尾山に於ける古墳としては、本研究の對象としてゐる石塚の外になほ盛土墳の存在を擧げ得ること既に序說に一瞥した如くである。是等のうちで前節末に記した石塚の南東方の傾斜地の遺跡と、[2]其の南方に聳ゆる淨願寺山にある俗に十三塚と呼ぶ六十餘の群集墳とを現存の最たるものとする。[1] なほ猫塚の北東に當る摺鉢谷上邊の緩傾斜面並に山の北邊の中腹木里神社の[3]附近にもまた點々として封土を遺存し、其の摺鉢谷では開墾以前は墳丘三十餘を數へたと云ふ。更に山彙の裾[9]の地帶には、高松市からの登り口に石室の暴露したものゝ存する[4]のをはじめ、西側の御殿領内の諸遺跡、[5]淨願寺山の西南の尾の上の「がめ塚」等があつて、是等を通算すると石塚よりも多數に上るであらう。併し其の一々の詳述はこゝでは目的とする所でないから、註記にとゞめて省略する。たゞ是等の遺跡を通觀して著しく目立つ點は既述の所在地が石塚のそれとは違つてゐて、孰れも土砂の多い地域に限られ、岩盤の露出部に存在しない事であり、他方遺跡自體はがめ塚の前後の長徑十三四間餘ある南面の前方後圓墳である例を除いて、すべてが規模の小さい圓墳であると云ふ共通點を持つてゐて、其の點にも石塚とやゝ明確な相違を示すことである。

いま石塚の所在に最も近接した摺鉢谷の傾斜面にある一例を取ると、此の部分に於ける土墳の所在地は傾斜の緩かな南側から西側に亘る部分であつて、現在殆んど全部果樹園となつてゐる。石塊は通じて多いが、耕地に適應する土壤の發達した地帶であつて、上來の石塚の所在地が岩盤を露出した部分か或は石塊の累々たるとは頗る趣を異にする。此の地區で見られる遺跡は英森吉氏經營の果樹園内にある二個と、大師堂の南西方畑中に遺存の三個を主と

するが、[10]開墾以前には上に擧げた多數の封土があつて、中に今も地方人士の記憶に遺つてゐる峯山塚[6]と呼ぶもの等を含む。さり乍ら是等が規模の大きなものでなかつた事は、開墾に依つて容易に其の形態を失ふた點から推測出來る。

現存の五例は孰れも内部にある横穴式石室の外容を露出してゐて、本來の封土がそれを被覆するに過ぎなかつた事を示し、近畿をはじめ殆んど全國に分布する同式の群集古墳と異なる處がない。其の石室は大形の石材を用ひて巧みな架構を表はし、玄室の前に羨道があり、横穴式墓穴の標式的なものに屬すること圖版第三七・三八の實測圖及寫眞に[7]見られる如くである。是等と上記石塚との間の構造上の差異は顯著であつて、其の點は次節に述べる開墾の際内部から出た遺物の上にも認められる。なほ出土品からうちに陶棺を藏したものゝあつたことが、[8]また注意せられるのである。こゝで右の二者の關係が自ら問題となつて來るが、此の場合後者が本邦各地に普通に見る所の墓制で、而も上代墳墓の後期の制として、それが宏壯な墳丘を有し、内容の簡單な所謂古式(前期)古墳に對立したものであることが顧みられて、それから新たに石塚と古式古墳との關係の考察となり、兩者の一致から本節の初に記した所在地相の相異が解釋の上に重要な意味を持つてゐることが意識せられて來る。既に遺跡の記述を終つた吾々は、次節出土の遺物に關する若干の記載を試みて後、改めて石塚の性質論の一部として此の點を論ずるであらう。

【註】(1)此の淨願寺山の古墳群に關する點はすべて寺田貞次教授の調査に基く。同氏に據るに墳は孰れも周圍二三十間の圓墳であつて、内部は破壞せられて石材を露出してゐるが、明確な構造を示すものは殆んどない。たゞ淨願寺山上の群集墳中最も高地にある高さ三間、周圍二十五六間の丸塚には、長さ三間許、幅五尺内外の石室がほゞ原形を推し得る

程度に遺つてゐると云ふ。

(2)急峻な山の裾に發達した此の緩傾斜地には數個の圓墳が認められて、其の一には圖版第三八に載せたと相似た横穴式石室があり、南面してゐる。

(3)現在の木里神社の社殿の下に一の横穴式石室がある。なほ其の東方の北面した中腹臺地狀の畑地にも點々古墳の殘骸があり、銅鉾の出土地また其の部分であるとは云れてゐる。これから北の傾斜面の松林中にも二三石室の破壞され乍ら遺存したものを見受ける。

(4)圖版第三八の一は其の外觀である。此の横穴式石室は規模は小さい。

(5)御殿の地域では神社の東北の果樹園中にあるものを現在顯著な例とする。其の一には、横穴式石室が開口完存してゐる。別に東方溜池の附近にあつたものは大部分破壞されたが、いま其の一の石室の上に家が建つてゐる。

(6)此の峯山塚に就いては岡田唯吉氏の報文(前出)に其の概要を錄してある。

(7)圖版第三七に收めた二個の石室のうち、上は本文に記した英氏の果樹園内にある南方の一であつて、圖版第三八の二に外觀の寫眞を載せたものに等しい。他は大師堂の南西方の畑中にある三個中の南隅の石室(前者の東南の緩傾斜地に當る)で、これはいま内壁の石間をセメントで塗り固め、一部に臺を設けて稻荷を祀り、玄室の後壁を崩して上邊にあるいま一個の石室と段階を作つて連續せしめてゐる。兩者とも横穴式石室としては規模の大きい類でなく、また單純な平面形であるが、架構は堅牢で、その上に築造の技術の進歩が窺はれる。

(8)長町彰氏「讃岐石清尾山發見の陶棺」(『考古學雜誌』第三卷第一號)

(9)最近の寺田教授の調査に基くに、此の山裾地帶の土墳の分布は、石清尾山の中核部から淨願寺山の麓にも濃厚なものがある。卽ち姫塚所在の東南の傾斜面に當る鷲田村土居の池の西側には廿個を超へる圓墳が群集して、うちに横穴式石室の開口したものゝあることをはじめ、既述土居の宮後丘上の石塚から西に當る開墾された斜面に遺存した三基の古墳、(横穴式石室があつて土器等發見)、北山浦の地内淨願寺山東麓に近い正八幡社附近に遺存の小圓墳數基、南山浦に接した片山池の東南側にある猫塚とそれに附隨した三四の小墳等がそれである。是等からすると北面を除いて殆んど山裾を繞つてゐる事が知られる。

(10)同じく寺田教授の實査に依ると、此の外大師堂の西北に當る山林中になほ十基許りの古墳があつて、既に發掘石室を暴露したものが多い。形式は、竪穴式の樣に考へられると云ふ。

第三節　自餘の發見遺物　〔圖版第三九・第四〇〕

石清尾山古墳から出た遺物は第二章に記した猫塚の發見品を以て最も顯著なものとする

が、其の他にあつてもなほ擧ぐ可き類がないではない。古く故黑木安雄氏の蒐集した古鏡[1]其他の遺品をはじめ、明治の末年から大正七八年に亘る長町彰君の採集した遺物の如きが其の例である。後者の品目は鏡、勾玉、管玉、直刀、斧頭、扁口壺、坩、提瓶等の陶製容器、素燒高杯等に亘り、これに自餘の蒐集品を加へると、數量に於いて猫塚の遺物を凌駕するものがある。さり乍ら是等は上來述べ來つた石塚の副葬品ではなくて、前節に一端を錄した摺鉢谷南面の緩傾斜地に營まれた盛土墳から出たものである。其の性質は勾玉、土器等をはじめ、孰れも我が古墳墓制の後期、卽ち横穴式石室を主體とした墳墓の遺物たる特徵を具へて、本文で專ら取扱ふ所の石塚の範圍の外に屬してゐる。從つてこゝでは其等の一々に就いての詳しい記述を試みるの要はない。今は一例として長町氏が其の蒐集品のうちから本學考古學教室に寄贈した仿製の內行花紋小鏡と管玉とを圖示（圖版第四〇の二・三）して前節の造構と對照の便[2]に供へるにとゞめる。

右の盛土墳の遺物を除くと石淸尾山古墳の出土品は實に寥々たるもので、上來各遺跡の條に觸れたと同じ素燒土器片乃至埴輪圓筒片の採集せられたものがある位に過ぎない。されば此の間にあつて上原準一氏が大正九年に猫塚附近の一石塚から出たと云ふ一個の銅鏃を藏し、また近く旣に姫塚の節で指摘した古鏡一面を入手したことは、研究の上に新しい資料を提供する重要な事實と言ふべきである。

一個の銅鏃は圖版第四〇の一に載せたもので、それは長さ二寸二分の完好な柳葉形に屬し、偏菱形の斷面を有する鏃身に多角形の細い莖を造り添へた處は旣述猫塚出土の銅鏃と全く同一であり、質また白銅と覺しく、表面は黑味を帶びて滑澤がある。此の遺品で注意を惹く一

つの點は身の尖端に近い部分が兩面とも鑢の樣な器を以て研いた形迹の顯著なことである。これが出土後に加へたものでないとすると、當然それは鑄造後使用の際に先を鋭くした名殘と見るべきで、また興味ある一の事象とする。

上原君の記錄に依ると、氏が此の銅鏃を手に入れたのは大正九年四月廿五日のことで、猫塚附近の鷺田村領からの出土と言ひ、前年(年月不詳)同地開墾中扁平なる岩(安山岩)を以て作つた粗造な竪穴式石室内から大刀と共に發見したものとあつて、由來を知ることが出來る。但し出土の塚の實際は今日明でない。(3)

次に一面の古鏡は徑六寸の獸帶方格規矩四神鏡であつて、破碎した上いま一部分缺けてゐるが、種々の注目すべき點を持つてゐる。其の質は佳良な白銅と見えて、面は白光と漆黑との色澤相交りて美しく、鏡背は一部分に薄い鏽はあるが、相似た狀態で、通じて高い光澤を有し、それがまた内區の厚さ一分三厘と云ふ珍らしい厚手の造りである點に一の特徴を示す。背文は現在磨滅甚だしくて明瞭を缺く所あるが、鈕を繞つて十二支肖の文字を容れた方格があり、内區には同鏡を特色附ける所謂T·L·V字形と四葉座乳との間に線表出の四靈其他の八圖形を配し銘帶其の外方に繞り、一段高い外區は禽獸を巧みに草文の間に配布した優麗な華文を以て飾つたものであることが認められる(圖版第三九)。其の銘帶にある銘文は一部分の缺失に加へるに、磨滅の爲にいま究め難い處もあるが、類例を以て推すと全文二十一字で、

漢有善銅出丹陽取之爲竟□□如明左龍右虎備三

であつたと見える。體は漢隷であり、文は完くないが、示すところ漢代丹陽所出の銅を以て鑄

造した事を錄し、それは圖文の漢盛時の形式を具象してゐることゝ合致する。相似た遺品は支那からも發見されてゐるから、(4)其の舶載品であることが考へられる。たゞ此の遺品に於いて著しい特異な點は、既記の圖文の甚だ模糊としてゐることであつて、それから鏡の所謂二番型ではないかとの考を導き易く、引いてまた上代の我が鏡作部の複製品とするの可能性がある樣に見える。

さりながら仔細に觀て行くと、背文の表現は確かにもとから鋭利ではなかつた樣であるが、併し模糊としてゐるのは特に內區であつて、それと一段高い外區との間にある櫛齒文帶の如きは割合に明瞭な線を示し、本來の鑄上りの程度を想察せしめるものがある。して見ると右の現象は半ば第二次的に生じたと見る可く、鏡體が通じて著しく丸味を持ち、また鈕孔の上邊並に內區の四葉座乳が磨研せられて、其の部分の特に高い光澤を放つことは圖文の現在の如く不明瞭になつた理由として、長年月に亘る使用に基く手磨れであることを考へしめる。此の推測は更に其の中央の破碎線に添ふて兩側に見られる四對の穿孔に依つて確かさを加へ、また本鏡の學術上の興味を深くする。孔は鋭利な利器を以て穿開した徑一分內外の小さいもので、鈕を挾んで其の左右にほゞ均勢に二對宛ある——尤も一方の方は破片の一が缺失してゐるので現在見られるのは二個だけではあるが——孰れも孔壁に既に古色を着けて、それが同部の破碎面の漆黑色を呈し、他の部分と全く違つてゐることゝ相俟つて、古い加工と見るに疑問はない。然らば是等の穿孔は當初二つに破碎した鏡を修補の爲にしたものと見る可きであつて、其の意味たるや、河內南河內郡國府の石器時代の遺跡發見の人骨に伴出した玦狀

耳飾に見受ける修補と同じであつたと解して誤りなく、それから引いて本器の當代にあつて[5]貴重であつた點と其のながい間使用せられたことが當然認められて、面の磨滅の現象と連關する。かく論じて來ると、此の鏡の模糊たることが、遺品の支那で作られた後、遙か東方なる日本に齎されて、轉々幾回かを經、遂に其の奥城に副葬せられたながき來歴を印した、それ自體の不文の記錄として、特殊の感興を覺えしめるものがある。香取秀眞氏は嘗て大和吐田郷出土の多鈕細文鏡の背文が漫漶してゐるのを手磨れの爲であるとして、かくなるには鑄造後三四百年も經過したであらうと言はれた[6]ことが此の場合思ひ併される。

第三十圖 (Fig. 30)

丹後桑飼村蛭子山古墳發見內行花紋鏡

本鏡の所見から從來日本出土の古鏡を檢すると、古い形式に同樣磨滅の多い遺品を見受ける。丹後國與謝郡桑飼村蛭子山の石棺[7]內から出た黑漆色の長宜子孫內行花紋鏡（第三十圖）但馬國出石郡神美村大字森尾出土の唐草文方格四神鏡[8]の如きは其の著しい例であり、上記猫塚發見の長宜子孫內行花紋鏡の如きも、また同じ趣を有してゐる。是等は孰れも漢代に遡る形式である。從來は此の類を以て仿製とするに傾いてゐたが、今にして思へば銅質の佳良な點に一般の仿製品と明な相違があつて、舶

載品の手磨れしたものと解す可きであらう。而して右のうち但馬森尾の遺品が同じ墳丘から鑄上りのよい西晉の泰始元年鏡と徐州式神獸鏡の出てゐる點が香取氏の推測と相俟つて、ながい傳世を傍證する樣に見えて興味を加へる。當代に於ける鏡の傳世は、遺品自體が支那からの舶載品である以上、當然豫想せられてゐることであるが、從來吾々が古墳出土の支那古鏡を取つて、それを包藏した遺跡の年代の推究、並に當代の文化狀態を論じた際、やゝ其の點に省慮を缺いた感がないではない。されば本鏡の出現は右の見地からも注意するの要がある。

終りに此の鏡の所傳は、既に姫塚の條に記した樣に、もと縣立工藝學校職員某の秘藏してゐたものであつて、土器、刀劍と共に石塚の一から出たと傳へ、信ずべき理由を有してゐる。それが右の某氏の沒後昨年十一月初、轉じて現所藏者の有に歸したものである。[9] 此の所傳は姫塚に就いて語られてゐる事と合致する點が多くまた鏡の大形である點で、同墳の副葬品と解してよい樣に見える。たゞ現在ではその明證を得難いから疑を存して、こゝに載せたわけである。[10]

【註】(1)其の著名なものとして變形四獸鏡一面が擧げられてゐる。同氏の沒後轉々していまそれは京都守屋孝藏氏の有に歸したとの事である。

(2)これは長町氏が其の「讃岐石清尾山發見の陶棺」(前出)の末尾に擧げてゐる遺物中の一部であつて、明治四十年前後に宮脇町の寺井某が開墾の際の發見に係ると云ふ。圖示の鏡は徑三寸一分の薄手で、破碎してゐるが、ほゞ形を存し、鈕を繞る内行六弧文をはじめ、それから緣に至る間の珠文、櫛齒文、鋸齒文の三帶がすべて明確な鑄上りを示して、仿製としては佳作の方である。其の管玉は太いが、色澤は灰青色をしてゐて、通じて鐵分の附着の著しい點に鐵器との伴出を示す。

(3)長町彰氏は此の銅鏃が猫塚出土の銅鏃と全然式を同じくし、且つ出土地が猫塚附近と云ふ點から、所傳に疑を挿んで、或は猫塚出土品の散佚した一ではないかとしてゐる。こゝに註記して置く。

(4)『博古圖錄』卷廿八所載漢清明鑑、羅氏『古鏡圖錄』卷中、朱雀玄武鏡等參照。後者は外區の圖樣を同じくするものであ

る。

(5)『大阪毎日新聞』大正六年十月十五日以降所載岩井武俊氏の文並に大野雲外氏「河内國府發見耳飾石環に就いて」(『民族と歴史』第二卷第二號所載)其他參照。

(6)香取秀眞氏「遺物より見たる上代の鑄造術」(『考古學雜誌』第十五卷第九號所載)

(7)梅原「桑飼村姪子山、作り山兩古墳の調査」(前出)

(8)梅原「但馬國神美村の古墳と發見の遺物」(『藝文』第十四年第十號所載)

(9)上原君が其の鏡を得たことを報ぜられた昭和七年十一月十四日附の書翰に據る。それに「數日前偶然の機會から、積石塚中の一墳から漢式鏡と土器刀劍を發掘し所藏せる者あるを知り、種々調査の結果縣立工藝學校舊職員K・U氏遺族の手にあるを確め、古鏡を入手した」とある。

(10)此の鏡の推定出土地として別に第一節(三)の土居の宮後丘上の一古墳が考へられてゐると其の註(6)に記した如くである。

第六章　後　論

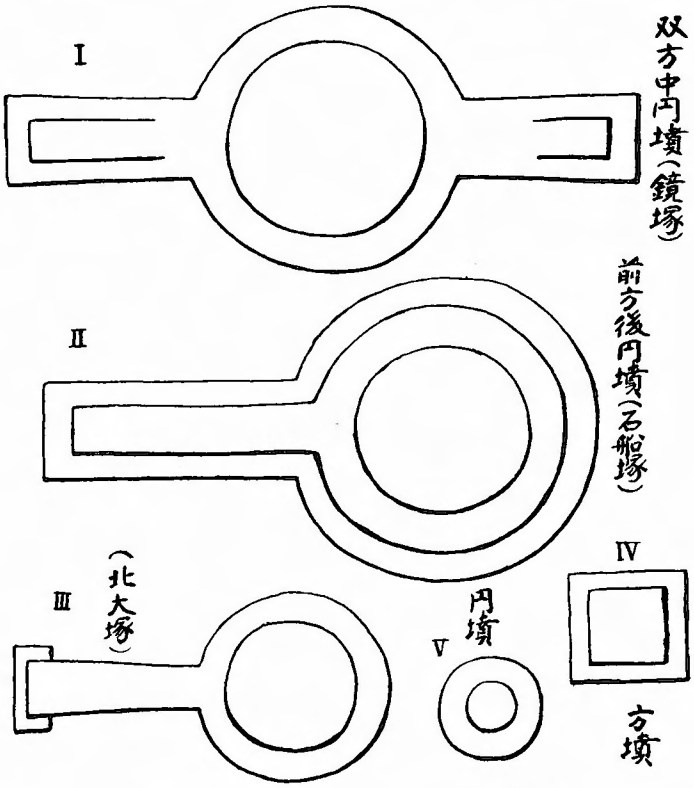
第一節　石清尾山石塚の特性

石清尾山に存在する石塚群の事實に關する記載から、其等の性質如何に論述を進めるに當つて、先づ考察に上る處のものは遺跡の示す外形並に內容の通有性である。これは他面からは本古墳群を一般の墳墓から特色づけるものとして當然省みらるべきものである。いま前後四章に亘つて述べた四十に近い石塚を通じて其の點を考へると、名稱が如實に物語る樣に、石片を積み重ねて塚をなしたことが共通した一の著しい特色であつて、用材がまた此の山塊を形成する所謂古銅安山岩の小石片を以てしてゐて、それには一の例外もない。これと共に比較的原形の遺存した類にあつては、石積みが段築の方法に依つたことも注意せられる。姫塚、北大塚、稻荷山姫塚等は現在右の形迹の顯著な例であるが、同じ形迹は自餘の主要な遺跡並に小形な塚にも見受けられるから、それがまた本石塚群の構造上の一つの特徵と見られるのである。此の點は早く笠井新也氏が認めた處で、氏は特に築石塚なる名稱を附して、是等を石塚中の特別な類としてゐるのは正しい見解と思ふ。[1]

築成上の通有性に比べると、個々の示す外容は單に大さが區々であるのみでなく、種々の形のものが並び存して、その間に一の定まつた形式はない。卽ち大部分は單純な圓形であるが、

それ等は概ね規模が小さい上に、別に北大塚に近接して一個の方形段築の遺跡を存し、そこに同じく單純ではあるが違つた形が見受けられ、更に主要な遺跡にあつては、前方後圓形と所謂雙方中圓形なる二つの特色ある形が極めて顯著である（第三十一圖）。

第三十一圖　石清尾山石塚外形集成圖 (Fig. 31)



(1) Kagamitsuka (2) Iwafunetsuka (3) Kita-Ōtsuka

して見れば其の形は多樣であつて、恰も從來知られた我が上代古墳の諸形式に更に雙方中圓形なる特異な例を加へることになり、この點が外容上の特性となるのである。外形に連關して、なほ其の一の石船塚に石塚にはふさはしくない埴輪圓筒片の多量に遺存することゝ、同じ破片が雙方中圓形の猫塚並に一二の小墳にも見受けることを擧げる要がある。

次に內部の構造は、なほそれを暴露してゐないものがあると共に、破壞せられた遺跡に於いても狀態の明なものは僅に一部分に限られでゐるが、其等の中に石船塚の樣な石棺を主體とした遺跡と、猫塚や土居の宮後丘

上の古墳の如く、内部に竪穴式石室を藏したものとが並び存し、後者には更に一墳多室の猫塚と、然らざる類とがあつて、これ亦一見外容の區々たると相似たものがある。併し右の石船塚には陪葬の爲に營まれたものではあるが別に竪穴式石室を存してゐるから、現在では内部の構造としては竪穴式石室が――それは固より細部に於いて互に差異はあるが――一般的なもので、それを特色づける形式と見ることが出來る。[2] 此の主體をなす石室の數は猫塚の場合、單一でないことが著しく注意を呼んで、古く鳥居博士の紹介せられた阿波國名東郡加茂名村地藏山石塚等が、[3] 同じ構造を有するところから、此の一墳多室なる點にまた本石塚群の一つの特徵を求めんとするの傾向があり、既述の鏡塚等に見る單なる採掘穴をば其の例證とするのみならず、引いては石船塚の石棺を以て本來のものではなく、後の重葬と解し、石塚の内容の統一[4]を求めた論著をも見受ける。猫塚にあつては確かに其の中圓部に多數の石室を含んでゐて、それが單に地藏山例のみならず、極東に於ける石塚として有名な旅順老鐵山の遺跡の示すところにも同じく、[5] また歐洲にも相似た構造が石塚の場合に認め[6]られてゐる點から、廣く石塚を通じての現象として、興味の深いものがある。たゞし現在では猫塚を除いて、一部に陪葬の石室のある石船塚以外他に明確な同じ遺跡がなく、寧ろ一墳一室のものばかりであるから、よしそれ等は概ね規模の大きくないものに限られてゐるとは云ひながら、猫塚の例を以て直ちに他を推すことは困難の樣に思ふ。

内部の副葬品に就いては其の明瞭なのは猫塚のものだけであるから、うちに含まれた遺品に重要な遺物を含むことではあるが、嚴密な意味では此の一例を以てすべてを律することは

出來ない。併し中で考古學上の資料として重要な土器は、此の猫塚出土品と同式のものが姫塚、石船塚をはじめ多くの遺跡からも破片を出して、それに通有性を見ることは一の注意すべき點である。長町彰君が早く右の事實を認めて、これを竪穴式石室と併せて石塚の示現する內容上の特色としたのは誤らない見解[7]と信ずる。なほ發見の遺跡に就いて明瞭を缺く憾はあるが、本石塚群の出土品たるに疑問のない上原君の所藏鏡を以て、上記猫塚發見の遺物に比べると、其の間に同似點があつて、こゝにまた頗る不充分ではあるが、副葬品に對する通じての推測が許される樣に見える。而して其等の示すところは小銅劍身を除くすべての類が、上代に於ける宏壯な封土を有する所謂古式古墳の內容と合致してゐることが認められ、それが本石塚の外形上の事實とも照應して興味を加へる。長町君は多數の猫塚の遺物を二分して、そのうちから石塚本來の副葬品を求めんとしてゐるが、未だ俄かに從ひ難いことは既記の如くである。

要約するに、本古墳群の特徵は築成に石塊を以てした點と、其の段築とに著しいものがあつて、前者はまさに廣く洋の東西に分布する石塚の一例をなすものである。さり乍ら他面に於いて其の外形、內容の點では一部分普通の石塚に合致を示す所もあるが、大體に於いてそれ等とは違つた特異なもので、寧ろ本邦各地にある盛土墳の古式の類に相近いことが考へられて、多くの石塚とは趣を異にした獨自の特性が認められるわけである。

【註】(1)笠井新也氏「石塚の研究」(前出)第四項、種類の條參照。

(2)此の點は笠井氏も夙に注意して、石室の形式は普通は縱式であると云ひ(前出論文)、長町氏もまた其の報告で同じ見解を述べてゐる。

(3)『東京人類學會雜誌』第六十三號所載鳥居博士の論文「德島近傍の石棺」及び R. Torii; Etudes archéologiques et

Ethnologiques Populations Préhistoriques de la Mandchourie Méridionale.（東京帝國大學理科大學紀要、第三十六册第八編）

(4)長町氏既出報告、第六「石塚所見の刳拔石棺に關する疑義」參照。

(5)(註)(3)の鳥居博士の著書並に同博士『南滿洲調査報告』第四章、老鐵山上の石塚參照。

(6)此の種の實例はブリタニーのカルナック(Carnac)附近に多し。Zacharie le Rouzic et M. et Mme Saint-Just Péquart; Carnac, Fouilles faites dans le Région (1923)所述の遺跡の如きはその一例である。

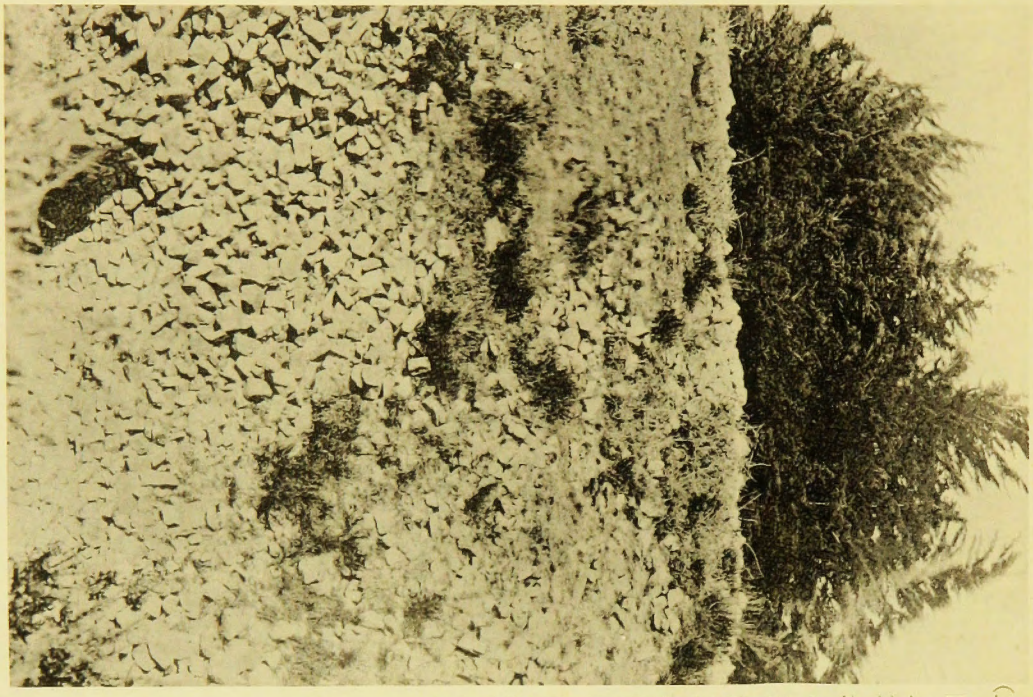
(7)長町君前出報告參照。

第二節　石塚營造の年代

斯樣な特色を持つ遺跡が何時營まれたものであるかと云ふことは、それが如何なる理由で發生したかの考察と共に本石塚の性質論の中核をなすことは言ふまでもない。是等に就いては從來本遺跡を取扱ふた人士に依つて既に論ぜられて、傾聽すべき所說を含んでゐる。最も早く表はれた笠井氏の論著は石塚が此の遺跡の外になほ讃岐の一部、阿波の各地、攝津、陸前、相模等に存する處から、それ等を一つの系統と見て、相互の形式の上から年代等を考へたものであるが[1]、爾後の諸氏の論說にあつては、塚が石で築かれた點に重きを置くと共に、兼て猫塚の示す遺品中の小銅劍等に據所を求めて解釋するの傾向を取り、遺跡が殆んど盛土墳に限られた本邦に於ける寧ろ特殊な存在である點から、類例を他に求め、より廣い見地に立つて其の性質を論證せんとしたものである。一體石築の塚はブリタニー[2](第二十三圖の一・二)愛蘭[3](同上の三)蘇格蘭、西班牙、瑞典其他歐洲の各地に分布して、石金併用期から靑銅器時代に屬することは彼地學者の調査考究に依つて夙に明にせられて居り、また極東にあつても、既に擧げた旅順に於ける老鐵山

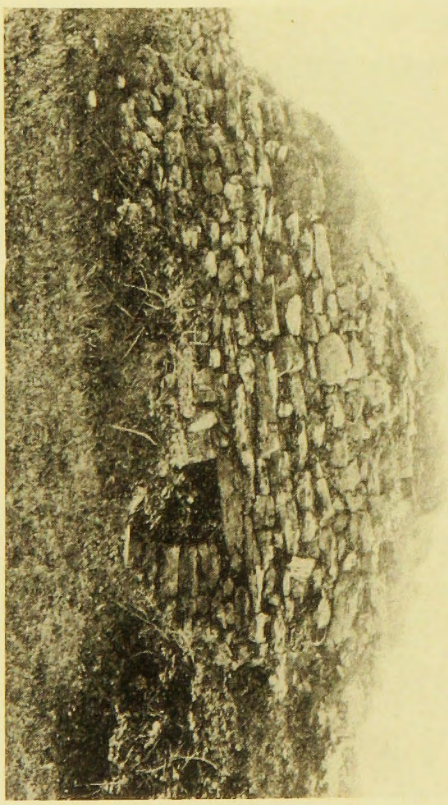
第三十二圖　歐洲に於ける石塚例

(Fig. 32)



(二) 同上石塚の側面（下方に見るは石室の入口）

(一) ブルニエル、ロクマリアケの石塚

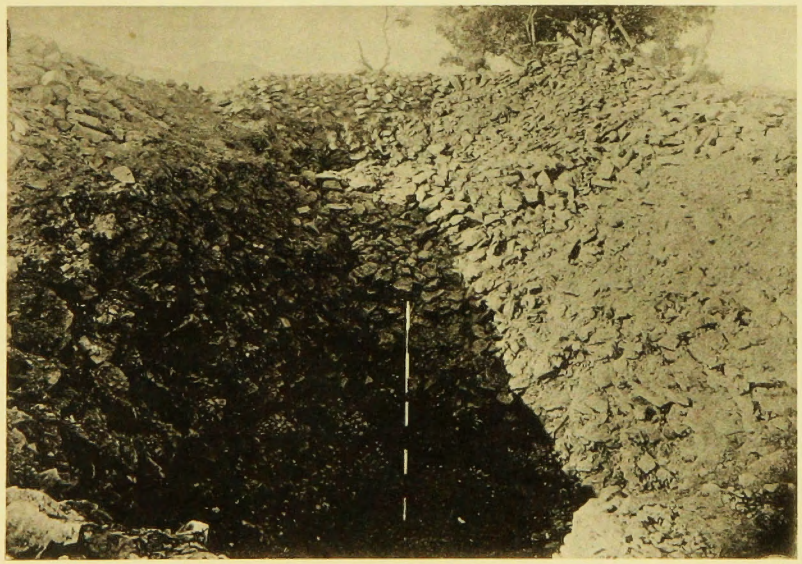


(三) 愛爾蘭の一石塚

(一) 滿洲旅順老鐵山西嶺石塚全景

(二) 同上石塚發掘の光景

(三) アルタイ地方パズルクの石塚



(四) 朝鮮京畿道廣州石村里の石塚

第三十三圖　東亞の石塚例

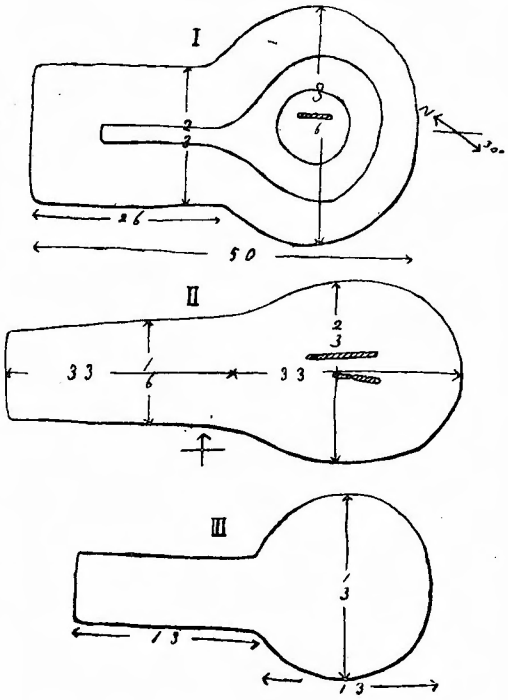
(Fig. 33)

西嶺の石塚（第三十三圖の一・二）調査以來、朝鮮から内地の一部に亘る同樣の遺跡の存在が追々と報告せられることになつた。對馬白岳の遺跡[4]、朝鮮平安北道渭原遺跡[5]等、其の著例の示すところが孰れもまた石金併用期に屬する特色を存し、なほ南鮮に廣く分布する支石塚の笠石下に相似た積石の造構を見る點（第三十九圖の三）などから[6]内地に稀な此の遺跡も其の一類として、後者と結びつけて年代なり出現の理由を解せんとする如上の考は肯定せられる次第である。それは他方遺跡中の猫塚の内部構造が一墳多室と云ふ點で旅順の石塚に同じくまた小銅劍を藏したことに依つて一層兩者の相關關係を强めるものがある。かくて讃岐の石塚を以て古墳中の最も古いものとなす學説や、それを以て通有な盛土墳とは系統を異にした遺跡とする事の可能が説かれてゐる。[7]さり乍ら吾々の調査から確められた遺跡の特性は、一般石塚との同似の外に、全く別な外形上の特徴があり、また遺物にも種々の類を含んで、是等の事實の示す處は右のみの類推論を以て俄かに律し去り難いものがあつて、別個の考査の必要を感ぜしめる。即ち年代觀から改めて其の一々を吟味することにしよう。

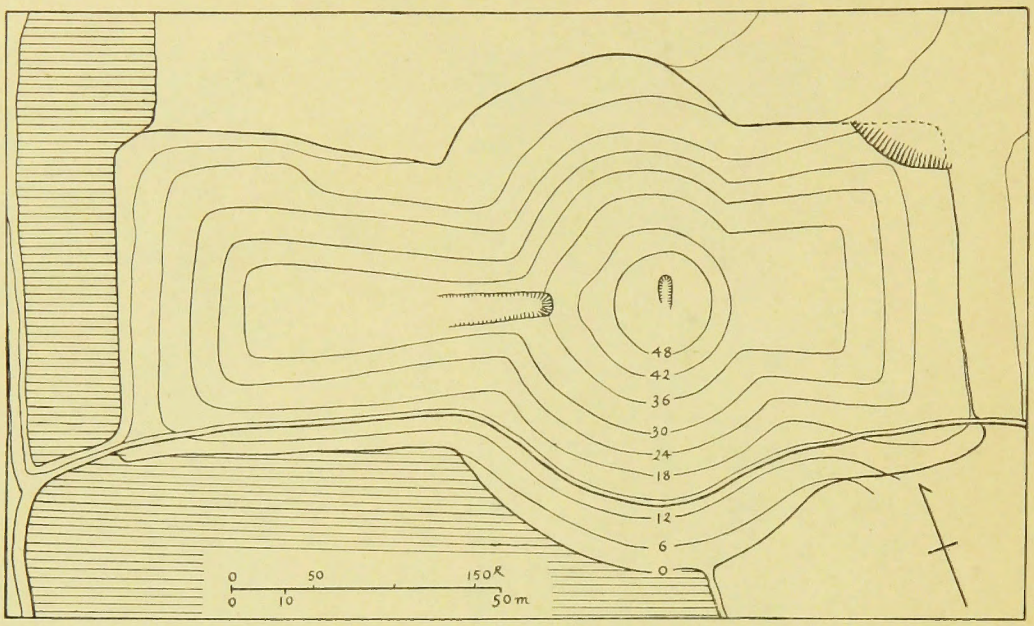
いま右の見地からする石清尾山石塚の性質の考査として、遺跡の示す外形が當然問題に上り、それが引いて内容と連絡を持つ。前節に指摘した樣に本遺蹟群の多數は石塚に通有な單純な外形をしたものであるが、別に前方後圓墳と雙方中圓墳なる特殊の形が存在して、規模の大きいものが、その孰れかに屬することを著しい特徴とする。二者は共に石築墳としては洋の東西を通じて他に類例のない特殊な墳形であつて、此の如き石塚は從來後藤君に依つて對馬下縣郡鷄知村に前方後圓形の三例の存在が報告せられてゐる外（第三十四圖）吾々の新たに調査

した同じ讃岐下笠居村中山の經塚石塚（第三十五圖二）を數へ得るに過ぎない。この事は、中で珍らしい雙方中圓形をした猫塚が、多數の室を有するものであることから、通有な石塚の場合に實例を見受ける最初の石堆に、段々と附加陪葬した結果、遂にかゝる特殊な外形をなすに至つたとする解釋を導いて、岡田氏の使用した枝塚なる名稱が新に注意せられる。併し遺跡の實際はかくの如く認めるにはあまりに整然とした者がある。即ち猫塚の外形は中央の圓丘から前後に均勢な方形部を造り出して一の纏つた形を示し、漸次追加造營したと解するに應はしからず、また不充分ながら吾々の求め得た內部の構造も中圓部に於ける石室相互の位置が大きな室を中にして相互に密接な關係を想定せしめて、當初から其の設計の下に營まれた事を示して居り、加ふるに、別な前方後圓墳なる形は本邦上代の盛土墳を特色づけるものとして、他に類例のない外容である事が明であるから、よし其の起源に就いてなほ問題はあるとしても、是等の形が右の土墳と密接な關係を持つたことが自ら考へられるのである。而して此の場合石船塚其他に於ける埴輪圓筒片の存在する事實は更に兩者の細部の合致を示すものとして、兼てまた我が上代の盛土

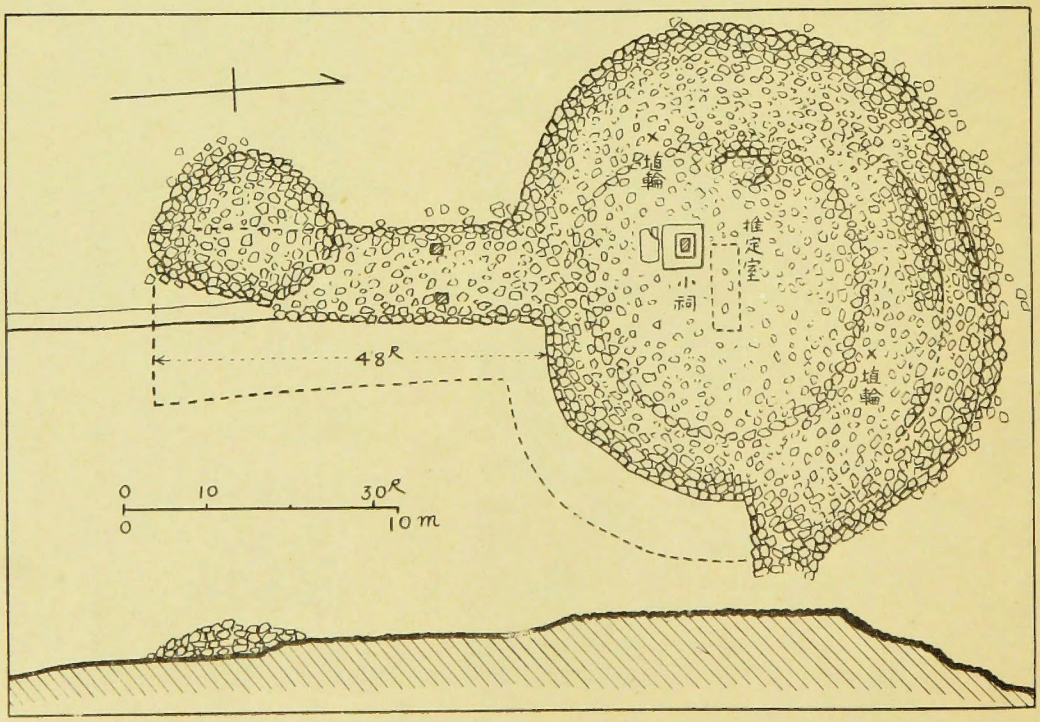
第三十四圖　馬對鷄知村石塚略圖　(Fig. 34)



第三十五圖 (Fig. 35)



(一) 大和國磯城郡櫛山古墳外形實測圖



(二) 讃岐國下笠居村中山經塚外形略測圖

第三十六圖　大和國磯城郡櫛山古墳

(Fig .36)

(一)北方より櫛山古墳遠望

(二)南方よりの近景

墳に大和國櫛山古墳の如き猫塚同樣の雙方中圓墳の存することが一層其の感を强めるのである。

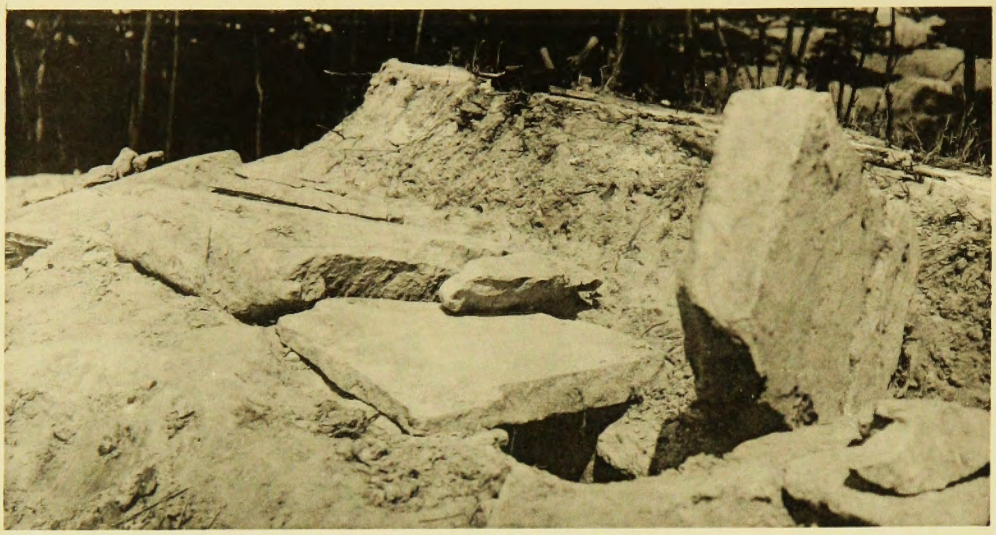
此の櫛山古墳は磯城郡柳本町の東方にあつて、崇神天皇陵の背後につゞき、山丘の尾を利用して營まれた宏壯な墳壟である。それは古くから顯著な前方後圓墳の例として、また後圓を葺くに美しい石英質の小礫を以てした點で世に知られてゐる。處が吾々の實測に依ると封土は第三十六圖の一で明な樣に[8]單なる前方後圓墳ではなくて、平野に向つて長く延びた前方部の外に、後圓部の背後の丘陵につゞく部分にも、方形の隆起を存し、もと湟が同部をも繞つた形迹があり、雙方中圓墳とも呼ぶ可き外形をしたものである。然らば近き將來各地古墳の外形に對する精密な調査が進行した曉に於いて、所謂前方後圓墳のうちから、なほ此の種の形のものが新に檢出區別せられる可能性があつて、そこに石塚に見る形との合致に緊密の度を加ふべきことが考へられる。尤も櫛山古墳の實際は猫塚の双方部の全然左右均勢であるのとは違つて、平野に向つた前方部に比して、背面の方が短く、此の形は或は山丘を利用するに當つて、最初に撰んだ後圓の位置の關係から、偶然生じた一の特異な例かとも考へられて、其の形を以て直ちに猫塚などと同一視し難い點がある。たゞし中圓から双方に延びた前方部の形が、其の各々に於いて所謂前方後圓墳に於ける前方部と全然規を一にする點から見ると、此の形を前方後圓墳と離れて考へることは難く、前者から何等かの理由で導かれた一の複合形式とすべき樣であり、前方後圓墳に於ける前方部が後圓に對して形の上で、其の正面たるの外容をとるものとすれば、此の類は前後に正面を有するより一層複雜な形態として解せられねばな

らぬ樣に見える。されば此の特色ある雙方中圓墳の外形は、一般の前方後圓墳の問題と離るべからざるものとして、將來考察せらるべきであらう。かくて本石塚群の外形と我が上代に通有な盛土墳との密接なる關係の肯定は、年代觀の上に兩者を同じ時代のものとする推定說を導くことになるが、それは次の內容の考査に於いて一層明確を加へるものがある。

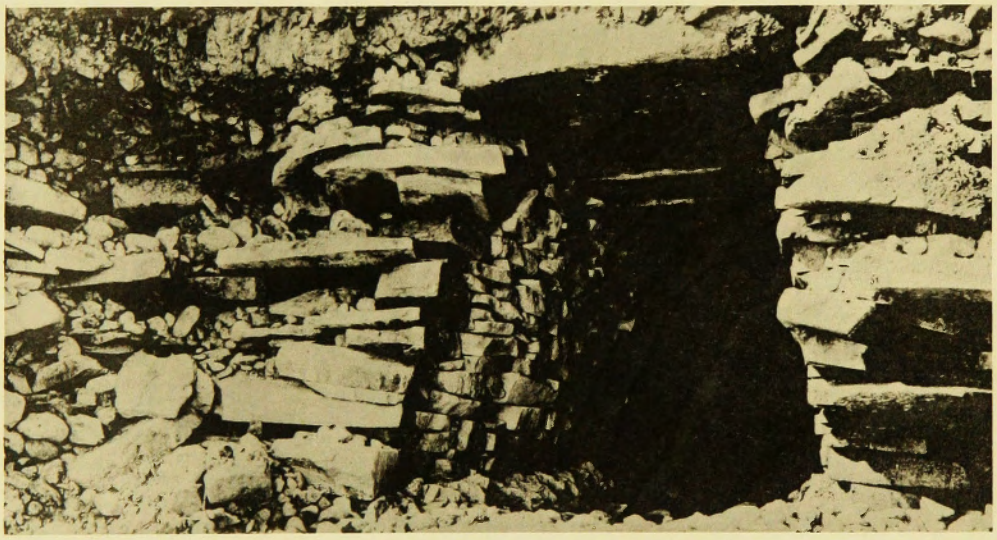
さて石塚の內部構造として、それを暴露した遺跡に見られる所のものは、大小、架構等の細部に若干の差違はあるが、通じて竪穴式石室に屬することは既に指摘した如くである。一體此の種の竪穴式石室は、其の構造の規模が割合に小さい點と、用材の關係等から破壞され易くて、爲に十年位前までは、古墳の石室と云へば、堅牢な橫穴式石室のみが注意せられ、時に遺存する此の類を以て時代の下るものとする解釋が行はれてゐた。[9] 處が近畿を中心とする支那古鏡を藏した上代古墳の調査の結果、竪穴式石室なるものが一の重要な構造として、石棺の或者乃至礫床、粘土槨等と共に宏壯な前方後圓墳の盛行の時代に、其の內部の主體をなしてゐたことが確められ、爾後續出する新事實と相俟つて、いまやそれが橫穴式石室と並んで古代に於ける二つの顯著な石室の形式をなし、[10]示すところ單なる「ピット」(竪壙)並に石金併用期に見る箱式棺との連系が考へられ、年代の上で橫穴式に先行するものであることが明瞭になつた。山城國綴喜郡八幡町西車塚古墳、[11]同郡飯岡の車塚古墳、[12]備中國都窪郡山手村寺山古墳、[13]甲斐國東八代郡下曾根村銚子塚古墳等[14]の中心にある竪穴式石室や、同じ構造のうちに石棺を藏置した丹波國多紀郡雲部村車塚古墳、[15]備中國邑久郡美和村築山古墳[16]等は、前方部に陪葬の同樣な造構を持つ山城國乙訓郡寺戸の大塚古墳、[17]和泉國仁德天皇大仙陵等と共に其の顯著な四五の例である。

第三十七圖　盛土墳に於ける竪穴式石室例

(Fig. 37)



(一)　河内國玉手村西山古墳石室



(二)　攝津國會下山二本松古墳石室

(三)　紀伊國岩橋千塚第四十七號墳石室

なほ古墳の外形は圓いが、副葬品から同時のものと認められる類に、河内國南河内郡玉手村西山古墳[18]の石室（第三十七圖の一）山城國綴喜郡飯岡のトヅカ、攝津國神戸市會下山二本松古墳[19]（同上の二）同板宿の古墳[20]等の石室があつて、其の數は頗る多い。是等の竪穴式石室の構造は明に本石塚に見る室と形式並に架構を同じくしてゐて、兩者の間に先後の別を附し難く、それが外形の合致と照應して營造年代が相同じく、引いてまた兩者の性質の上に益々密接な關係のあることを考へしめる。

内部構造に就いての右の記載から石船塚に一例を存するのみで、爲にやゝ特異の感のある石棺が、またこゝで顧みられることになる。既に詳記した樣に棺は角閃安山岩を以て作つた割竹形であつて、身に石枕を造附けた頗る精巧な式に屬し、一見竪穴式石室には應はしくない樣である。從つてこれから棺を後の重葬とする解釋を見受けるわけであるが、本來此の種の割竹形石棺は、船形石棺と相並んで我が國に於ける石棺中の古い二形式と考へられてゐて、其の間に系統上の連絡があり、[21]竪穴式石室等と相並んで、我が古式古墳の主體をなすことは今日學界一般に認められてゐるから、竪穴式石室の多い本石塚の間にそれが存在しても少しも矛盾する所はない。のみならず石船塚の棺はその中で石枕の造附けられた式で、同樣な細部を持つ棺は、船形石棺にあつては、同じ讃岐に木田郡三谷村丸山古墳、仲多度郡善通寺町遠藤山古墳、大川郡津田町岩崎山第四號古墳の諸棺、香川郡淺野村舟岡の石棺身、等の諸例があり、また丹後國與謝郡桑飼村蛭子山古墳の石棺、越前國足羽郡社村大字小谷發見の石棺、肥後國下益城郡杉上村吉野山頂の石棺等[22]各地に點々存在して、孰れも枕の式を同じくするものであり、其の讃

岐丸山、遠藤山、岩崎山、丹後蛭子山の諸古墳は皆石船塚と同式の前方後圓墳の主體をなして居り、蛭子山、岩崎山の兩棺は其の埋葬の位置が石船塚の場合と同じく、他方丸山並に遠藤山の棺は石船塚の棺と同じ鷲山出土の角閃安山岩で作られてゐる點で、いよ〳〵相互の密接な關係が認められ、石船塚に於ける右の棺と外形との本質的な關係を肯定せしめるものがある。なほ此の石船塚にあつて主體たる右の石棺の外に前方部の一部に陪葬の竪穴式石室の存在することも、土築の前方後圓墳に往々見受ける處であつて、是等の點が一層本石塚群の營造の我が古式盛土墳と並行してゐたことを考へしめる。

更にこれを發見遺物の上から觀るに、通じて見受ける彌生式土器の一群は舊日本の西半に濃厚な分布を示し、石器時代の後半から石金併用期を特色づける土器樣式として注意を惹くものがある。さり乍ら同系の土器がまた我が上代の墳墓から見出されることも明白な事實であつて、文獻に傳ふる土師器が此の系統の器を指すものであるとは、今や多くの學者の一致する見解である。從つて問題の土器の年代は器自體の示す形及び手法が是等の彌生式土器系列の孰れに當るかを考査して後、はじめて推定せらるべきものである。此の點からすると本石塚群の出土品は既記の如く、一方に古調を帶びた器形を存して後代の土師器とは違つてゐるが、他方史前遺跡の出土品に比べると、製作、燒成等に窯器としての進んだ技巧を示してゐることが明である。此の場合石船塚に多い埴輪圓筒片が右の土器と相似た作りであることから、從來混同せられてゐた事實が思ひ併される。

次に今日知られてゐる本石塚群出土の顯著な猫塚の遺物と上原氏の所藏品とに於いても、

その品目の示すところは我が古式古墳の副葬品と共通性の多いものである。卽ち鏡鑑、銅鏃、石釧、鐵刀劍、斧頭等は古式古墳の副葬品として普通に見る類であつて、たゞこゝでは玉類がなく、別に小銅劍の存することがやゝ特色をなす位である。其の筒形銅器鐵製鉇の如き遺品も從來發見例の多くない類であるが、亦古式古墳の或物に見出されることは既に解說の條に指摘した。尤も出土の品目中に銅製品の割合に多いことが、うちに小銅劍の含まれてゐることゝ、鏡に前漢鏡の存する點とから、一般的な右の同似にもかゝはらず、それ等を石金併用期の所產として、通有の古墳の出土品と區別するの可能性が別に考へられる。而してこの見方は他に石塚のうちに既述の樣に同じ石金併用期の營造に屬するものがあることに依つて實らしさを加へるのである。併し其等の一々の遺物の實際を改めて考察すると、右の興味ある解釋も事實と合致しない點が多い。次に其の主なものを擧げよう。

先づ銅鏃は石金併用期に現はれた遺物の一類であることは言ふまでもないが、同時に同じ鏃は上代の高塚營造期にも割合に廣く行はれたものでもある。本石塚出土例は是等の本邦に於ける銅鏃の形式中、所謂柳葉形の莖のある式で、其の銅質の佳良な點と相俟つて、進んだ形態を示して居り、從來の同式發見例は孰れも古式古墳の副葬品であつて中に山城乙訓郡妙見山古墳[24]、河內中河內郡樂音寺心合寺山古墳の樣な宏壯な前方後圓墳の出土品があり、また丸塚ではあるが伴出の古鏡から年代の同時にありと考へられる神戸市夢野丸山古墳[25]、周防都濃郡富田町竹島古墳[26]等にも類品を見受ける。同じことは筒形銅器に就いても認め得るのであつて、此の器の用途はなほ石突の類とする推測以上に出でないが、遺物自體の古式古墳との密接

なる關係は既に森本六爾氏の指摘したところであつて、改めて繰返すまでもない。本類に於いてはそれが朝鮮に多い笠形銅製品と形の類似を示す外、未だ內地の石金併用期の遺跡からの確實な發見例がなく、孰れも盛土墳の副葬品であり、別に遠江國赤佐古墳例の樣にやゝ時代の下つた出土品をも含んでゐるのである。

小銅劍身は長町氏報ずる所の一例を除いて、他に類品のない特殊なものとして、前二者に比べるとやゝ趣を異にする點がある。これは利器の形を取つてゐるのみならず、もと柄を着裝した形迹を遺す所から、北九州を中心として朝鮮半島にも濃厚な分布を示す銅劍銅鉾との關係を考へしめ易く、其の文化の波及に負ふ一の所產とする見方は確に傾聽すべき點がある。併し現在ではなほ實例に乏しく、またそれと銅劍銅鉾との間を結ぶ形式がなく、他方古式古墳に同式の鐵劍の存在するを見ると單に此の小銅劍のみに依り、上來の古式古墳とのすべての合致をすてゝ、直ちに銅劍銅鉾と同一文化階段の所產とする事は早計であらう。既記長町氏の云ふ山田村吉岡祠出土例が同じく古墳から出たと云ふ點も併せ考ふ可きである。是等と伴出した古鏡に至つては、其の大半が古式古墳の出土品と同式であることは解說の條に指摘して置いた。たゞ中に含まれてゐる一面の內行花紋精白鏡が問題となつて、全然同式のものが筑前三雲、同須玖等で銅鉾銅劍と伴出してゐる點から、小銅劍を是れと結びつけて、こゝに此の類と時代の下る鏡鑑との並存に對して猫塚の內部の構造が單一でなく、多數の室があつたことから、是等の室が漸次附加營造せられたに基く一の現象と解せられる。さり乍ら既に述べた如く猫塚の外形はかく見るにはあまりに整然としたものであり、且つ遺物が主として中

央の室から出たとせられてゐるから、いま俄かに右の見解を採り難い。他方これを多數の鏡鑑を出した大和佐味田寶塚、同新山古墳[23]等の例に見ても多數を占めてゐる同じ形式の遺品中に、また時代の古いものの併存する事實があつて、恰も此の猫塚に見る所と相似てゐる。されば內行花紋精白鏡の存在は埋葬當時に於ける古い鏡の傳世に依るものと解す可きであらう。同じ猫塚出土鏡のうちで鑄造の年代の精白鏡に次ぐ長宜子孫內行花紋鏡が、鈕孔乃至圖紋に磨滅があり、同じ現象は上原氏新收の獸帶方格規矩四神鏡に於いて一層著しく、これには破碎したものを更に修補使用した明徵を存していよ〳〵其の感を深くするのである。

以上論じた處から本石塚は其の築成の上に著しい特色を持ち乍ら、外形並に內容に於いて上代に廣く行はれた我が盛土墳中の所謂古式の類と同似を示し、從つて其の營造のほゞ同時期に屬することが推測され、同時にまた性質を論ずる上に一の基準を得たことにならう。いま進んで營造の實年代を考定せんとする際、如上の歸趨は從來論證せられた土築の古式古墳の年代說から類推する蓋然性を與へるものであり、同時にまた猫塚發見遺物の推定年代が一般の考定に役立つものとして考へられるのである。

我が古式の宏壯な盛土墳が支那の六朝中期に當る應神仁德兩天皇陵で代表せられてゐることは著名な事實であつて、近時の日本考古學の發達の結果は、是等の盛土墳の內部の構造に種々の類を存し、それを型式學上から見ると右の應神仁德天皇代の示す形式は竪穴式石室內に長持形石棺を藏した一の整美なものであり、別にそれに先立つた種々の形式段階のあることが想定せられてゐる。從來研究者の特に力を致した點は一面此の形式序列の相互關係に

對して動かない徵證を加へる事であり、また同時に其の各の實年代を比定する點にあつた。吾々は早くそれ自らの年代を確め得る支那古鏡を取つて右の分野の考察に從ひ、出土の鏡に依つて遺跡の時代を攷へ、其の結果大體に於いて形式の先後と並行してゐることを推知し得た。[29] 而も一方に地方的な形式として考へられるものが存し、また一墳の出土品に上述の如く種々の形式を含む場合があり、此の後者で時代の最も新しい遺品を以て下限と見る吾々の假りに採用した年代觀には、なほ方法の上で議す可き點を存し、加ふるに資料とした鏡は支那からの舶載品で、それ自體に傳世の事實を考へしめる點があるから、嚴密な意味では、時代を異にする遺品の並存の場合、其最古のものに遺跡の上限が示されるに過ぎないわけである。從つてよし上代に於いて有力者の間に一般に遺物を副葬する風習があつたにしても、その副葬品から遺跡の詳しい實年代を求めることには、なほ多くの考慮す可きものがあつて、今日ではなほ應神仁德朝を中心とする盛行期と、それに先立つ遺跡との別を大體求め得ると云ふ程度にとゞまつてゐる。

他方猫塚の出土品からする實年代の推測またうちに種々の遺品を存することではあるが、それに直接役立つ所の資料なるものは、やはり鏡鑑に限られてゐるから、右に論じた注意が當然其の上にも拂はるべきである。從つて本遺跡に緊密な遺物であり乍ら、單にそれだけでは一部人士の說く樣に「讃岐御殿山は前漢代の鏡も出土し、また後漢三國代に降るべきものを出したことに依つて、これを前漢代から三國代あたりに比定し得られる」とは簡單に斷じ難く、鏡から明に言ひ得る所は出土の最古の遺品から猫塚の營造が如何に早くとも前漢代を遡らな

いことのみであり、其の詳細な年代說は前者と對比して一層廣い見地から考察せらるべきである。いま此の點から本石塚群の外形、內容等に亘る諸特徵に就いて上に指摘した盛土墳との共通の事實を考へ併すと、其の外形にあつてはいまだ俄かに古式墳中に於いて先後の別を認め難いものであるが、內容では內部を暴露した遺跡に通有な竪穴式石室は、上に指示した最盛期の內部構造と接觸してゐると共に、石船塚の主體たる石棺は形式の上で同期の長持形石棺に先行した點が知られる。更に小銅劍、銅鏃、筒形銅器等銅製品の存在が目立つてゐて、既に繰返した樣にそれ等は石金併用期の文物とはなし難いが、其の性質上同文物の名殘と見るべき點があり、右の見地から是等を藏した猫塚の古調を帶びた事がまた考へられる。併し同種遺物の或物は最盛期からなほ下つた時期と思はれるものからも出てゐて、それも概括的に云ひ得る程度であり、從つて其等から本石塚の營造を以て古式墳最盛期以前とする絕對的な據所とはなし難い。究極するところ現在では、石塚中には稍々年代を古く遡らし得可き諸點を含んでゐることに誤りはないとしても、單なる形式の同似を以て數多い遺跡のすべてを最盛期以前の造營とすることには問題があつて、嚴密な意味からは古式古墳の行はれた時期を以て本石塚群の實年代の限界とするより外はないのである。

【註】(1)笠井新也氏「石塚の研究」(前出)

(2)圖示した一個はロクマリアケ (Locmariaquer) にある Er Hroeck の石塚であつて、外形は圓いが、本石塚の主な類に相比すべき大きな規模のものである。中心に横穴式石室がある。此の寫眞は京城帝國大學の藤田教授の撮影に係る。

(3)圖示したものは其の Clochan na Carriage の石塚である。Prof. R. A. Macalister; Ireland in Pre-Celtic Times (Dublin & London, 1921) から取つた。

(4)後藤守一氏「對馬營見錄」(二)(『考古學雜誌』第十三卷第三號所載)參照。

(5)此の遺跡は昭和二年の發見に係る。其の石塚の性質に就いては調査者たる小泉顯夫君の教示に據る。なほ出土品に就

いては朝鮮總督府『博物館圖鑑』第四輯を見よ。

(6)これまた小泉顯夫君の教示に基く。挿入の寫眞は同氏の寄與せられたものである。

(7)後藤守一氏『墳墓の變遷』積石塚の條參照。

(8)本墳の實測圖は昭和六年四月廿九日に作製したものであつて、當時の本大學考古學專攻の學生並に有志諸君の協力に成る。此の墳は段築の形迹が顯著で、中圓部は西方の前方部と共に明に三段から成つて居り、背面の方部は二段である。其の中圓の主體は破壞されたらしいが、竪穴式石室であつたと認むべき形迹がある。

(9)高橋博士「喜田博士の上古の陵墓を讀む」(『考古學雜誌』第四卷第七號所收)等參照。

(10)高橋博士『古墳と上代文化』參照。

(11)梅原「八幡町西車塚」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第一册所收)

(12)同「飯ノ岡ノ古墳」(同報告書第二册所收)

(13)梅原「備中國都窪郡の二三墳墓に就いて」(『歷史と地理』第十五卷第一號所載)

(14)上田三平氏「銚子塚を通じて觀たる上代文化の一考察」(『史學雜誌』第三十九編第九號所載)及同氏「銚子塚古墳」、(『史蹟調査報告』第五輯)參照。

(15)八木奘三郎氏「丹波國多紀郡雲部村の古墳發見品」(『東京人類學會雜誌』第十七卷第百八十九號所載)、梅原『久津川古墳研究』等參照。

(16)大正十三年一月の實査に基く。これはいま帝室博物館に所藏する王氏作畫象鏡を發見した古墳であつて、形式は丘陵麓を利用して營んだ大形東面の前方後圓墳に屬し、竪穴式石室は其の構造主體として、後圓の中央部に主軸と並行した位置にある。室は長さ九尺餘、幅六尺弱、高さ三尺五寸内外あつて、割石を以て壁を架構し、うちに古式な家形石棺を藏してゐる。此の室は既に大部分破壞せられたが、棺の兩側に沿ふてなほ壁の下部の殘存が認められる。

(17)梅原「乙訓郡寺戸ノ大塚古墳」(『京都府史蹟勝地調査報告書』第四册所收)參照。當時は室の南半が埋沒してゐて究めることは出來なかつたが、昭和七年春實査の際、同部が新に暴露してゐて、室が多くの例の如く細長いものであることを確めた。

(18)小川五郎水野清一兩氏「河内國玉手山西山古墳調査報告」(『考古學雜誌』第十九卷第八號所載)參照。

(19)辰馬吉井渡部三氏「會下山二本松古墳及び經塚」(『兵庫縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第五輯所收)

(20)梅原「神戸市板宿得能山古墳の調査」(『歷史と地理』第十四卷第四號所載)

(21)故高橋博士「石槨石棺及び壙を論ず」(『考古學雜誌』第五卷第十號所載)、後藤守一氏『日本考古學』等參照。

(22)是等に關しては本編の附錄本邦石枕造附石棺聚成に解說する所を見よ。

(23)例へば註(17)の山城寺戸大塚の如き其の一例であり、和泉大仙陵でも前方部に石棺を藏した石室の存在が知られてゐる。

(24)『京都府史蹟勝地調査報告』第三輯所收「大枝村妙見山古墳の調査」參照。

(25)梅原「神戸市丸山古墳と發見遺物」(『考古學雜誌第十四卷第五號所收)

(26)島田貞彦君「周防國富田町竹島御家老屋敷古墳」(同誌第十

六卷第一號所載）

(27)森本六爾君『川柳村將軍塚の研究』及び第二章第三節註(19)參照。

(28)梅原『佐味田及新山古墳研究』

(26)同「考古學上より觀たる上代の畿內」（『考古學雜誌』第十四卷第一第二兩號所載

第三節　石塚の性質と其の古代墓制史上の位置

本石塚群營造の實年代は我が上代古墳墓年代考定の困難と聯關して、今日なほ其の詳細を究め難いものがあることは既述の如くであるが、同時に其の外形、內容に於いて土築の古式古墳と顯著な共通點を示し、それ等から同時代に營まれたものとしてほゞ誤りなかるべきことを明にする處があつたと信ずる。然らば土築墳の盛行してゐた時代に如何にして此の如き石塚が並行したかと云ふ點が、本邦古代墓制史の研究上から問題となつて來て、それが本石塚の性質論をなすものであることが認められる。

此の問題に就いては既に觸れた如く、これを他の地方に遺存する若干の石塚と結びつけて、其の發展上の一の表はれと見る解釋と、それとは反對に我が國に於ける石塚の分布の甚だ限られた事實から、類例を廣く極東の諸地方に求めて、其の波及に基く現象とする說とがあつて、後者はそれを石金併用期とする時代觀と關聯して考へられてゐる。さりながら事實に則して考察すると、本石塚の出現に對して、兩說とは別に、主として一地方に於ける特殊の事情に基くとする見方がまた許されるのであつて、かへつて此の解釋に吾々を首肯せしめるものがあ

る樣に思はれる。いま論述を是等の解釋如何に進めるに當つて、其の性質の上から比較せられてゐる本邦に於ける石塚をはじめ、それと連關する遺跡を一瞥するの要がある。

我が國の石塚は初にも記した樣に、盛土墳に較べると類例の寧ろ稀なものであつて、其の點から本遺跡が著名となつたわけであるが、早く故坪井博士、鳥居博士、故ガウランド教授等が各實例を報告せられて以來、其の存在が學界に知られて居り、大正の初年笠井新也氏の調査に依つて更に類例を增した。其の分布は本石塚の所在地たる讃岐をはじめ、阿波、攝津、陸前、相模等が擧げられたことであり、更に爾後の調査に依つて讃岐、阿波等に於ける遺跡の增加と共に、對馬、肥前、長門等でも新たに石塚が見出されて、今や局部的にやゝ濃厚な分布狀態を示すことが明確になつてゐる。併し既に笠井氏も指摘した如く、是等の遺跡は石で以て築いた塚と云ふ點でこそ一致してゐるが、其の用材をはじめとして、外形、內部構造などに種々の類があつて各の間に一致を缺くものである。現在の知見から試みに其の著例を數へると、對馬白岳の遺跡は丘陵の一部に十二三群集したもので、積石は孰れも一坪內外の小規模であり（第三十八圖の一）、內部には竪穴式石室に密接して箱式棺を置いたものゝ如く、出土品は細形銅劍をはじめ結紐形銅器、角形銅器其他種々の類を存して、時代が遡ると考へられる點が多い。[1] 處が同じ對馬でも鷄知の石塚は海岸に近接した地にあつて（同圖の二）、三個共に前方後圓形に屬し、箱式棺を主體としたものであり、副葬品は鐵鏃、刀身、碧玉製管玉、陶器等で、前者とは趣を異にする。肥前に於ける石塚は唐津港の沖二浬許りの神集島に存して、島の西方宮崎岬の海岸に近く、小形の塚が密集して居り、其の一部に十尺平方位の圓形の地を劃し、高さ五尺內外の積石垣を廻らして一種の磐境

第三十八圖　本邦西部に於ける石塚例

(Fig. 38)

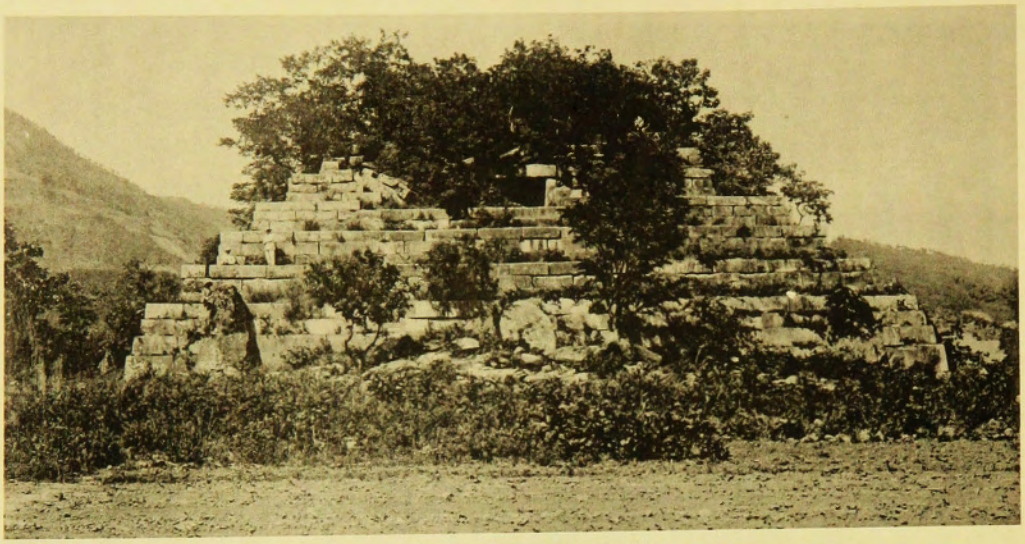
(一)　對馬國佐須奈村白岳石塚

(二)　同　國鷄知村石塚(所在地及積石一部)

(三)　肥後國唐津神集島石塚

第三十九圖　滿洲輯安縣古墳及南鮮支石塚

(Fig. 39)



(一)　滿洲輯安縣將軍塚

(二)　滿洲輯安縣山城子兄塚

(三)　朝鮮大邱府一ドルメン下の積石

をなし、中に小祠を祀つてゐる（同圖の三）。長門國阿武郡見島ジゴンボの遺跡もやはり海岸に石塚の密集した著しいもので、塚の總數二百に上ると云ふ。尤もこれは神集島の例が內部構造の不明であるとは違つて、徑四五間の丸形積石のうちに、單簡な横穴式石室を藏し、其の或物から副葬品として、時代の新しい陶質器、小刀子其他鐵器類が見出されてゐる。[2] 阿波の石塚は名東、名西、板野、美馬の諸郡に散在する。中で既に記した名東郡加茂名村地藏山石塚は著名であつて、徑約二十間許りの圓形の積石の內部に一個の主石室を繞つて七個の室の存することが報告せられてゐる。板野郡大寺村聖天山石塚も亦直徑十餘間の和泉砂岩の積石の內部に大小三個の石室があつて、鏡、刀劍、土器等を出したと云ひ、名西郡石井町氣延山の石塚も一墳二個の單簡な石室內に彌生式系の甕を藏して、それ等に自らなる共通點がある。[3] 石清尾山以外の讃岐に於ける石塚には、海邊に近く位置した規模のあまり大きくない綾歌郡宇多津町聖通寺山、大川郡津田町琴林公園內の俗稱十三塚、同鶴羽村ノオウ神社古墳等をはじめ、香川郡上笠居村小學校西方山頂群集墳、同下笠居村中山横立山東邊の經塚等が主なものである。[4] 此の最後に擧げた下笠居の經塚古墳は既に指摘した前方後圓の形をしたものであつて（第三十五圖の二）、現在前方部はやゝ形を損じてゐるが、後圓の背部には明に段築の形迹をとゞめ、また積石の間にもと埴輪圓筒を樹てた樣であり、內部主體の構造は竪穴式石室で、それが後圓の中央に、主軸と直角の位置にあつたと傳へられ、示すところ石清尾山石塚の大形なものと符節を合せた樣である。而して此の塚の所在地は上笠居の遺跡と共に角閃安山岩の露出地域で、其の用材の同じ事が併せて注意せられる。本州中部以東の石塚では早く知られた相模中郡比々多村字三宮の遺

跡が、河石を積んで作つた群集墳で、歪んだ形のものもあるが、概して形が圓く、うちに横穴式石室があり、刀劍、金環、玉類、陶質器、素燒土器等を副葬してゐて、これは寧ろ土築墳の後期の特徴を具へた類である。[5] 陸前加美郡色麻村石塚また同樣な圓塚の群集で、內部に長方形の石室を藏し、其の一から人骨に伴ふて刀劍、銅環、勾玉等が出たと云ふ。[6] なほガウランド教授に依るに信濃の例は松代にあつて、直徑百〇五呎、高さ二十三呎の大形に屬し、うちに石室を有するものと傳へてゐる。[7]

次に海を隔てた地域に於ける石塚としては、既述關東州旅順の遺跡が特に注意せられてゐるが、朝鮮でも其の內容から石金併用期と認むべき相似た遺跡が北方の平安北道渭原、忠淸北道鳥致院等から發見され、[8] また南朝鮮に廣く分布する支石塚にも、大きな笠石の下に一種の積石があり、うちに簡單な竪穴式系統の構造の存在が小泉顯夫君等の調査で明となつた。[9] (第三十八圖の三)。併し構造上一層特色ある石塚は、蓋し平安南北道から滿洲の一部に濃厚な分布を示す高勾麗時代の墳墓であらう。滿洲輯安縣にある無數の遺跡は、うちに將軍塚(第三十九圖の一)千秋塚、山城子兄弟兩塚(同圖の二)[10] 等の如く、外形が整美な方形の段築から成り、中に横穴式石室を保藏するものを含んでゐる。なほ相似た石塚は京畿道廣州郡石村里にも存して(第三十三圖の四)、これは百濟の遺跡と考へられて居り、[11] 南朝鮮でも慶州に於ける古新羅盛時の大形墳は、木室を中心にして積石がそれを被ふた一種の石塚であり、[12] また日本海中の鬱陵島にある石塚は大きな横穴式石室を有し、外側の築成の石垣狀であることが鳥居博士、谷井濟一氏等に依つて確められてゐる。[13]

さて如上本邦各地に點在する石塚の實際は外形、內容共に互に相同じからず、其の間に種々

の類を含んで、營造年代の先後を想定し得るものがあるから、これ等を形式順に配列し、それに我が國にも古く石塊を堆積して一種の靈域を表示する思想があつたとする推測を加へ、遺跡自體の發展を考へることは可能であり、石淸尾山の石塚群を以て、其の最盛期に於ける一の表はれとする見方がまた許されるわけである。併し本來遺跡の所在は甚だ局限せられてゐるのみでなく、互に相離れた地域に點在して居て、此の上になほ將來若干の同樣遺跡が檢出されたとしても、是等を結びつけて、それのみで一の系統を考へるには餘りに相互が孤立的であり、更に形式の先後の如きも、仔細に觀ると遺跡自體の上にかゝる發展を取つたとする必然的な徵證がなく、實は上代の盛土墳に關する知識を土臺として、それとの連關からはじめて可能なものに過ぎない。從つて本邦に於ける石塚のみの特殊な發展段階として此の石塚群の出現を說明することは事實上困難であらう。

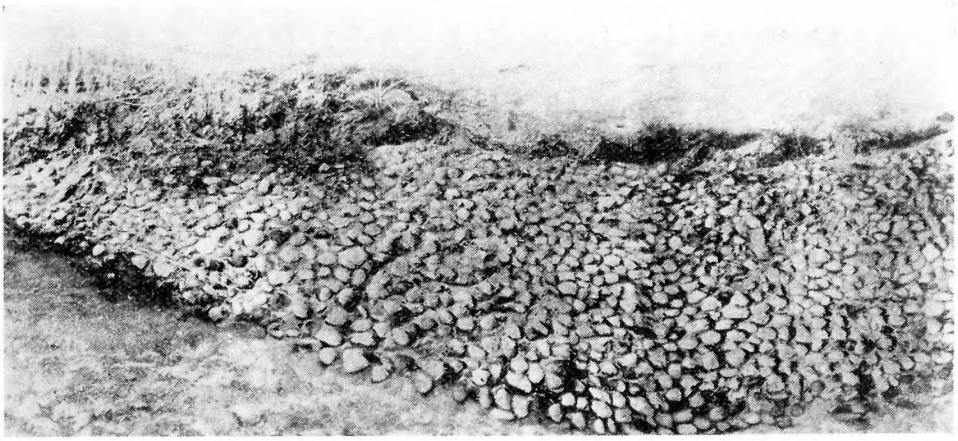
本石塚の出現を以て自餘の遺跡と併せて近接した大陸墓制の波及に基くとする見解は、據る所の年代觀の論據に於いて、未だ俄かに首肯し難いことは旣に述べたが、上記の主要な石塚が對馬、肥前、長門、讃岐、阿波に存して、其が恰も韓半島から瀨戸內海への水路を結ぶ諸國の一部に當つてゐると云ふ地理的條件に加へるに、最も半島に近い對馬には白岳の如き古い遺跡があつて、うちに韓地の遺跡との連系を求め得る遺物を藏し、また最も離れた讃岐に此の規模の大きくて、前者より時代の下る遺跡の存する事などは、波及の年代にゆとりを置くと前者に較べてより傾聽すべき所說と思ふ。併しこれも亦右の見地からのみでは本石塚の特殊な外形、而も整美なその出現が合理的に說き難く、なほ石塚の所在が地域的に局限せられ、且つ土墳に

比して頗る少數であることも、此の樣な系統の波及と見るには疑問がある。こゝに至つて石清尾山の石塚がすべての點で古式古墳と同似を示し、營造年代また並行したと認むべき事實が一層意識せられて來て、同じ點が自餘の石塚の場合にも見られることから、是等を以て我が高塚營造期に於ける特殊な事情に依り、盛土に代へるに石を以てした一形式ではないかとの推測を生ずる。そして此の特殊な理由の解釋が本石塚の性質を明にするものであることが新たに考へられる。

いま石清尾山石塚の場合に於いて、右の點で注意せられるものに所在地の地形と地質とがある。既に序說に記した樣に石清尾山塊は高さ二百米突内外の急峻な山丘であつて、地質は花崗岩類の基盤上を熔岩で覆ふたものとして、現在なほ所々に岩盤が露出する外、全山殆んど其の風化に依つて生じた大小無數の石塊で充ちて居り、傾斜面に若干の土壤地帶を見るに過ぎない。されば此の高峻の地が墳墓の地として撰定せられた際、それが盛土の宏壯な墳壟を營む時代にあつても、同じ類を土で築造するのは勞力其他の點で困難なことは太だ明であるから、此の場合手近な石塊を以て土に代へて墳形を造ることの利便が考へられたであらうとする推測は極めて自然である。而して當代に何等かの意味で、塚を石で築くと云ふ思想が傳へられてゐたとすれば一層それが適切である。吾々は右の自然な推測に本石塚存在の主な因由を置く可きであることを思ふのである。換言すれば所在地の特殊な地理的事情に依つて表はれた盛土墳の一の變形として、其の性質を解することに外ならぬ。此の場合石清尾山上に於ける石塚の分布狀態が石塊の多い地區とほゞ一致し、土壤の發達した地帶にはこれを

見受けず、其の地域に時代の下る盛土墳が別に存する事は、其の然る所以を強めるものであり、更に他面に於いて、本石塚自體の示す古式墳との並行的事實のうち、特に整美な前方後圓形にして、積石では其の必然的な存在理由を見出し難い埴輪圓筒の存する點が、其の原形が土築であつたことを示し、また石船塚にある石棺と同一の石材を以て造作し、且つ形式上密接な關係のある石枕造附の石棺が、讃岐の他の地方で宏壯な盛土墳の主體となつてゐる如きも、如上の性質觀に依つてはじめて正しく理解されることである。こゝで吾々はまた相似た地質の香川郡に於ける上下笠居村の遺跡が同一の構造を示し、特に下笠居村の經塚の埴輪圓筒を伴ふた前方後圓墳であることが、此の見解の誤らざる傍證をなすものとして、兼て對馬鷄知の同樣の遺跡をはじめ、肥前、長門等の石塚が孰れも海岸に近く位置し、それ〴〵に所在地の地理的條件に密接なる關係を考へしめる[14]點が想起せられるのである。かくて右の考察から遺跡の實際を顧みるに、其の段築でやゝ特異な外觀をなしてゐるとはいへ、それは實は石塊を以て前方後圓などの複雜なる形を寫し營む際、若しくば大形の石積みを作る爲の技術的な必要から生じたものと見られて、土築の前方後圓墳に於ける段築よりも一層必然的なそれ自體の構造上の表はれとすることが考へられる。

たゞこゝで誤解を避ける爲に記して置きたいのは、如上の所論が、是等の石塚を以て外來の影響と全然無關係な存在とするものでないことである。我が上代に於ける金屬器の文化が大陸の文物の波及に負ふたもので、其の影響は程度の差こそあれ、諸般の文化所產に表はれてゐることは改めて說くまでもない。高塚の營造の如きも其の一つと見る事の疑ふ可からざ



第四十圖　上野赤堀古墳前方部側面の葺石　(Fig. 40)

以上、それと連關して廣く世界に分布する石を以て塚を築くの思想が、獨り半島から全然我が國に傳はらなかつたとは何人にも斷じ得ないであらう。彼の古式の盛土墳の外部を葺くに礫石を以てした設備の如き、其の原形を遺存するものにあつては一見石塚と外觀を同じくすること第四十圖の例の樣である。(15) よしそれは封土の崩壞を防ぐこと等に直接な理由が置かれてゐるとしても、此の根底にかゝる思想の背景を認めることをまた考へしめるものがある。されば吾人の所論は從來の直接的な半島石塚との連鎖の肯定に代へるに、本邦高塚營造期に於いて所在地の地理的條件に其の特殊な石塚出現の主な理由を見んとするに外ならぬ。此の點に於いて古朝鮮の高勾麗時代の墳壟が外形、內容の漢墓の制を襲ひ乍ら、輯安縣を中心とした遺跡にあつては、本來の漢墓乃至平壤附近の同代の墳壟の盛土であるのとは違ひ、石塊を用ひて段築をなした、一見特異の外觀を取つてゐることがまた所在地の環境の然らしむるものとして、兩者共通に段築の發達してゐるのは、石塊で築く際自ら生ず

技術的な當然さである。而も外形に別個な特色の現はれてゐることはその各々の直接據る處の墓制に負ふ所あるを思はしめて、一層廣い見地からする妥當性を示すものとすることが出來よう。果して然らば一見我が古墳のうちで特異な觀のある本石清尾山石塚群は、その上に働いた石を以て塚を築くと云ふ概念的な思想は、これを外來的なものとしても、現實では古式墳墓營造盛行の環境のうちに、地方的な特殊の事情に基く一の表はれとして、そこにまた多くの石塚と違つた遺跡自體の別個な性質を持つてゐることが理由づけられるのである。かくて後論の初に擧げた複合的な其の構造が、古式古墳の一形式であることになつて、それが現に認められつゝある墓制の地方的な差異に對し、顯著な一例をなすものとして、其の結果が自餘の類の考察にも寄與すべきことを思ふのである。

【註】(1)後藤守一氏「對馬發見錄」(二)(前出)參照。第三十圖に載せた是等の遺蹟の寫眞は孰れも氏の撮影に係るものである。

(2)三輪善之助氏「長門見嶋の遺跡」(『考古學雜誌』第十四卷第三號所載)及び匹田直氏外四氏「阿武郡見嶋文化の研究」(『山高鄉土史研究會考古學研究報告書』呂覽紀念號所收)

(3)阿波の石塚に就いては既に引用した鳥居博士、笠井氏の論文並に同じ笠井氏の「阿波に於ける石塚及び方狀石籬」(『考古學雜誌』第十四卷第二號)等參照

(4)岡田唯吉氏の既出の報告參照。其の下笠居村經塚の實際は昨年九月四日實査した結果に基く。

(5)『東京人類學會雜誌』第百六十九號坪井博士報告及び同誌第廿七卷第三號所載大野雲外氏「ケールン」に就て參照。大野氏に從ふと同樣の石塚は伊豆國サキバラにもあると云ふ。

(6)前出笠井新也氏「石塚の研究」に依る。

(7)Prof. W. Gowland; The Dolmen and Burial Mounds in Japan (Archaeologia, Vol LV. 1897) p. 451

(8)此の鳥致院附近の遺跡は昭和の初年に偶然見出されて、總督府博物館の小泉顯夫君の調査を經たものである。同君に從ふと積石の中央に一種の竪穴式石室があつて、內部の副葬品として石劍・石斧・石鏃等の磨石器と、素燒土器との存在が擧げられてゐる。

(9)圖示したのは大邱府中學校の附近の一例である。調査者小泉君に依ると、笠石下の積石の間に單簡な竪穴式石室の輪廓を遺存して、うちに石鏃、素燒土器片があつたと云ふ。同樣のものは慶州附近にも見受けるとの事である。是等の詳細は近く公にせらるべき小泉君の報告を待つて明にせられるであらう。

(10)E. Chavannes; Mission archéologique dans la chine septe-

ntrionale, 鳥居龍藏博士『南滿洲調査報告』『朝鮮古蹟圖譜』第一冊及び關野博士「滿洲輯安縣及び平壤附近に於ける高句麗時代の遺蹟」(『考古學雜誌』第五卷第三號第四號所載)參照

(11) 朝鮮總督府『大正六年度古蹟調査報告』所收、谷井委員提出略報告參照

(12) 濱田博士、梅原『慶州金冠塚と其の遺寶』(上)、梅原『慶州金鈴塚飾履塚發掘調査報告』等參照

(13) 此の鬱陵島の石塚の實際は谷井濟一氏の談話、並に野守健氏の示された其の一の實測圖に據る。而して時代は新羅とせられてゐる。

(14) 此の事は既に長門見嶋の遺跡の場合に調査者が考へ及んでゐる。卽ち上引の匹田直氏外四氏の研究論文に同嶋の石塚が他と關係を求め難く、所在地の地質的條件が其の存在の主因と見るべき獨特のものと說いてゐるのである。

(15) 葺石の原形を最もよく遺存した圖示の例は、上野國赤掘の前方後圓墳であつて、前年東京の帝室博物館で發掘調査を遂行し、興味ある成果を收めたものとする。報告の公刊に先立つて、此の結果の一部を示す寫眞を揭げ得たことは後藤守一氏の厚意に依る。